

上村田小中遺跡

•

1988年3月

茨城県那珂郡大宮町教育委員会

上村田小中遺跡

序

この度、上村田小中遺跡発掘調査報告書が刊行されることになり、まことに喜びに耐えません。

大宮町は、久慈川と那珂川にはさまれた丘陵で、両河川による河岸段丘上に立地し、古くから多くの人が住みついて伝統的な芸能や文化財、更に100余りに及ぶ遺跡があり、私たちの祖先の生活や文化を今につたえております。

このたびの発掘調査は、関係された方々の深い研究と体験にもとずき慎重に進められたため、私たちの先人たちの姿が解明されましたことは、誠に欣快に耐えないところであります。

私たちは、この調査報告書によって祖先の偉業をしのぶことができると共に、文化財に対する認識が一そう深まり、文化財愛護の精神、郷土を愛する心を培う上で、貴重な資料となりましたことに心づよく存じます。

また、発掘調査にあたりまして種々のご配慮をいただきました、日輪ゴム工業株式会社、土地開発公社に対しまして深甚なる感謝を申し上げます。

最後に、発掘調査、報告書刊行にあたられました各位に対し、重ねて心から感謝の意を表し、この報告書がよりよく活用されることを心からご期待申し上げます。

昭和63年3月

大宮町教育委員会

教育長 海老根 フ ミ

序

当社は、大正3年5月に設立本社を兵庫県神戸市に、工場を姫路市に置き姫路工場を主軸に自動車関係のゴムホース等、ゴム製品の製造販売をしております。

自動車産業の急激な伸びのため姫路工場が狭隘となり、納入先の主体が関東地区という特殊事情を考慮しかねてより関東地区に工場進出を計画中のところ環境その他諸条件に恵まれた大宮町大字上村田字小中が候補地にあがり進出を決定いたしました。

しかし、建設予定地が貴重な遺跡と判明したため大宮町教育委員会に発掘調査を依頼し発掘調査が、完了いたしました。

当遺跡は、一級河川玉川に面した平坦な台地にあり私達の祖先が安住の地として選んだ好条件の地であります。

本調査によって先人達の生活や文化を理解する上に少しでもお役に立てば幸いです。

最後に調査全般にわたり大変お世話いただいた大宮町教育委員会に感謝申し上げまするとともに調査団長として日夜ご奮闘いただいた立正大学講師丸子亘先生ほか調査員のご苦勞に深甚なる敬意を表し序文といたします。

昭和53年3月

日輪ゴム工業株式会社

取締役社長 横 田 周 作

(調査当時)

凡 例

- 1 本書は、昭和52年8月1日から11月10日にかけて発掘調査された茨城県那珂郡大宮町上村田字小中943ほかに所在する上村田小中遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は日輪ゴム株式会社の関東工場建設に伴って実施されたものであり、大宮町土地開発公社が上村田小中遺跡発掘調査会を組織し、立正大学講師丸子亘氏に調査担当を依頼して実施したものである。
- 3 発掘調査は協議によって開発地域の大部分が緑地帯として保存されることになったので、工場敷地および駐車場の一部について実施された。
- 4 遺構の調査および遺物のとりあげは調査順位に遺構番号を付して行なったが、報告書の執筆にあたって遺構番号を整理したため写真図版の番号と異なるものがみられる。また、挿図中の標準レベルは57.00mである。
- 5 本書の作成は、遺物整理の途中で調査担当者の丸子亘氏が逝去されたため瓦吹堅氏等の御協力を得て大宮町教育委員会が実施したものであり、そのほか多くの方々に発掘調査以上のご協力をいただいた。文末ではあるが感謝の意を表したい。

協力機関及び協力者(敬称略)

茨城県教育庁文化課 茨城県立歴史館 水戸市立博物館 大森信英 高根信和 阿久津久
川井正一 瓦吹 堅 市毛美津子 増田逸朗 福田健司 服部実喜

目 次

序	大宮町教育委員会教育長	海老根	フ ミ
序	日輪ゴム株式会社取締役社長	横 田	周 作 (調査当時)
凡 例			
本 文 目 次			
挿 図 目 次			
図 版 目 次			
I は じ め に	-----		1
II 遺 跡 の 環 境	-----		2
1 地 理 的 環 境	-----		2
2 歴 史 的 環 境	-----		2
III 遺 構 と 遺 物	-----		4
1 豎 穴 住 居 跡	-----		4
2 調 査 区 出 土 の 遺 物	-----		56
1) 土 器 類	-----		56
2) 墨 書 土 器	-----		61
3) 鉄 製 品	-----		62
4) 土 製 品	-----		64
5) 石 製 品	-----		64
IV ま と め	-----		67

上村田小中遺跡発掘調査会組織

図 版

插 図 目 次

Fig. 1 小中遺跡周辺部	3	Fig. 26 第13号住居跡出土遺物(2)	39
Fig. 2 第1号住居跡実測図	4	Fig. 27 第14号住居跡実測図	40
Fig. 3 第1・2・3号住居跡出土遺物	5	Fig. 28 第15号住居跡実測図	41
Fig. 4 第2号住居跡実測図	6	Fig. 29 第14・15号住居跡出土遺物	42
Fig. 5 第3号住居跡実測図	7	Fig. 30 第16号住居跡実測図	43
Fig. 6 第4号住居跡実測図	9	Fig. 31 第17号住居跡実測図	44
Fig. 7 第4号住居跡出土遺物(1)	11	Fig. 32 第17号住居跡出土遺物	45
Fig. 8 第4号住居跡出土遺物(2)	12	Fig. 33 第18号住居跡実測図	47
Fig. 9 第5号住居跡実測図	13	Fig. 34 第18号住居跡出土遺物(1)	48
Fig. 10 第5号住居跡出土遺物	15	Fig. 35 第18号住居跡出土遺物(2)	49
Fig. 11 第6号住居跡実測図	17	Fig. 36 第19号住居跡実測図	51
Fig. 12 第6号住居跡出土遺物	18	Fig. 37 第20号住居跡実測図	52
Fig. 13 第7号住居跡実測図	20	Fig. 38 第20号住居跡出土遺物	52
Fig. 14 第7号住居跡出土遺物	21	Fig. 39 第21号住居跡実測図	53
Fig. 15 第8号住居跡実測図	23	Fig. 40 第22号住居跡実測図	54
Fig. 16 第8号住居跡出土遺物(1)	24	Fig. 41 第23号住居跡実測図	55
Fig. 17 第8号住居跡出土遺物(2)	25	Fig. 42 第24号住居跡実測図	56
Fig. 18 第8号住居跡出土遺物(3)	26	Fig. 43 調査区出土遺物(1)	57
Fig. 19 第9号住居跡出土遺物	29	Fig. 44 調査区出土遺物(2)	58
Fig. 20 第10号住居跡実測図	31	Fig. 45 調査区出土墨書土器	61
Fig. 21 第11号住居跡実測図	32	Fig. 46 調査区出土鉄製品	63
Fig. 22 第11・12号住居跡出土遺物	33	Fig. 47 第8住居跡出土鉄製品	63
Fig. 23 第12号住居跡実測図	34	Fig. 48 石・土製品	65
Fig. 24 第13号住居跡実測図	35	Fig. 49 石製品	66
Fig. 25 第13号住居跡出土遺物(1)	38		

図 版 目 次

- | | | | |
|-------|----------------|--------|---------|
| PL. 1 | 検出された住居跡群(A地区) | PL. 9 | 第8号住居跡 |
| PL. 2 | 検出された住居跡群(B地区) | PL. 10 | 第10号住居跡 |
| PL. 3 | 検出された住居跡群(A地区) | PL. 11 | 第11号住居跡 |
| PL. 4 | 第1号住居跡 | PL. 12 | 第12号住居跡 |
| PL. 5 | 第4号住居跡 | PL. 13 | 第13号住居跡 |
| PL. 6 | 第5号住居跡 | PL. 14 | 第15号住居跡 |
| PL. 7 | 第6号住居跡 | PL. 15 | 第16号住居跡 |
| PL. 8 | 第7号住居跡 | | |

I はじめに

上村田小中遺跡は、茨城県那珂郡大宮町上村田字小中943ほかに所在する遺跡であり、標高27 mほどの中位段丘上の平坦部に位置して縄文式土器片や土師器片の散布が認められ、『茨城県遺跡地図』（茨城県教育委員会 1987. 3）にも周知されている遺跡である。

当遺跡を中心として日輪ゴム株式会社の関東工場が建設されることとなり、埋蔵文化財の取扱いについて大宮町教育委員会と日輪ゴム株式会社の間で数度の協議がなされた。そして、茨城県教育庁文化課の指導によって開発地域内の設計変更が行われ、主工場敷地および駐車場などの予定地部分約4,000㎡を対象に記録保存することとなり、そのほかの大部分が日輪ゴム株式会社のご理解によって緑地として現状保存することとなった。

発掘調査は大宮町土地開発公社が主体となって上村田小中遺跡発掘調査会を組織することとなり、立正大学講師丸子亘氏に調査担当を依頼し、昭和52年8月1日から11月10日までの長期にわたって実施された。

発掘調査は、第1段階として調査区内の伐開作業が進められ、次に東西8 m、南北2 mの調査区を設定して表土除去・遺構検出・遺構調査の順に進められた。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡24棟が調査された。

発掘調査中から出土遺物の洗浄やネーミングなどの作業を実施して報告書刊行の作業を進めていたが、遺物整理途中にして発掘担当の丸子亘氏が不幸にも逝去されてしまった。このため発掘担当者による報告書の上梓が不可能となり、大宮町教育委員会では瓦吹堅氏をはじめ多くの方々や機関のご協力を得ながら教育委員会が中心となって遺物整理などの業務を実施し、不本意ながら報告書の刊行にふみきったのである。

Ⅱ 遺跡の環境

1 地理的環境

発掘調査された上村田小中遺跡は、行政区画では那珂郡大宮町上村田字小中にあたる。

上村田地区は源を高館山(229.3m)東南麓の北塩子より流れでて、大宮町と瓜連町の境界から久慈川へ合流して太平洋に注ぐ玉川右岸の標高55～60mの台地上に位置し、昭和48年に県立大宮工業高等学校建設に伴って発掘調査された一騎山古墳群は南北約1kmの地点に位置している。

大宮町の面積は82.73km²で地形的に久慈川と那珂川に挟まれた台地部が多く、玉川が台地を二分している。遺跡周辺部の地形は前述のように玉川を境として大きく那珂川側と久慈川側の台地に分けられ、那珂川に面した台地端部は比較的平坦であるが、久慈川に面した台地端部は多くの支谷の開析によって複雑な地形を呈している。

大宮町周辺の地質は鷲子鶏足古期層に属し、岩質は凝灰岩、砂岩、泥岩などが大部分であるといわれ、第三紀層上に上流から運ばれた砂及び小石が堆積した砂礫層がみられ、さらにその上部にローム層の堆積がみられる。

遺跡は玉川右岸の標高55～60mの東にのびる舌状台地上に位置し、北および南には支谷が入りこんでいる。

2 歴史的環境

小中遺跡の周辺部には多くの遺跡が分布し、古くから古代人に良好な生活の場を提供していたことが窺える。

当遺跡の北部には縄文時代の石沢遺跡(県602)、縄文時代および奈良・平安時代の大宮自然公園遺跡(県3687)が位置し、南部には縄文時代の北村田遺跡(県603)、茅峯遺跡(県3688)や奈良・平安時代の前三ヶ尻遺跡(県3717)、後三ヶ尻A・B遺跡(県3718)や古墳群である一騎山古墳群(県616)がある。さらに玉川と久慈川に挟まれた大宮の台地南端部には富士山古墳群(県615)、富士山遺跡(県619)、坪井上遺跡(県591)、西坪井遺跡(県627)、下村田遺跡(県605、3710)などの遺跡の分布が認められ、縄文時代から奈良・平安時代の長期にわたって生活の場となっていた。

大宮町をほぼ二分している玉川は、『常陸国風土記』久慈郡条に「静織の里あり。……北に小水あり。丹石交錯れり。色は瑠碧に似たり。火を鑽るに尤好し。因りて玉川と号く。」とあり、古代から瑪瑙を産したことが記されている。



- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 上村田小中遺跡 (3699) | 8 前三ヶ尻遺跡 (3717) |
| 2 北村田遺跡 (603) | 9 一騎山古墳群 (616) |
| 3 後三ヶ尻 A 遺跡 (3718A) | 10 坪井上遺跡 (591) |
| 4 後三ヶ尻 B 遺跡 (3718B) | 11 西坪井遺跡 (627) |
| 5 石沢遺跡 (602) | 12 下村田遺跡 (605・3710) |
| 6 大宮自然公園遺跡 (3687) | 13 富士山古墳群 (615) |
| 7 茅峯遺跡 (3688) | 14 富士山遺跡 (619) |

Fig. 1 小中遺跡周辺図

III 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

第1号住居跡

遺 構 (Fig. 2)

本住居跡は05-17・18区より検出されたもので、南北径約4.2m、東西径約4.25mの方形の平面形を呈し、主軸方向はN-38°-Eである。遺構検出面から床までの深さは20cm前後であり、床面はほぼ平坦をなしている。各壁下には幅20cm前後で深さ5~10cmの壁溝が検出され、北壁中央部に竈が付設されている。床面には3か所のピットが検出され、北東コーナー部には長径65cm、短径45cm、深さ15cmほどの方形状の掘り込みが位置し、貯蔵穴の可能性が考えられる。その

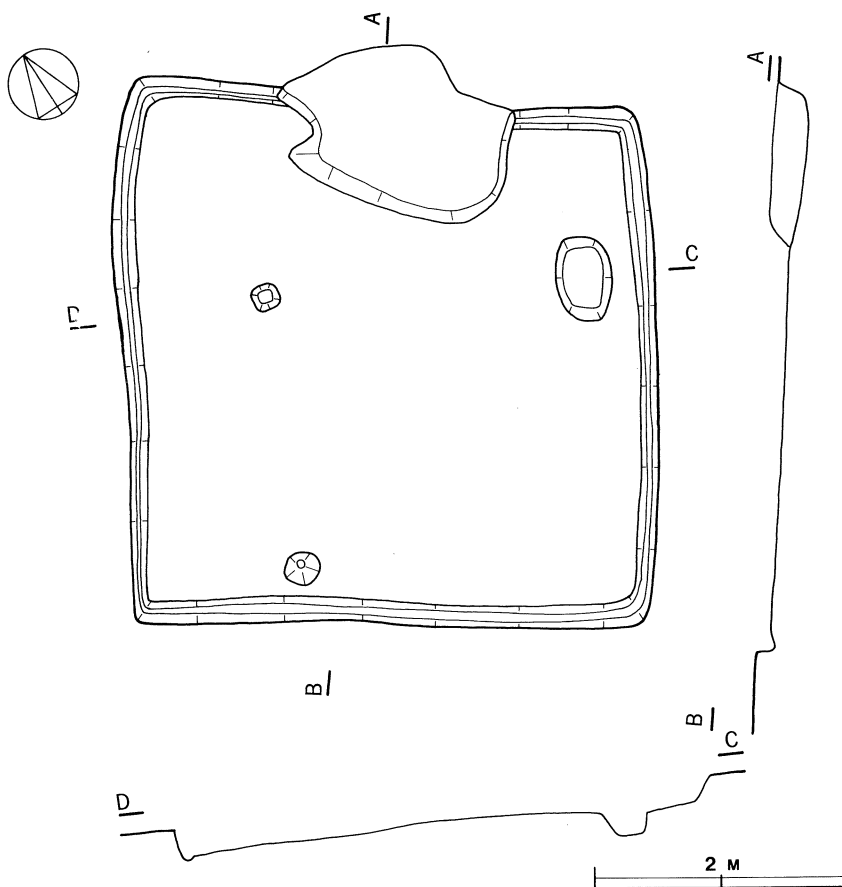


Fig. 2 第1号住居跡実測図

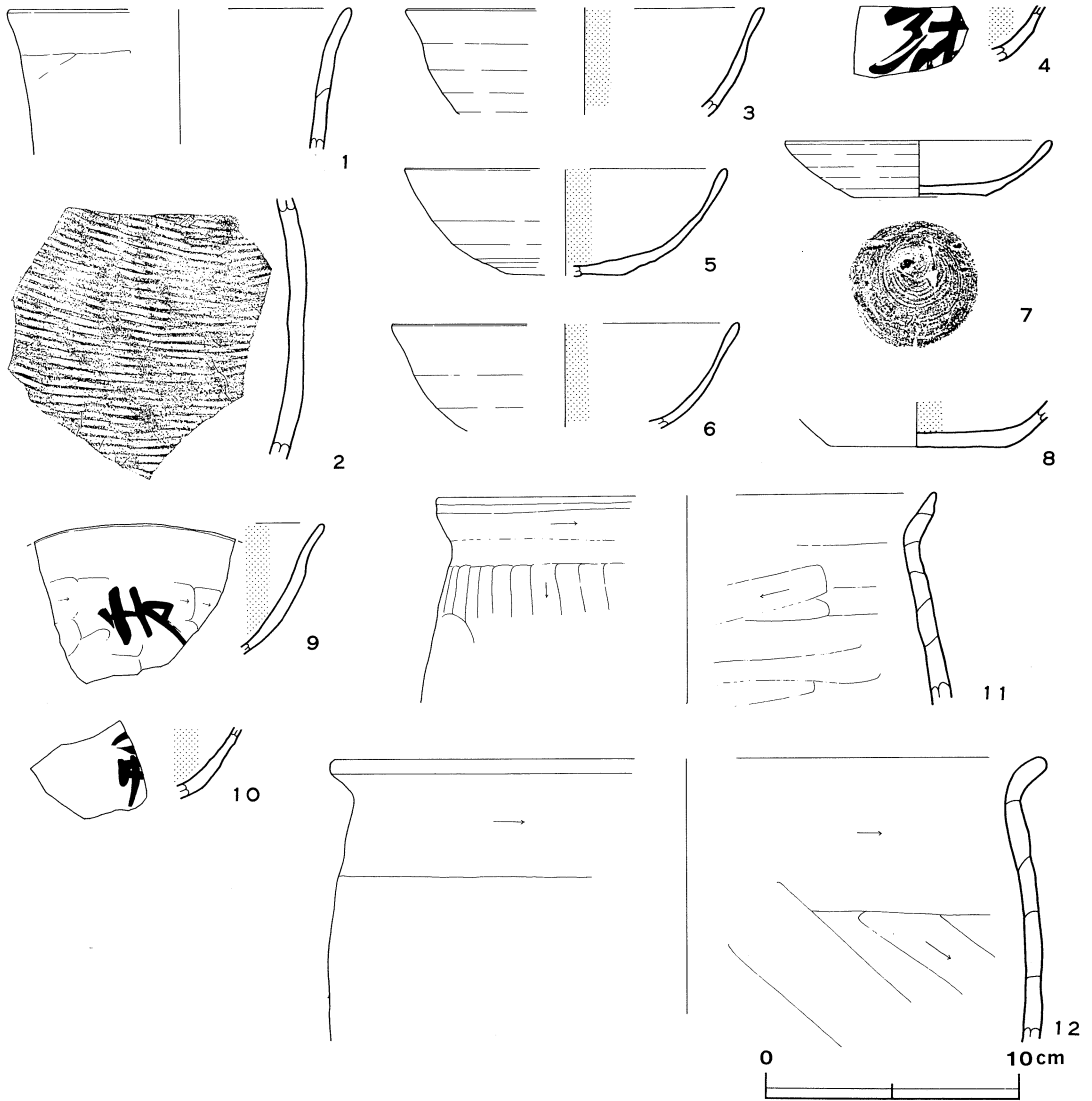


Fig. 3 第1・2・3号住居跡出土遺物(1・2-第1号, 3・4-第2号, 5~12-第3号)

ほかのピットは直径20cm内外の浅いものであり、柱穴とは考えられない。

本住居跡からの出土遺物はきわめて少ない。

遺物(Fig. 3-1・2)

1 口径13.6cm, 現高5.5cmほどの竈内から出土した鉢形状の土器で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ ほどである。口縁部は胴部からやや開いて立ちあがり、口辺部内外面とも横なで整形がなされているが、全体的に摩耗している。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は普通である。ま

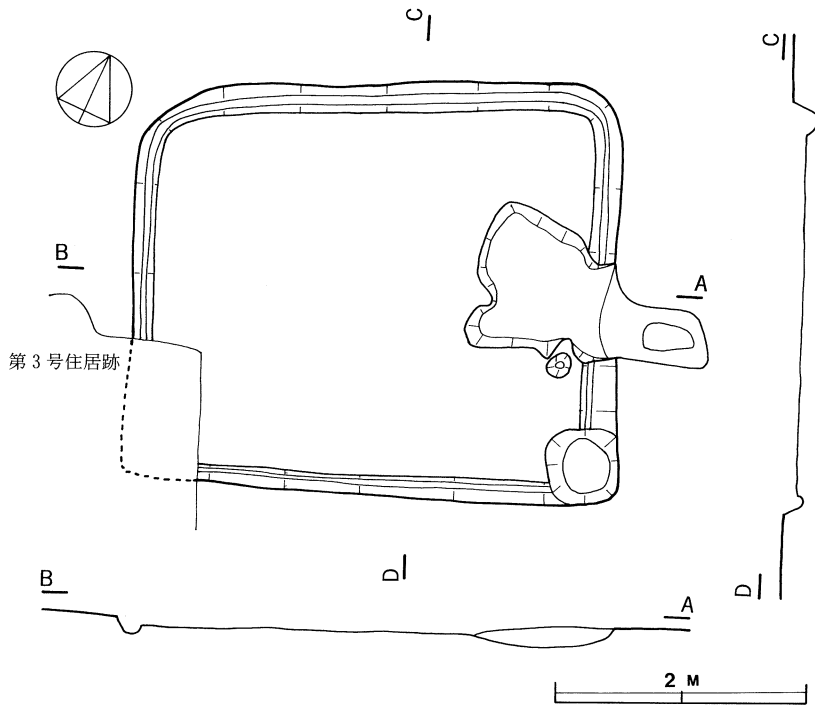


Fig. 4 第2号住居跡実測図

た、口辺部内面に煤の付着が認められる。

2 東北コーナー部の貯蔵穴状の落ち込みから出土した須恵器の胴部片である。外面に平行叩き痕がみられ、色調は灰色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は堅緻で良好である。

第2号住居跡

遺構 (Fig. 4)

本住居跡は05-15・16区を中心として検出され、南北径約3.3m、東西径約3.85mの隅丸長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-76°-Eである。遺構検出面から床までの深さは10~15cmであり、壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。各壁下には幅15~25cm、深さ5~10cmほどの壁溝がめぐり、東壁中央部に竈が付設され、煙道部は東壁を1mほど掘り込んで構築されている。南東コーナー部には60×60cmの隅丸方形状を呈する貯蔵穴状の落ち込みがみられ、そのほか床面にはピットは検出されていない。また、南西コーナー部には第3号住居跡が複合している。

本住居跡からの出土遺物はきわめて少ない。

遺物 (Fig. 3-3・4, Fig. 46-1・18)

1 口径14.2cm、現高4.3cmほどの底部を欠く坏形土器で、竈付近より出土しており、現存部

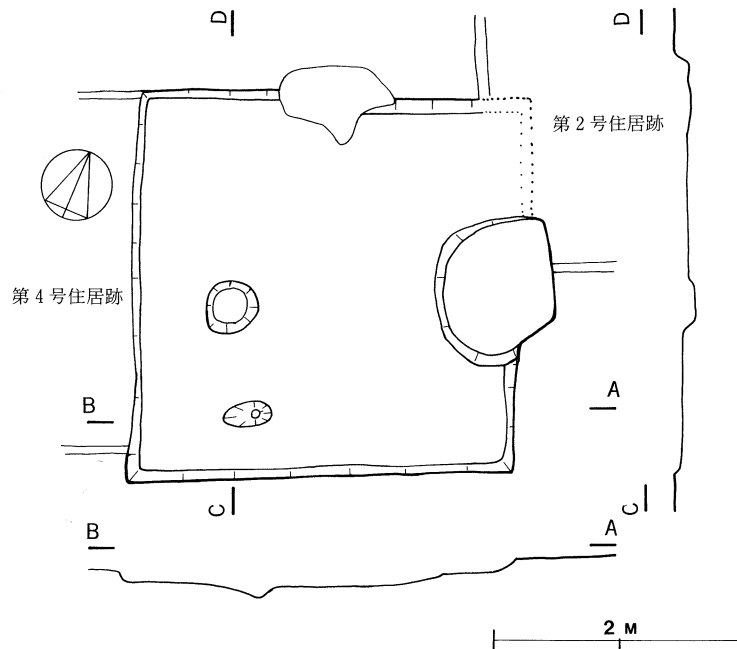


Fig. 5 第3号住居跡実測図

は約 $\frac{1}{6}$ ほどである。口縁部は体部から大きく開いて立ちあがり、口辺部下でややくびれてさらに大きく外反している。外面にはロクロ整形痕が認められ、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色であり、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

2 坏形土器の体部片であり、墨書が一文字認められるが判読できない。色調は外面暗褐色、内面は黒色研磨されて黒色を示し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

刀子(Fig. 46-1) 全長13.0cmほどの茎部から鋒まで残る完形品であるが、錆化がやや進んでいる。刃部長8.3cm、茎部長4.7cmで、棟は平棟の平造であり、関部は明確ではない。

帯執足金具(Fig. 46-18) 全長5.2cm、幅2.5cmほどで片方を欠いている。上部には帯執韋を通す長方形の孔がみられ、錆化がやや進んでいる。形状的には蕨手刀や方頭大刀の装具であろう。

第3号住居跡

遺構(Fig. 5)

本住居跡は05-15・16・17区を中心に検出され、北東部に第2号住居跡、西に第4号住居跡が複合している。南北径3.08m、東西径3.05mの方形の平面形を有し、主軸方向はN-68°-Eで東壁中央部に竈が付設されている。遺構検出面から床までの深さは10cm内外で、壁はほぼ垂直の立ちあがりを示している。壁下には壁溝は検出されず、北壁部にみられる竈は第4号住居跡に付

設されたものである。床面はほぼ平坦をなし、西側部に2か所のピットが検出されているが、本住居跡に伴うものではない。

出土遺物は坏形土器が多く、竈周辺部からは甕形土器の出土もみられる。また鉄製品も出土している。

遺物(Fig. 3-5~12, Fig. 46-6)

1 (Fig. 3-5) 口径12.8cm, 底径4.8cm, 器高4.3cmの坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ である。口縁部は底部からゆるやかに内彎して立ちあがり、体部外面にはロクロ整形痕がみられ、内面は黒色研磨されている。底部には篋による回転切離痕が認められ、粘土瘤が中央部に残されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

2 (Fig. 3-6) 口径13.8cm, 現高4.2cmほどの坏形土器であり、現存部は約 $\frac{1}{4}$ で底部を欠いている。口縁部は底部から内彎ぎみに立ちあがり、口辺部下でかすかにくびれる。体部外面にはロクロ整形痕が認められ、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

3 (Fig. 3-7) 口径10.6cm, 底径5.2cm, 器高2.2cmほどの坏形土器で、口縁部は底部から大きく開いて立ちあがっている。体部は内外面ともロクロ整形痕が認められ、底部には糸切痕がみられる。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

4 (Fig. 3-8) 底径7.0cm, 現高2.0cmほどの坏形土器の底部片である。体部外面はロクロ整形、内面は黒色研磨され、底部には篋整形痕が認められる。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

5 (Fig. 3-9) 口径13.4cm, 現高5.0cmほどの坏形土器の口縁部片であり、体部に「千万」と二文字の墨書がみえる。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり、口辺部下でややくびれている。口辺部外面にはロクロ整形痕が認められるが、体部外面は篋削りされ、内面は黒色研磨されている。色調は外面黒褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

6 (Fig. 3-10) 坏形土器の体部片で、「□中」の二文字の墨書されている。体部の内面はロクロ整形、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・雲母等を含み、焼成は良好である。

7 (Fig. 3-11) 口径20.0cm, 現高8.5cmほどの甕形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ である。口縁部は頸部からそれほど外反せず立ちあがり、頸部もそれほどくびれていない。胴部は長胴を呈するものと考えられ、それほど膨みをもつものではない。口縁部内外面とも横なで整形がなされ、頸部下には縦位の篋削り、さらに下部はなで整形がなされている。胴部内面には横位あるいは斜位の刷毛目状の整形痕が認められる。色調は灰茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母

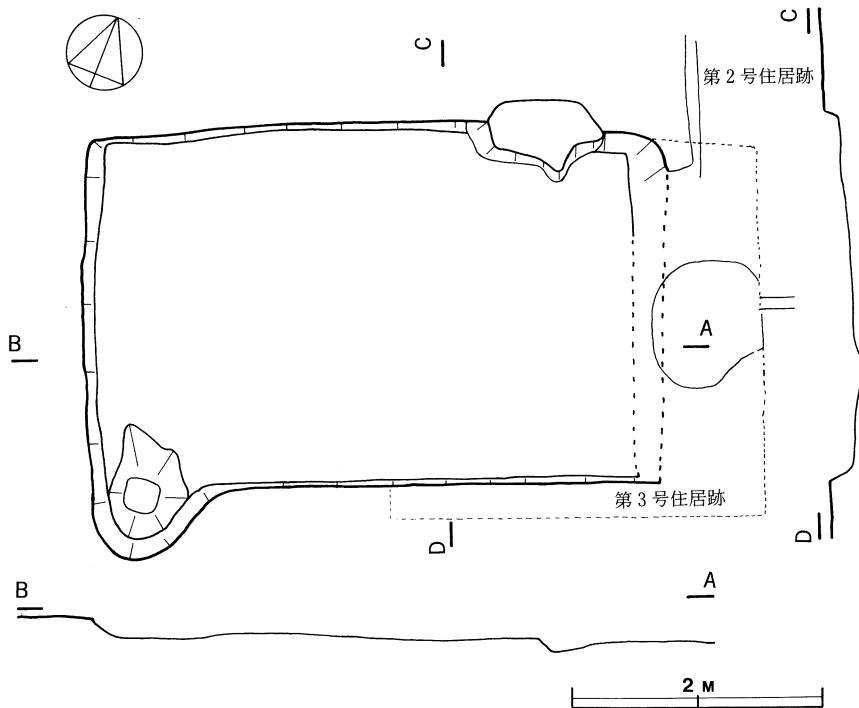


Fig. 6 第4号住居跡実測図

等を含み、焼成は普通である。

8 (Fig. 3-12) 口径28.6cm, 現高11.5cmほどの甕形土器であり、胴部には欠損しているもの一対の把手をもつものである。口縁部は頸部から小さく外反して立ちあがり、胴部はあまり膨みをもたない。口辺部内外面は横手で整形がなされ、胴部外面には粗雑な指で痕が認められる。また、粘土紐の輪積み痕がみられ、内面は斜位の刷毛目整形がなされている。色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・微礫等を含み、焼成は良好である。

刀子 (Fig. 46-6) 刃部片で現長3.9cm, 刃幅1.0cmほどで、平棟・平造である。刃部には一部研ぎべりが認められ、それほど錆化は進んでいない。

第4号住居跡

遺構 (Fig. 6)

本住居跡は第3号住居跡の西に複合して検出され、南北径約2.9m, 東西径約4.6mの長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-22°-Wであるが東壁は複合のため不鮮明である。遺構検出面から床までの深さは5~15cmで、床はほぼ平坦をなしている。壁下に壁溝はみられず、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。北壁の東コーナーよりには竈が付設され、南西コーナー部には南に張り

出す攪乱坑がみられる。

本住居跡からの出土遺物は、竈周辺部から多く出土している。

遺物(Fig. 7・8)

1 口径12.7cm, 底径5.0cm, 器高3.5cmほどの坏形土器であり, 口縁部の現存部は $\frac{1}{2}$ ほどである。口縁部は底部から外反ぎみに開いて立ちあがり, 口辺部下でややくびれ, 体部下端でもくびれがみられる。体部外面にはロクロ整形痕が認められ, 内面は黒色研磨されており, 器壁は薄い。底部は中央部がややくぼんで糸切痕が認められる。色調は外面灰褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒等を少量含み, 焼成は普通である。また, 体部外面の下半部に煤が付着している。

2 口径11.2cm, 底径5.8cm, 器高3.3cmほど竈周辺より出土した坏形土器で, 口縁部の一部を欠いている。口縁部は底部から外反ぎみに開いて立ちあがり, 底部には糸切痕が認められ, 粘土瘤が残されている。体部外面はロクロ整形がなされ, 内面は黒色研磨されている。色調は外面明灰褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒を少量を含み, 焼成は良好である。

3 底径5.2cm, 現高2.5cmほどの坏形土器の底部片である。体部外面はロクロ整形, 内面は黒色研磨, 底部には糸切痕が認められる。色調は外面明褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒・雲母等を含み, 焼成は良好である。

4 口径15.6cm, 底径10.4cm, 器高4.4cmほどの須恵器の坏形土器であり, 現存部は約 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は底部からやや直線的に開いて立ちあがり, 体部内外面ともにロクロ整形痕が認められ, 底部には回転篋切痕がみられる。色調は灰色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は普通である。

5 口径20.2cm, 現高8.3cmほどの甕形土器の口縁部片であり, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ で竈付近より出土している。口縁部は頸部から大きく外反して立ちあがり, 胴部はそれほど膨みをもたない。口辺部は内外面とも横なで整形がなされ, 胴部外面は斜位の雑な篋削りがみられ, 煤が付着している。色調は外面暗褐色, 内面暗灰褐色であり, 胎土中には砂粒・石英・スコリア等を含み, 焼成は普通である。

6 口径21.2cm, 現高18.1cmほどの甕形土器の口縁部片であり, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部より外反し, さらに直立ぎみに立ちあがる。胴部は頸部よりやや膨みを増して胴上部に最大径をもつ。口辺部の内外面は横なで整形がなされ, 胴部の上部は斜位のなで, さらに下部は縦位の篋削りがなされている。色調は暗茶褐色を呈し, 胎土中には砂粒・石英・スコリア等を含み, 焼成は普通である。

7 口径23.4cm, 現高10.7cmほどの甕形土器の口縁部片であり, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部より外反し, さらに直立ぎみに立ちあがっている。胴部は頸部からやや大きく膨らんでいる。口辺部の内外面は横なで整形がなされ, 胴部の外面はなで整形が認められるが全体的に摩耗

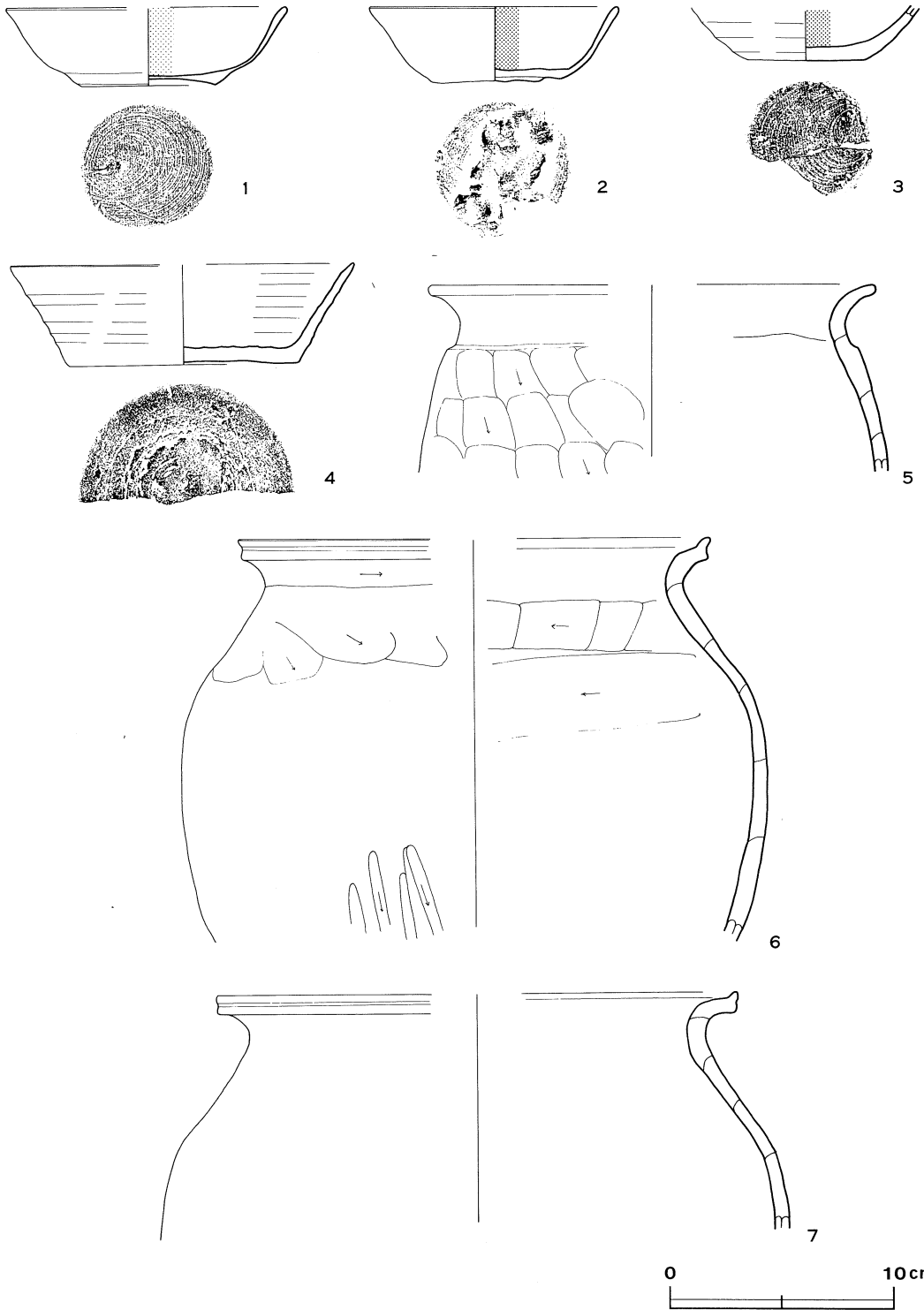


Fig. 7 第4号住居跡出土遺物(1)

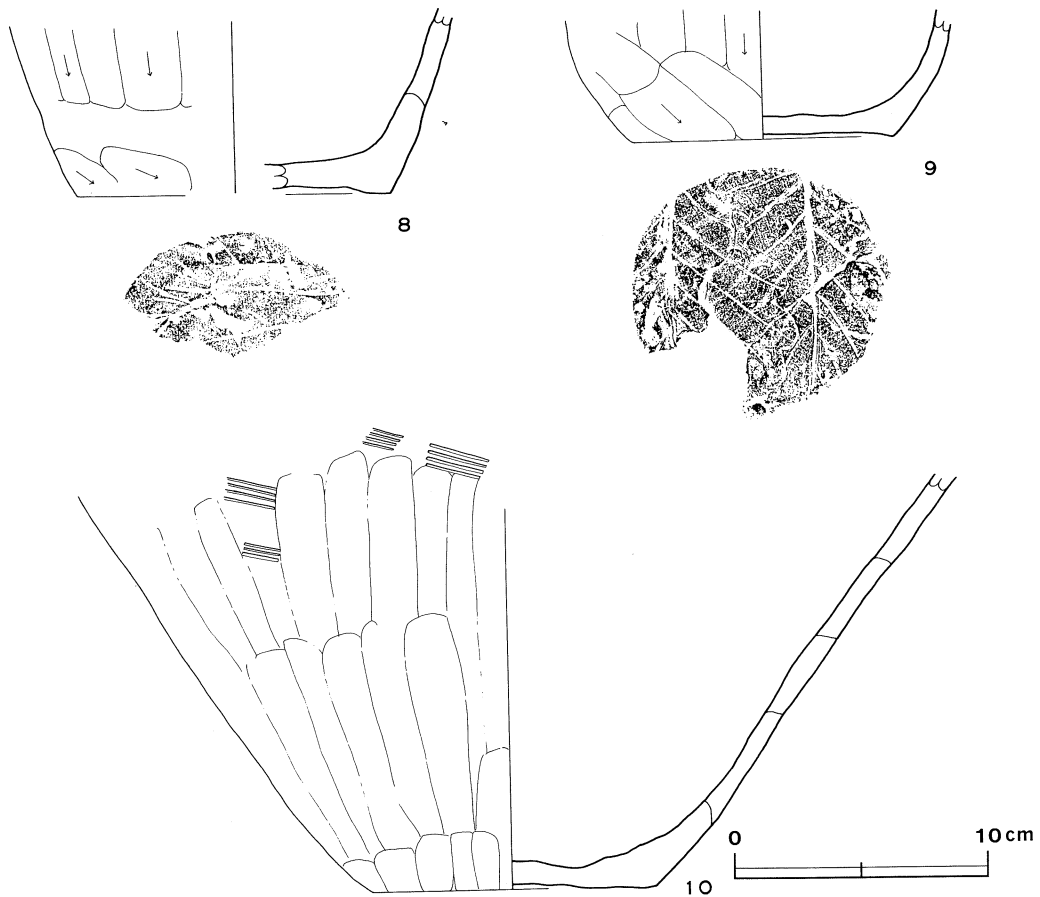


Fig. 8 第4号住居跡出土遺物(2)

している。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み、焼成は普通である。

8 底径12.4cm、現高7.5cmほどの甕形土器の底部片であり、現存部は約 $\frac{1}{4}$ で竈内より出土している。胴下部外面は縦位の篋削りがなされ、下端部は斜位に篋削りされている。内面は火熱のため脆弱化し、煤の付着が認められる。また、底部には木葉痕がみられる。色調は外面茶褐色、内面灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通であるが二次焼成をうけている。この甕形土器の底部は、前述した甕形土器の口縁部(6)と胎土・整形技法などからみて類似しており、同一固体と考えられる。

9 底径10.4cm、現高5.0cmほどの甕形土器の底部片であり、竈内より出土している。胴下部外面には縦位あるいは斜位の篋削り痕が認められ、内面は器壁の剥落が激しい。また、底部には木葉痕が認められる。色調は外面赤灰褐色、内面灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通であるが二次焼成をうけている。

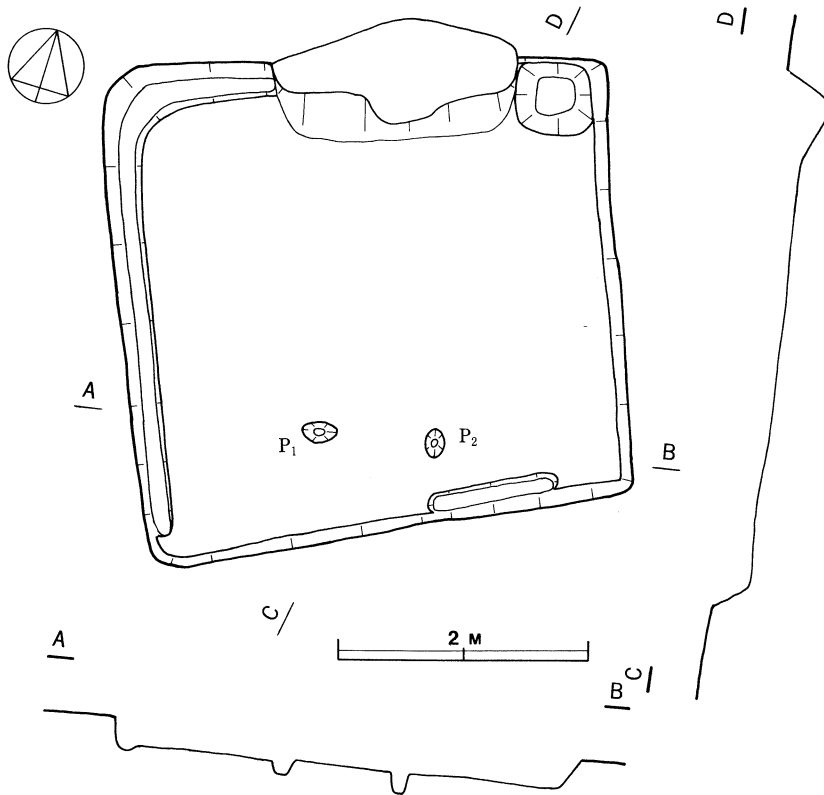


Fig. 9 第5号住居跡実測図

10 底径11.2cm, 現高16.5cmほどの甕形土器の底部片であり, 現存する胴部は約 $\frac{1}{5}$ である。胴部の外面には平行叩き痕が認められ, 叩きの後に縦位の篋削りがなされて平行叩き痕が削り取られている。また, 底部内面には煤の付着が認められる。色調は赤褐色を呈し, 胎土中に砂粒・石英・微礫等を含み, 焼成は普通である。

第5号住居跡

遺 構 (Fig. 9)

本住居跡は03-04・05区を中心に検出され, 南北径約3.9m, 東西径約4.0mの隅丸方形の平面形を呈し, 主軸方向はN-24°-Wである。遺構検出面から床までの深さは20~25cmで, 壁は垂直ぎみに立ちあがり, 北壁中央部に竈が付設されている。北西コーナーより西壁および南壁の一部には幅25~50cm, 深さ10cmほどの壁溝が検出され, 北東コーナー部には60×60cm, 深さ30cmほどの貯蔵穴が位置している。南壁下には, P₁(15×30cm, -15cm), P₂(15×23cm, -20cm)の2個のピットが検出されているが, 南壁とほぼ平行である点などから出入口部の施設の柱穴かとも考えら

れる。

遺物はやや多く、当遺跡で検出された住居跡の中では時期の古いものである。また、鉄製品の出土もみられる。

遺物(Fig.10, Fig.46-10・13)

1 口径13.6cm, 底径7.4cm, 器高4.9cmほどの須恵器の坏形土器である。口縁部は底部から外反ぎみに開いて立ちあがり、体部の内外面はロクロ整形されているが、内外面とも使用のための摩耗痕が多く認められる。また、回転篋整形されて「一」の刻線がみられる底部にも摩耗痕は顕著である。色調は灰色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は良好である。

2 口径13.0cm, 底径8.8cm, 器高4.1cmほどの須恵器の坏形土器で、底部は一部を欠き、さらに口縁部は $\frac{1}{2}$ ほどが現存している。口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、体部は内外面ともロクロ整形されているが、内外面とも使用のための摩耗痕が多く認められる。底部は篋整形されて器壁が0.8cmとやや厚く、煤の付着が認められ、摩耗も顕著である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成はやや粗雑である。

3 口径13.0cm, 底径8.6cm, 器高4.2cmほどの須恵器の坏形土器であり、現存部は約 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、体部の内外面はロクロ整形され、底部とともに使用の摩耗が顕著である。底部は回転篋切離しがなされ、中央に瘤状の粘土塊が付着している。色調は灰色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア・礫等を含み、焼成は良好である。

4 口径14.0cm, 底径9.2cm, 器高4.5cmほどの須恵器の坏形土器であり、現存部は約 $\frac{1}{4}$ である。口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、体部は内外面ともロクロ整形痕が認められる。底部は一部が現存しているだけであるが篋整形痕が認められる。色調は灰色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は良好である。

5 口径19.6cm, 現高6.5cmほどの甕形土器の口縁部片であり、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部から大きく外反して立ちあがり、胴部はやや膨らむ。口辺部および頸部は内外面とも横なで整形がなされ、胴上部外面には刷毛目整形痕が認められて全体的に作りや整形は丁寧である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

6 底径7.8cm, 現高4.5cmほどの甕形土器の底部片であり、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。胴部の下部外面には縦位の篋削り痕が認められ、内面は横位のなで煤の付着が認められる。また、底部は篋整形されている。色調は赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

7 口径21.0cm, 現高10.0cmほどの甕形土器の口縁部片であり、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部から開いて立ちあがり、胴部はそれほど膨みをもたない長胴形を呈するものと考えられる。口縁部の内外面は横なで整形がなされ、胴部の外面は雑なで整形で内面は斜位のなで整形

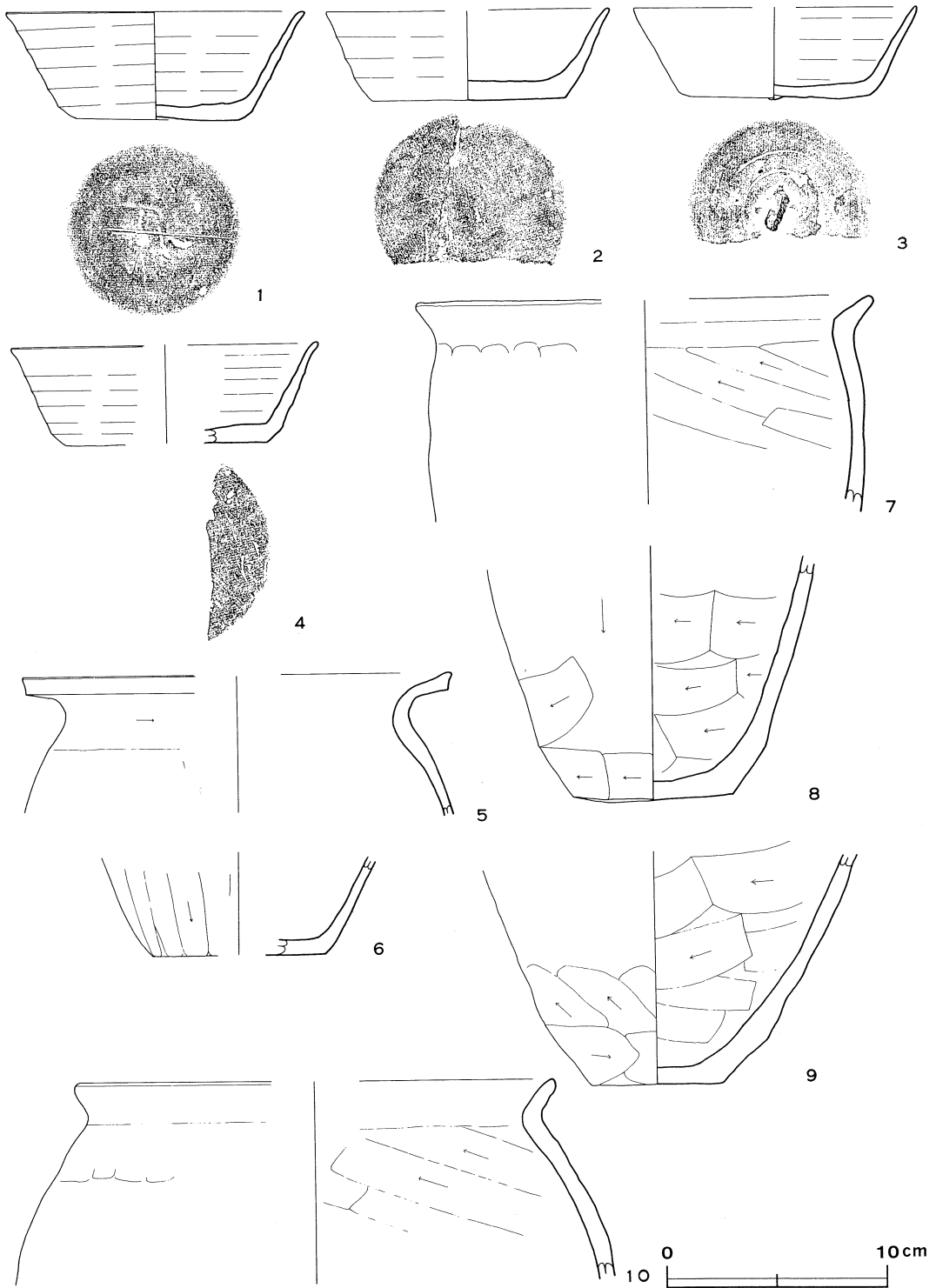


Fig. 10 第5号住居跡出土遺物

である。また、器壁は0.6～0.8cmとやや厚い作りである。色調は茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は普通であるが作りや整形は全体的に粗雑である。

8 底径7.2cm、現高11.5cmほどの甕形土器の底部であり、前述した7の胴下部と考えられる。胴部外面は粗雑なで整形がみられ、下端部は横位に篋削りされている。色調は明茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は普通であるが作りや整形は粗雑である。

9 口径22.0cm、現高9.5cmほどの甕形土器の口縁部片であり、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部から開いて立ちあがり、胴部は膨らむ。口辺部の内外面とも横なで整形がなされ、胴部外面は縦位のなで内面は斜位の刷毛目痕がみられる。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は普通である。

10 底径6.0cm、現高11.0cmほどの甕形土器の胴下部片である。胴部外面は指による雑なで整形がなされ、胴下端部は横位に篋削りされている。内面は刷毛目痕が認められ、全体的に作りや整形は粗雑である。色調は明茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は普通である。

鉄鏃(Fig.46-10) 全長7.0cmほどの平根鏃で一部欠損しているが、大きな腹袂がみられる。茎部は方形状を呈し、それほど長いものではない。

鉄鏃(Fig.46-13) 現長11.0cmほどの柳葉鏃で、先端部および茎部の一部を欠いている。錆化はそれほど進んではいない。

第6号住居跡

遺構(Fig.11)

本住居跡は04・05-09・10区に検出されたものであり、南北径約5.06m、東西約4.7mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-0°-Wである。遺構検出面から床までの深さは10～40cmで、壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがっている。北壁中央部には竈が付設され、壁下に壁溝は検出されていない。南壁の中央部には30×50cmほどの突出部がみられるが、本住居跡に付設されたものかどうかは不明である。

遺物はやや多く、判読不明であるが墨書土器が2点ほど出土している。

遺物(Fig.12)

1 口径13.0cm、底径6.4cm、器高4.1cmほどの坏形土器であり、口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがる。体部外面はロクロ整形がなされ、内面から口縁部まで黒色研磨されている。また、体部下端は篋整形され、底部は回転篋整形されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

2 口径14.8cm、底径9.6cm、器高4.6cmほどの須恵器の坏形土器で、現存部は $\frac{1}{2}$ ほどである。

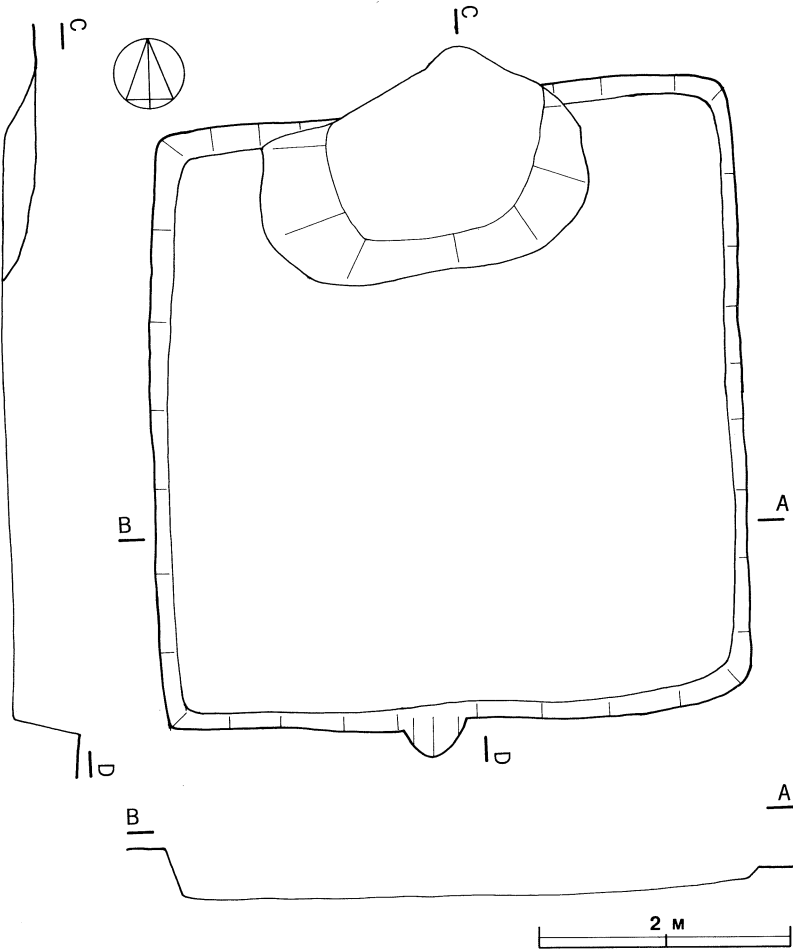


Fig. 11 第6号住居跡実測図

口縁部は底部から開いて立ちあがり、体部内外面ともロクロ整形痕がみられる。体部下端および内面は使用による摩耗痕が顕著であり、底部は篋整形されている。色調は灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

3 底径6.4cm、現高1.0cmほどの坏形土器の底部片であり、体部の下端に二文字の墨書が認められるが判読できない。体部内面はは黒色研磨され、底部は回転篋整形されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

4 坏形土器の口縁部片であり、体部に一あるいは二文字の墨書がみられるが判読できない。色調は外面暗褐色、内面黒色研磨されて黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

5 口径15.2cm、現高18.0cmほどの竈内出土の甕形土器で底部を欠いている。口縁部は頸部か

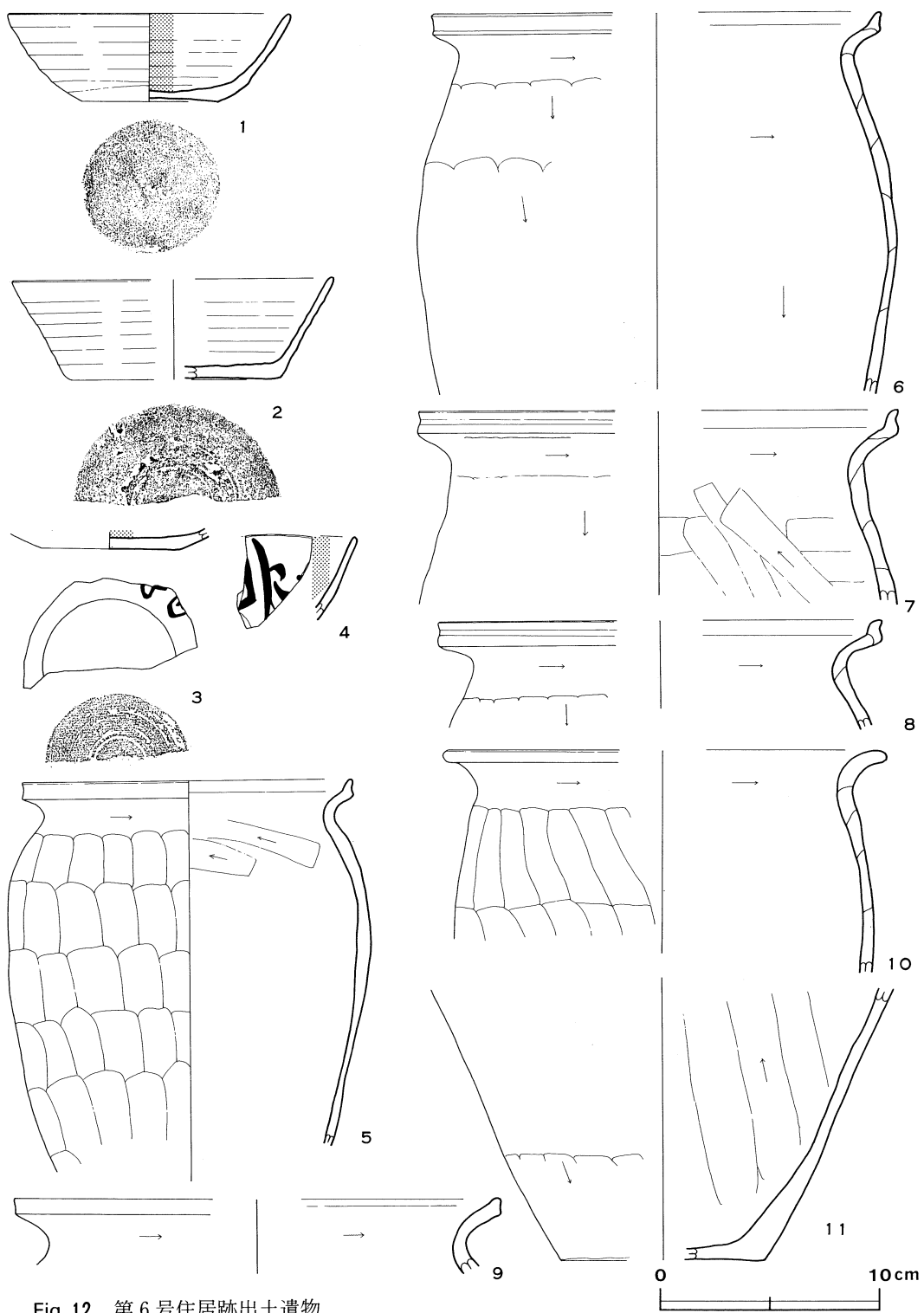


Fig.12 第6号住居跡出土遺物

ら開いてさらに直立ぎみに立ちあがり、胴部はそれほど膨みをもたない。口辺部は内外面とも横なで整形され、胴部外面は縦位の篋削りされている。色調は外面茶褐色で一部黒褐色、内面暗褐色で一部に煤が付着し、胎土中には砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好で二次焼成をうけている。

6 口径20.6cm、現高18.0cmほどの竈内出土の甕形土器で、現存部は $\frac{1}{6}$ ほどである。口縁部は頸部から開いてさらに直立ぎみに立ちあがり、胴部はそれほど膨みをもたない。口辺部は内外面とも横なでなされ、胴上部には縦位の篋削り整形が認められる。色調は暗褐色を呈し、一部に煤の付着が認められる。胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

7 口径22.0cm、現高8.0cmほどの甕形土器の口縁部片であり、現存部は $\frac{1}{6}$ ほどである。口縁部は頸部から開いてさらに直立ぎみに立ちあがり、胴部はそれほど膨みをもたない。内辺部内外面とも横なで整形がなされ、胴上部には縦位のなで整形が認められる。色調は外面赤茶褐色、内面暗褐色を呈し、煤の付着が認められる。胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好で二次焼成をうけている。

8 竈内より出土した口径20.6cm、現高5.8cmほどの甕形土器の口縁部片であり、現存部は $\frac{1}{6}$ ほどである。前述した7と形状がきわめて類似している。色調は赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

9 口径22.6cm、現高4.3cmほどの甕形土器の口縁部片であり、現存部は $\frac{1}{4}$ ほどである。口縁部は大きく外反して立ちあがるが頸部以下を欠き、内外面とも横なで整形がなされている。色調は赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

10 竈内より出土した口径20.4cm、現高10.0cmほどの甕形土器の口縁部片であり、現存部は $\frac{1}{6}$ ほどである。口縁部は頸部より大きく外反して立ちあがり、胴部はそれほど膨みをもたない。口辺部は内外面とも横なで整形され、胴部外面は斜位の篋削りが認められ、煤が付着している。色調は暗灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は良好である。

11 竈内より出土した底径9.4cm、現高13.0cmほどの甕形土器の底部片であり、現存部は $\frac{1}{3}$ ほどである。胴部外面はなで整形、下部は篋削りがなされており、内面は荒い斜位の篋削りが認められる。色調は外面暗茶褐色、内面暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通であるが二次焼成されている。この土器は前述した7と同一個体と考えられる。

第7号住居跡

遺 構 (Fig. 13)

本住居跡は03-10・11・12区から検出されたもので、南北径約2.7m、東西径約3.2mほどの長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-0°-Wである。竈は北壁中央部に付設されており、東

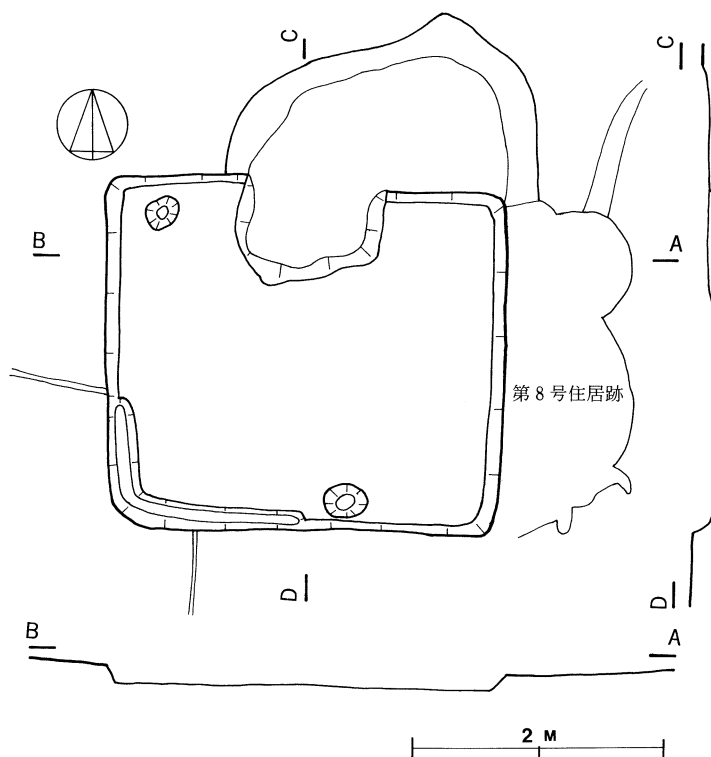


Fig. 13 第7号住居跡実測図

壁部に第8号住居跡が複合し、南西コーナーおよび北壁部に攪乱坑などが複合している。遺構検出面から床までの深さは15cm内外で、壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがっている。南西コーナー付近には幅15~25cm、深さ10cmほどの壁溝が検出されているがほかにはみられない。また、南壁の中央部よりにピットが検出されている。

本住居跡より出土した遺物はやや多く、墨書土器も1点含まれている。また、鉄製品も出土している。

遺物 (Fig. 14, Fig. 46-16)

1 口径13.7cm、底径7.4cm、器高4.0cmの坏形土器であり、口縁部は $\frac{1}{2}$ ほどが現存して底部から内彎ぎみに立ちあがっている。体部外面にはロクロ痕が認められ、内面は黒色研磨されている。底部には回転篋整形痕が認められ、かなり摩耗している。色調は外面暗茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通であるが二次焼成をうけている。

2 口径15.4cm、現高6.0cmほどの高台付坏形土器の坏部であり、高台部を欠いている。口縁部は底部より内彎ぎみに開いて立ちあがり、口縁部は平坦ではない。口辺部内外とも横なでがなされ、体部は内外面とも粗雑なで整形が認められる。色調は灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石

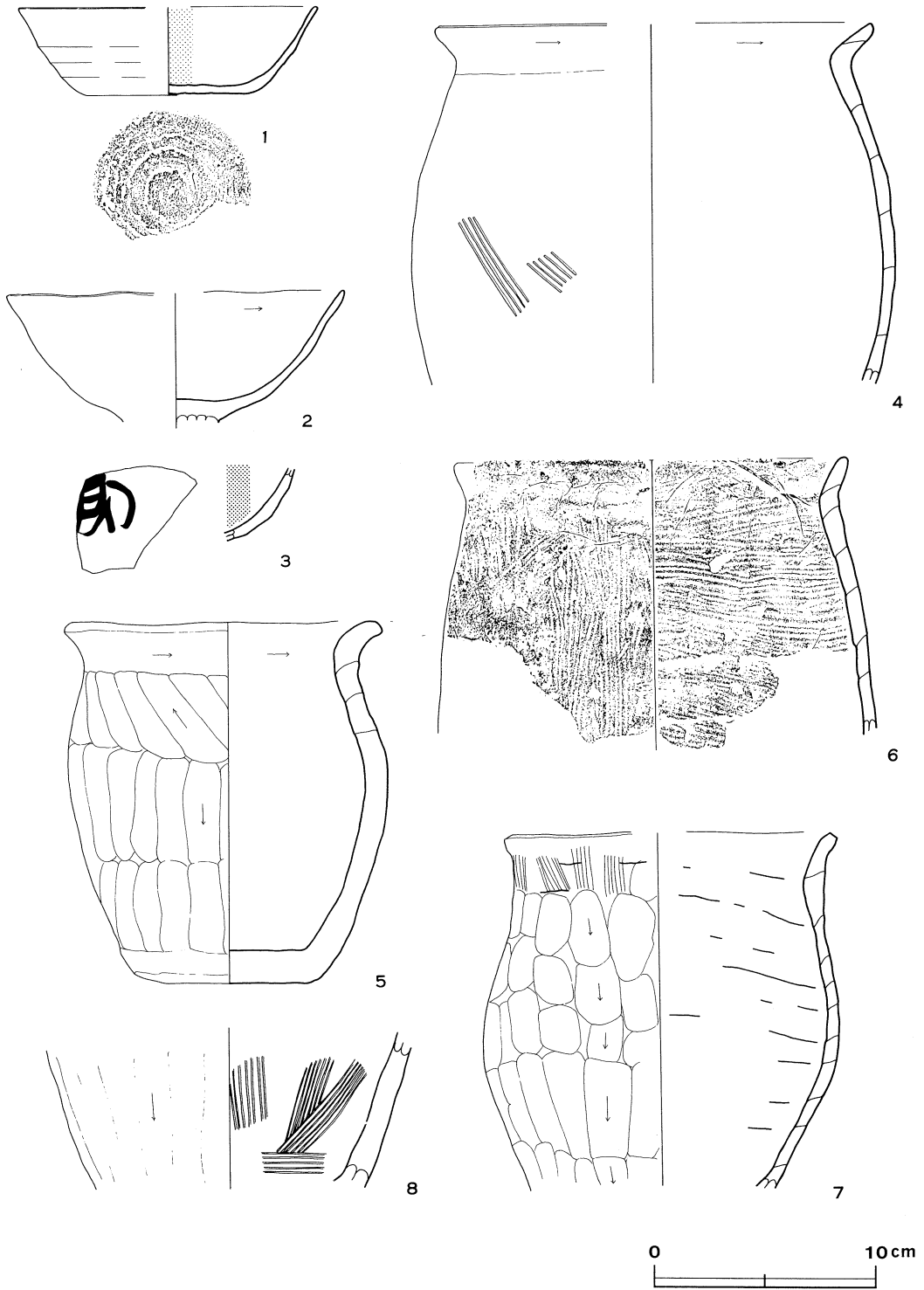


Fig.14 第7号住居跡出土遺物

英等を含み、焼成は普通である。

3 □(郷カ)の文字がみられる坏形土器の体部片であり、外面はロクロ整形で内面が黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

4 口径19.4cm、現高16.7cmほどの甕形土器で胴下部を欠き、現存部は $\frac{1}{3}$ ほどである。口縁部は頸部から開いて立ちあがり、胴部はやや膨む。口辺部は内外面とも横なで整形がなされ、胴部には斜位の刷毛目痕が部分的にみられる。内面は摩耗しており、全体的に作りや整形は粗雑である。色調は外面茶褐色、内面暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は普通である。

5 口径14.6cm、底径8.8cm、器高16.3cmの甕形土器である。口縁部は頸部から外反して立ちあがり、胴部はそれほど膨らまない。口辺部は内外面とも横なで整形がなされ、胴上部は斜位、中段より下部には篋削り痕が認められる。また、内面は縦位のなで整形がみられる。器厚は1.0~1.4cmと厚く、重量感があるが作りや整形ともやや雑である。色調は灰茶褐色で一部黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

6 口径18.0cm、現高12.8cmほどの甕形土器の口縁部片であり、現存部は $\frac{1}{2}$ ほどである。口縁部は頸部より小さく開いて立ちあがり、胴部もそれほど膨らみをもたない。口辺部内外とも雑な横なでがなされ、胴部外面は縦位、内面は横位の刷毛目痕が認められる。作りはきわめて粗雑で内面には輪積み痕が顕著であり、器面の整形も雑である。色調は赤茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は普通である。

7 口径15.2cm、現高16.3cmほどの胴下部を欠く甕形土器で、現存部は $\frac{1}{2}$ ほどである。口縁部は頸部より外反して立ちあがり、口唇部は篋削りによって整形されている。胴部は膨らんで中位に最大径を有し、底部へとすぼまる。口辺部外面には縦位の刷毛目痕がみられ、頸部の下部より胴部には、上から下へ連続した雑な篋削り整形がみられ、内面は全体的に横位の刷毛目痕が認められる。また、頸部の外面および内面には粘土紐の輪積み痕がみられ、作りや整形は粗雑である。色調は灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は普通である。

8 現高7.1cmほどの甕形土器の胴下部であり、外面には縦位の篋削りがなされ、内面には縦・斜位を主体とした刷毛目痕が認められる。色調は外面暗褐色、内面暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は普通である。

筒状鉄製品(Fig. 46-16) 全長4.2cm、径1.0cm内外の管状を呈し、鉄板を丸めたものであるが用途は不明である。

第8号住居跡

遺 構 (Fig.16)

本住居跡は04-17・18・19区を中心に検出され、南北径約2.6m、東西径は西に第7号住居跡が複合しているため不明であり、主軸方向はN-0°-Wである。また、東壁および北壁にも他の遺構が複合し、さらに北東コーナー部に土坑が複合している。遺構検出面から床までの深さは15cm内外であり、壁は垂直ぎみに立ちあがっている。壁下に壁溝はなくて床はほぼ平坦をなし、壁のコーナー部は隅丸状を呈している。本住居跡と複合した第7号住居跡は、本住居跡よりも新しい時期のものである。

遺物は出土量が多く、ほとんどが覆土中および床面から出土している。また、特異なものとしては大型の烙印が出土している。

遺 物 (Fig.16~18, Fig.46-9, Fig.47)

1 口径14.8cm、器高6.2cm、底径4.4cmほどの坏形土器で、現存部分は1/2ほどであり、全体的に作りは粗雑である。口縁部は底部より内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部内外面とも粗雑ななで整形がなされ、底部は篋削りされている。色調は灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリ

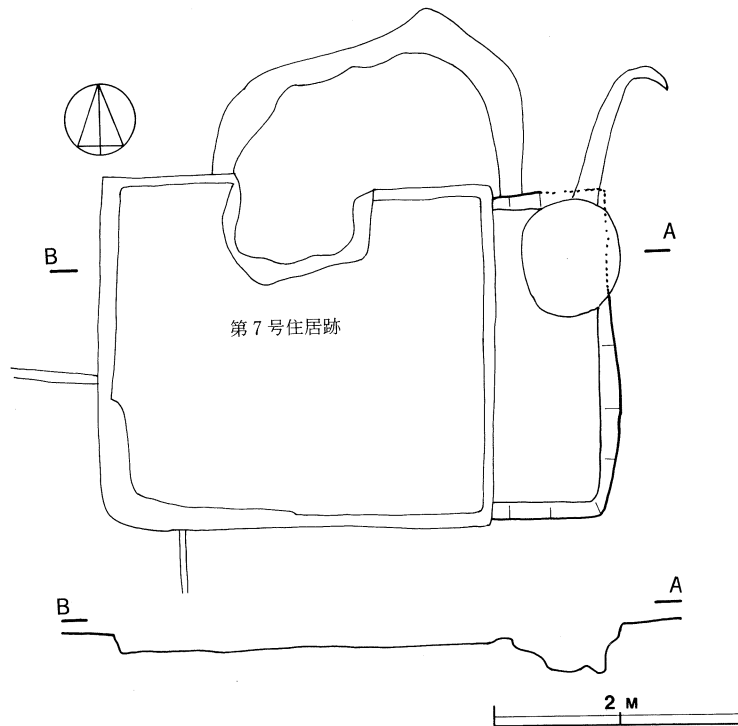


Fig.15 第8号住居跡実測図

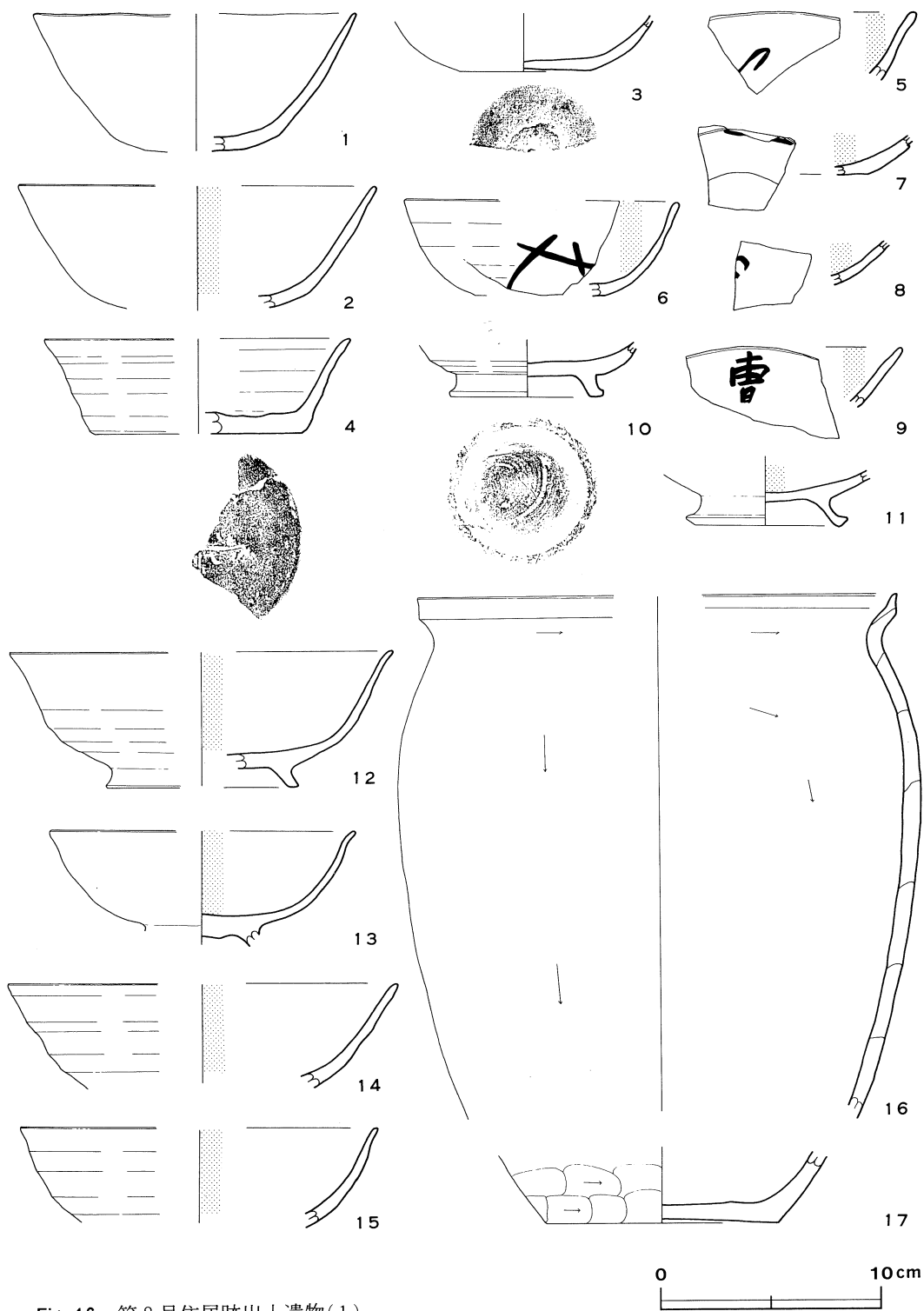


Fig.16 第8号住居跡出土遺物(1)

ア等を含み、焼成は普通である。

2 口径16.4cm、現高5.5cmほどの底部を欠く坏形土器で、現存部分は約 $\frac{1}{6}$ である。口縁部は内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面はロクロ整形、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

3 底径6.0cm、現高2.6cmほどの坏形土器の底部片であり、現存部は $\frac{1}{2}$ ほどである。底部は回転篋調整され、体部外面はロクロ整形、内面は一部が黒色研磨されている。色調は外面明灰褐色、内面一部黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

4 口径14.0cm、器高4.4cm、底部9.4cmほどの須恵器の坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部より外反ぎみに開いて立ちあがり、体部内外ともロクロ整形されている。外面には自然灰釉が一部にみられ、内面には摩耗痕が認められる。底部には刻書文字が一字みられるが解読できない。色調は外面灰褐色、内面灰色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

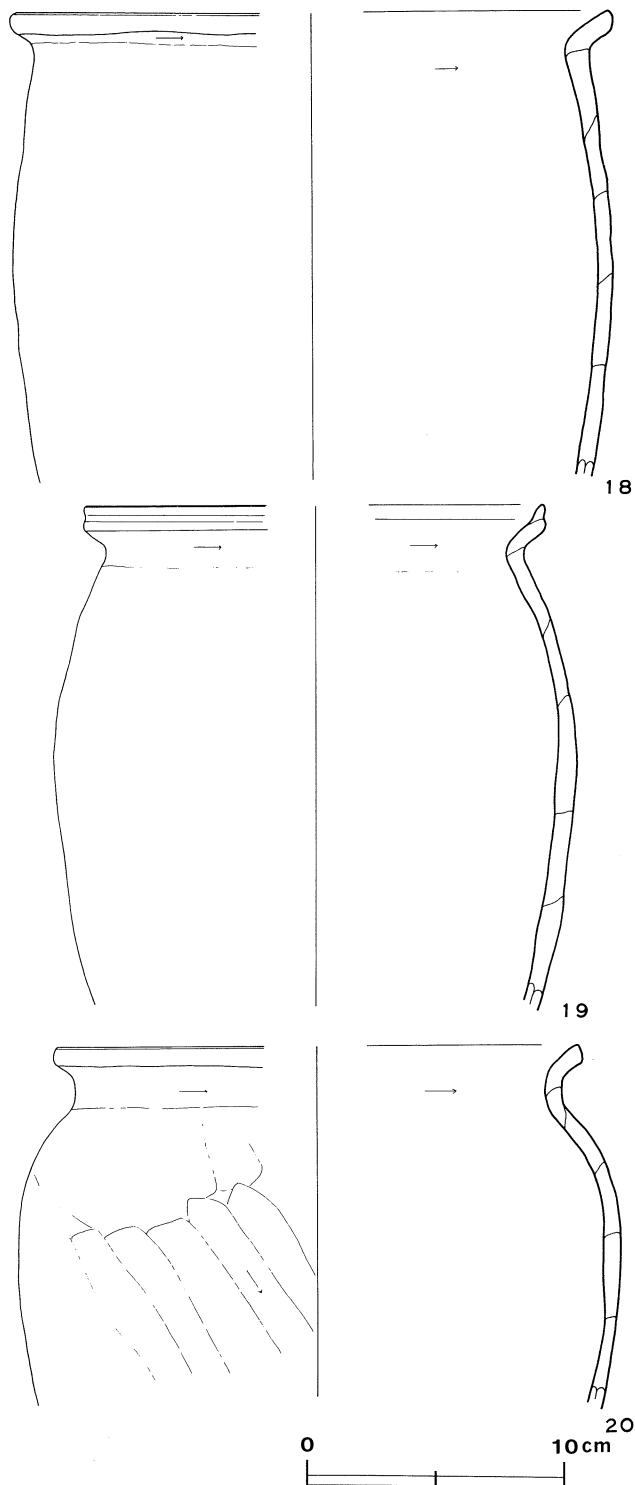


Fig. 17 第8号住居跡出土遺物(2)

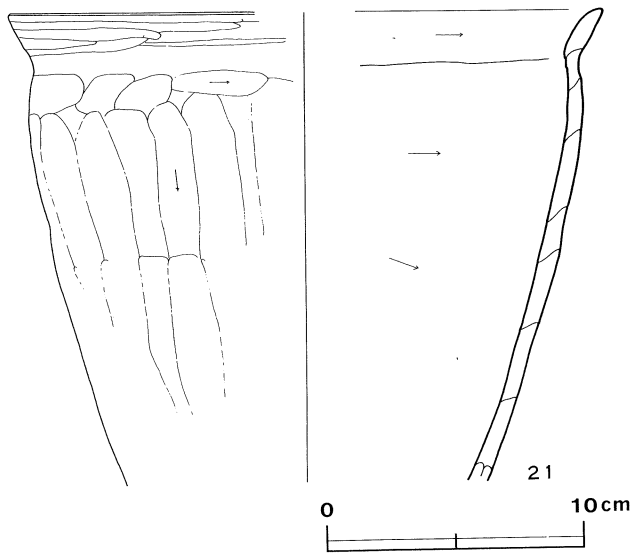


Fig. 18 第8号住居跡出土遺物(3)

5 体部外面に墨書がみられる
 坏形土器の口縁部片で破片のため
 文字は解読できない。体部外面は
 ロクロ整形され、内面はなで整形
 されている。色調は灰褐色を呈し、
 胎土中に砂粒・石英等を含み、焼
 成は普通である。

6 口径12.6cm、器高4.3cm、
 底径6.0cmほどの坏形土器で、現
 存部は約 $\frac{1}{8}$ であるが体部外面に
 「丈」の墨書がみられる。口縁部は
 底部より内彎ぎみに開いて立ちあ
 がり、体部外面ロクロ整形、内面
 黒色研磨されている。色調は外面

明褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

7 体部に墨書が認められる坏形土器の底部片で、文字は破片のため解読できない。体部下部は篋削りされて内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み、焼成は普通である。

8 体部に墨書が認められる坏形土器の口縁部片で、文字は解読できない。体部外面はロクロ整形、内面は黒色研磨されている。色調は外面褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

9 体部に「曹」の墨書が認められる坏形土器の口縁部破片で、体部外面はロクロ整形、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

10 底形10.0cm、現高2.5cmほどの高台付坏形土器の底部片で、外面はロクロ整形、内面は篋研磨がなされている。底部には回転糸切痕が認められ、貼付高台である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

11 底径7.2cm、現高2.5cmほどの高台付坏形土器の底部片であり、坏部下端は篋削り、内面は黒色研磨されている。高台部はハ字状に開き、内面はロクロ整形されている。色調は外面茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

12 口径17.6cm、器高6.1cm、底径8.8cmほどの高台付坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部から外反ぎみに開いて立ちあがり、高台は小形である。体部外面はロクロ整形がなさ

れ、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み、焼成は普通である。

13 口径約14.0cm、現高5.4cmほどの高台部を欠く高台付坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面はロクロ整形、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は普通である。

14 口径18.0cm、現高4.7cmほどの底部を欠く高台付坏形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{4}$ である。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面はロクロ整形、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒を少量含み、焼成は良好である。

15 口径16.4cm、現高4.5cmほどの坏形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面はロクロ整形、内面は黒色研磨されている。色調は外面黒褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

16 口径22.0cm、現高24.0cmほどの底部を欠く甕形土器で、現存部は約 $\frac{1}{4}$ である。口縁部は頸部から直立ぎみに立ちあがり、胴部はそれほど膨らまずに長胴形を呈する。口辺部内面とも横なで整形がなされ、胴部外面は上部が縦位のなで、下部は縦位の篋削りがなされ、内面には斜位のなで整形痕が認められる。色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

17 底径10.6cm、現高3.2cmほどの甕形土器の底部片であり、外面は横位の篋削り、内面はなで整形がなされている。色調は外面暗茶褐色、内面灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

18 口径23.4cm、現高18.2cmほどの胴下部以下を欠く甕形土器で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ である。口縁部は頸部より小さく外反して立ちあがり、胴部はそれほど膨らまない。口辺部内外は横なで整形がなされ、胴部外面には煤の付着が認められる。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

19 口径18.0cm、現高19.6cmほどの底部を欠く甕形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部よりやや開いて立ちあがり、胴部はそれほど膨らまない。口辺部は内外とも横なで整形がなされ、胴上部に縦位のなで、下部に縦位の篋削りが認められる。色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

20 口径20.4cm、現高14.0cmほどの甕形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{5}$ である。口縁部は頸部より外反して立ちあがり、胴部はやや膨らみを有している。口辺部は内外とも横なで整形がなされ、胴部外面は斜位の篋削り、内面は器面の剝落が顕著である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土

中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

21 口径23.2cm、現高18.0cmほどの底部を欠く甕形土器で、現存部は約 $\frac{1}{4}$ である。口縁部は頸部より小さく外反し、頸部はあまりくびれず直線的に底部へとすぼまる。口辺部外面は横位の篋削り、内面は横なでがなされ、胴部外面は縦位の篋削り、内面は横なでされている。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

鉄鍍(Fig. 46-9) 全長13.0cmほどの平根鍍であり、鍍部と茎部との分離は明確でなく、身幅は1.8cmほどで錆化はそれほど進んでいない。

烙印(Fig. 47) 全長33.0cmほどの大型のもので、印面は縦位約8.0cm、横位8.5cmに「丈」の一字がみられ、基部は長さ11.5cmほどの袋状を呈し、木質などの柄部を挿入したものと考えられる。錆化はそれほど進んでいない。

第9号住居跡

遺物(Fig. 19)

1 口径12.4cm、器高4.7cm、底径5.8cmほどの坏形土器で口縁部の一部を欠いている。口縁部は底部より内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面はロクロ整形後に下端部が篋削り、内面は篋研磨され、黒色処理が不完全である。また、底部には静止糸切痕が認められる。色調は外面暗褐色、内面黒褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

2 口径16.0cm、器高4.6cm、底径7.2cmほどの坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部から外反ぎみに開いて立ちあがり、体部外面はロクロ整形後に下端部が篋調整され、内面は黒色研磨されている。底部は一部のみ現存しているが、篋削り痕が認められる。色調は外面暗茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み、焼成は普通である。

3 口径13.2cm、器高4.4cm、底径7.6cmほどの須恵器の坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{5}$ である。口縁部は底部より外反ぎみに開いて立ちあがり、体部内外面ともロクロ整形痕が顕著である。また、体部外面には灰かぶりの状態が認められ、底部は回転篋調整されている。色調は灰色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

4 体部外面に「六因」の墨書が認められる坏形土器の口縁部片である。体部外面はロクロ整形がなされ、内面は黒色研磨されている。色調は外面褐色で一部黒褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み、焼成は普通である。

5 体部に墨書の一部が認められる坏形土器の体部片であり、文字は破片のため不明である。体部外面はロクロ整形され、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

6 口径13.0cm、現高2.5cmほどの天井部を欠く蓋形土器で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ である。内外面と

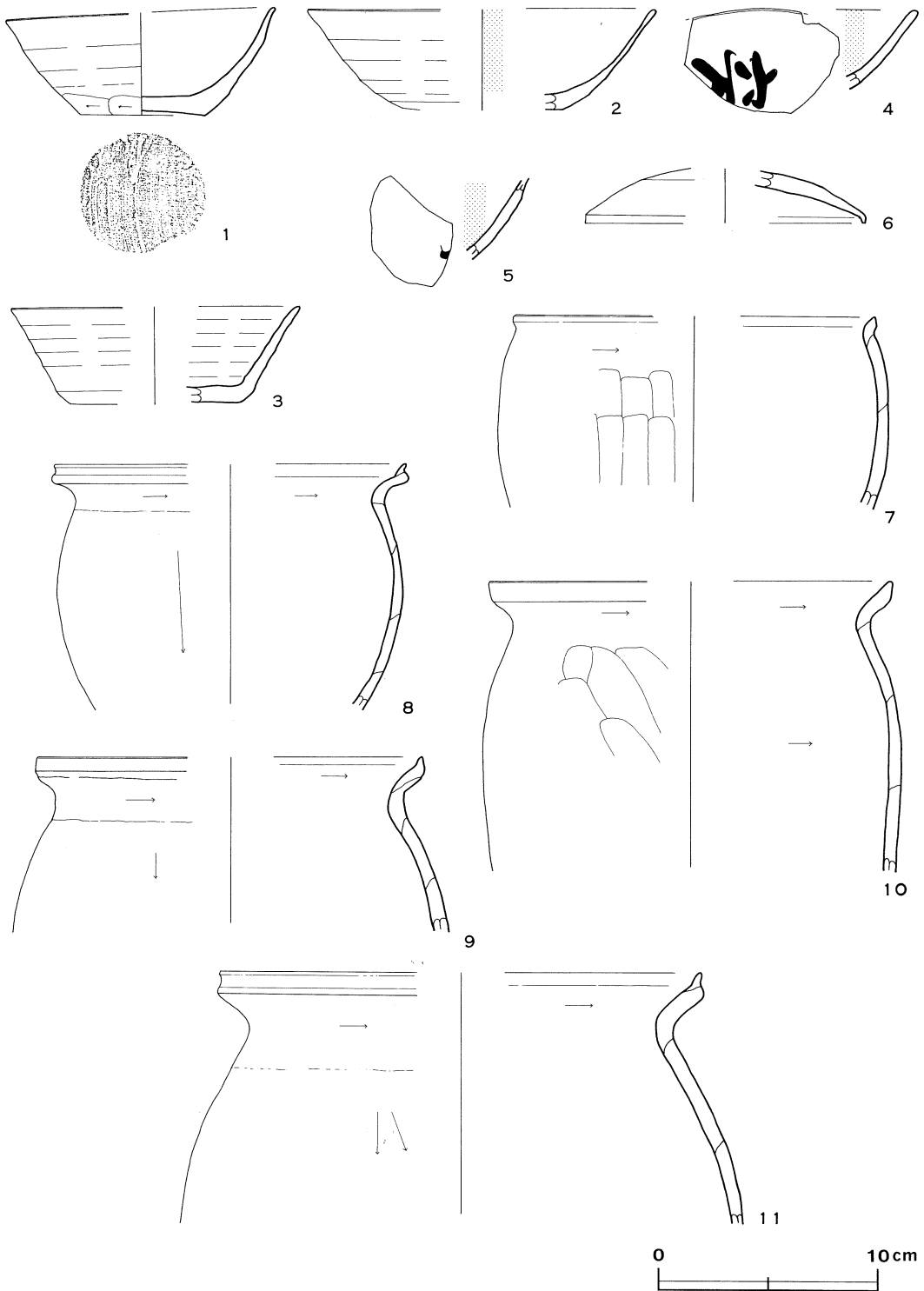


Fig.19 第9号住居跡出土遺物

もロクロ整形され、外面天井部には回転筥調整痕が認められる。色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は良好である

7 口径16.6cm、現高8.8cmほどの鉢形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は小さく外反し、胴部がやや膨らむ。口辺部外面は横なでがなされ、胴部は縦位に筥削りされているが摩耗し、内面は筥研磨されて一部が黒色処理されている。色調は外面暗褐色、内面褐色一部黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

8 口径16.0cm、現高11.2cmほどの底部を欠く甕形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部より大きく開いて、さらに直立ぎみに立ちあがり、胴部は球状を呈している。口辺部は内外とも横なでがなされ、胴部外面は縦位のなで整形がなされて煤の付着が認められる。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

9 口径17.6cm、現高8.0cmほどの甕形土器の口縁部片であり、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部より内彎ぎみに開いて立ちあがり、口辺部は内外とも横なで整形がなされている。胴部外面は摩耗しているものの縦位の筥削りが認められる。色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

10 口径18.4cm、現高13.2cmほどの甕形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{4}$ である。口縁部は頸部より開いて立ちあがり、口辺部は内外とも横なで整形がなされている。胴部はそれほど膨らまず、外面は斜位の筥削りとなで調整がなされ、内面にはかすかに横位の刷毛目状擦痕が認められる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

11 口径22.0cm、現高12.7cmほどの甕形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ である。口縁部は頸部より外反ぎみに開き、さらに直立ぎみに立ちあがる。胴部はやや膨らみを有して胴下部を欠く。口辺部は内外とも横なで整形がなされ、胴部外面に縦位のなで整形がみられる。色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

第10号住居跡

遺 構 (Fig. 20)

本住居跡は南北径約3.8m、東西径約4.0mの方形の平面形を呈し、主軸方向はN-17°-Wで東壁部に第11号住居跡が複合している。遺構検出面から床までの深さはローム層面の攪乱などによって20~75cmと幅があって、北壁がもっとも深く、壁はほぼ垂直に立ちあがりを示している。竈は北壁中央部に付設され、焚口部の全面に径35×38cm、深さ20cmほどのピットが検出されている。北壁に付設された竈の西および西壁、さらに東壁部には幅15~30cmほどの壁溝が検出されており、深さは10cm内外である。

本住居跡からの出土遺物はきわめて少なく、器形を復元できるものはないが、鉄製品が二点ほ

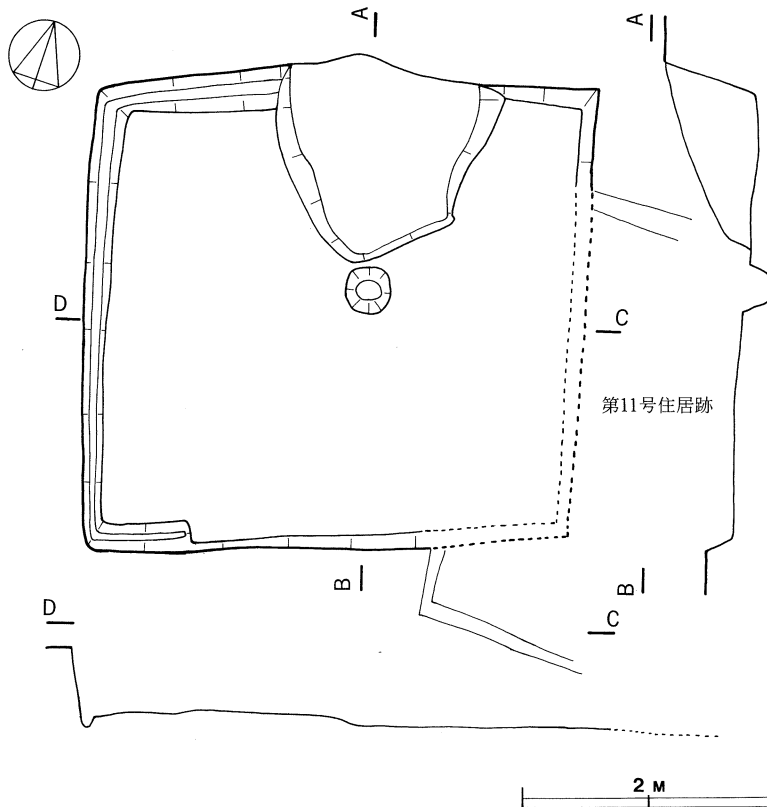


Fig. 20 第10号住居跡実測図

ど出土している。

遺物 (Fig. 46-2・17)

刀子(2) 現長10.7cmほどで、鋒部と茎尻を欠いている。関部は両関で、平棟・平造であり、刃部にはかなりの磨きべりが認められる。

足金具(17) 下部を欠損した現長2.1cmほどのもので、それほど錆化は進んでいない。

第11号住居跡

遺構 (Fig. 21)

本住居跡は南北径約3.8m、東西径3.32mの方形の平面形をなし、主軸方向はN-0°-Wで西壁部に第10号住居跡が複合している。遺構検出面から床までの深さは30cm内外であり、壁は垂直ぎみに立ちあがり、床はほぼ平坦である。竈は東壁中央部の南東コーナー部に付設されており、壁下に壁溝は検出されていない。

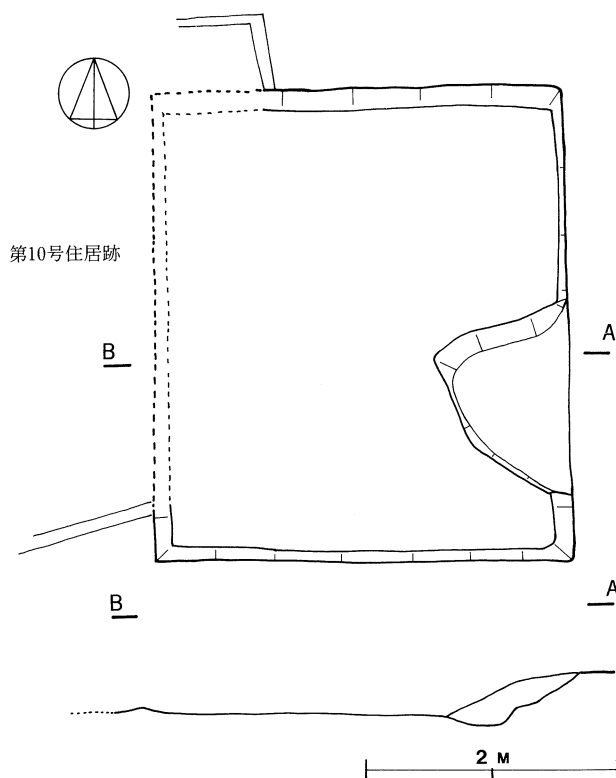


Fig. 21 第11号住居跡実測図

本住居跡からの出土遺物は坏類がほとんどであり、甕類の出土は小片である。

遺物(Fig. 22-1~6)

1 口径11.8cm, 器高3.7cm, 底径5.4cmほどの竈周辺より出土した坏形土器で, 口縁部の現存部が約 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり, 体部外面はロクロ整形, 内面は黒色研磨されている。底部はややあげ底状を呈し, 回転糸切痕が認められる。色調は外面暗褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は普通である。

2 口径12.0cm, 現高2.7cmほどの竈周辺より出土した底部を欠く坏形土器で, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は外反ぎみに開いて立ちあがり, 体部外面ロクロ整形, 内面篋研磨されている。色調は外面赤茶褐色, 内面暗褐色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は良好である。

3 底径9.0cm, 現高8.8cmほどの竈周辺部から出土した口縁部を欠く高台付坏形土器である。高台部は大きく, 坏部も内彎ぎみに開いて立ちあがっている。体部外面はロクロ整形, 内面は篋研磨されている。色調は暗褐色を呈し, 胎土中に砂粒・石英・礫等を含み, 焼成は普通である。

4 口径14.0cm, 器高6.0cm, 底径7.0cmほどの高台付坏形土器で, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁

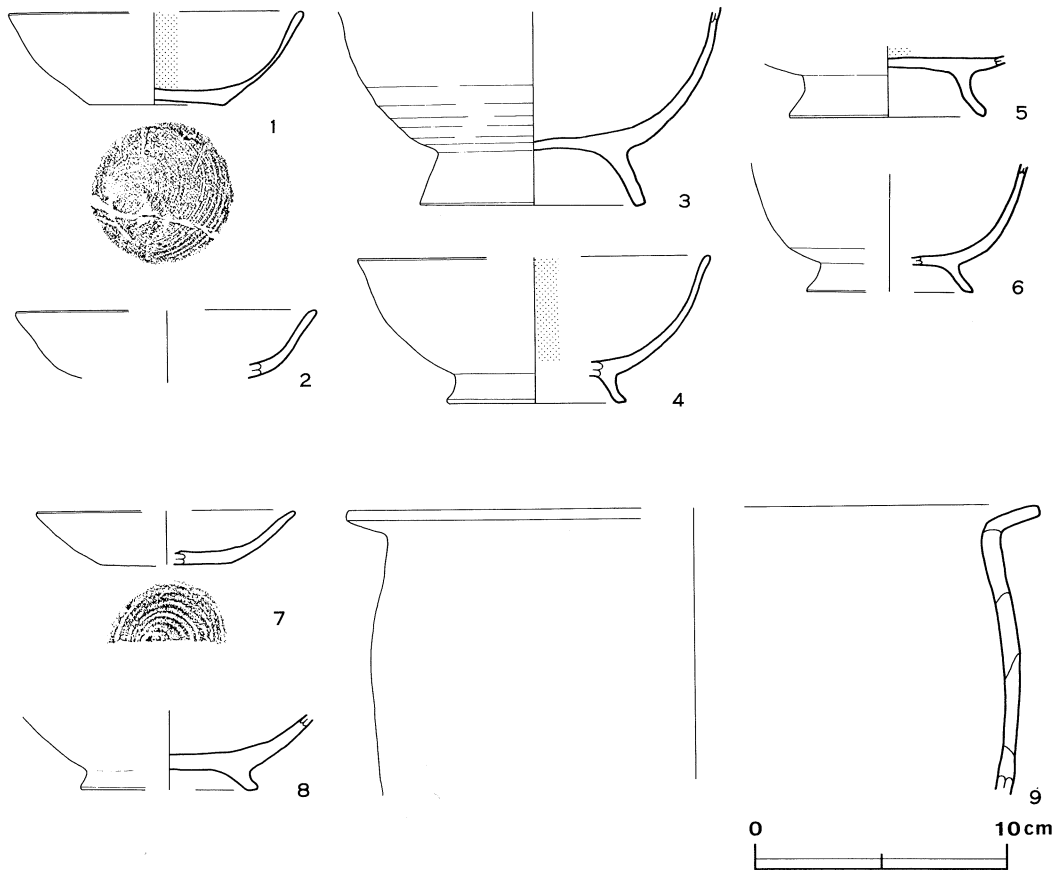


Fig.22 第11・12号住居跡出土遺物(1～6－第11号, 7～9－第12号)

部は底部より内彎ぎみに開いて立ちあがり、高台は裾部が外反ぎみに開いている。体部外面はロクロ整形され、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通であるが器外面が摩耗している。

5 底径7.4cm、現高2.5cmほどの高台付坏形土器の高台部であり、坏部外面ロクロ整形、内面黒色研磨がなされている。色調は外面明茶褐色、内面黒褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

6 底径6.6cm、現高5.2cmほどの口縁部を欠く高台付坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。坏部外面はロクロ整形、内面は篋研磨されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

第12号住居跡

遺 構 (Fig. 23)

本住居跡は10-20・21区を中心に検出され、南北径約4.32m、東西径約4.54mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-0°-Wである。本住居跡の南西コーナー部には第13号住居跡が複合している。遺構検出面から床までの深さは30~50cmであり、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。竈は北壁中央部に付設され、壁下に壁溝は検出されていない。床は北半分がやや高く、南半分が5cmほど低くなっている。

本住居跡からの出土遺物は少なく、3点のみが図示できただけである。

遺 物 (Fig. 22-7~9)

1 (Fig. 22-7) 口径10.2cm、器高2.1cm、底径6.2cmほどの竈周辺から出土した坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部から大きく開いて立ちあがり、内外面ともロクロ整形され、

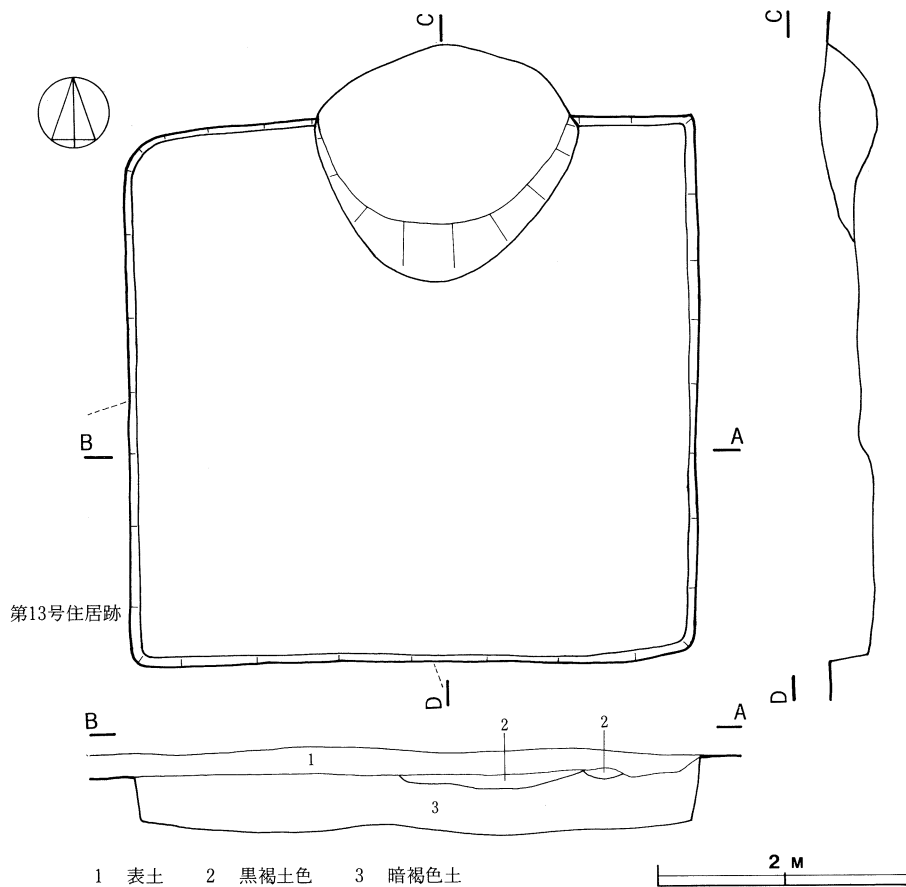


Fig. 23 第12号住居跡実測図

底部には回転糸切痕がみられる。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

2 (Fig. 22-8) 底径7.2cm, 現高3.0cmほどの竈周辺から出土した口縁部を欠く高台付坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{2}$ である。坏部外面はロクロ整形され、内面は篋研磨されており、底面には回転糸切痕が認められる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

3 (Fig. 22-9) 口径27.7cm, 現高11.5cmほどの甕形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{5}$ である。口縁部は頸部から大きく開き、胴部はそれほど膨らまない。口辺部は内外とも横なで整形がなされ、胴部外面はなで整形で煤の付着が認められる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は普通である。

第13号住居跡

遺 構 (Fig. 24)

本住居跡は11-20・21区を中心に検出され、南北径約3.0m, 東西径約3.2mの方形状の平面形を呈し、北東コーナー部に第12号住居跡が複合しているが、本住居跡が新しい時期のものである。

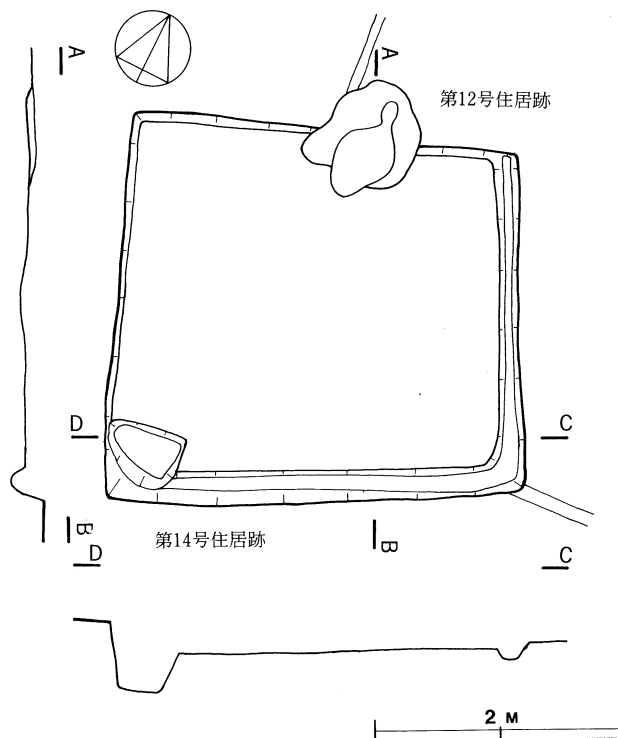


Fig. 24 第13号住居跡実測図

る。遺構検出面から床までの深さは10～30cmで、北壁中央部に竈が付設され、主軸方向はN-22°-Wである。東壁および南壁下には幅20～28cm、深さ10～15cmの壁溝が検出されているが、北壁および西壁部には検出されていない。床はほぼ平坦をなし、南西コーナー部には径50×60cm、深さ33cmほどの長方形の落ち込みが検出されている。

本住居跡からの出土遺物は多く、中でも坏類が顕著である。

遺物 (Fig. 25・26)

1 口径11.2cm、現高3.5cm、底径6.2cmほどの坏形土器で、口縁部は一部が欠損し、ゆがみを有している。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり、底部はあげ底状を呈し、回転糸切痕がみられる。体部は内外面ともロクロ整形がなされている。色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を多く含み、焼成は普通である。

2 口径12.0cm、器高3.8cm、底径5.8cmほどの坏形土器で、口縁部の一部を欠いている。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部内外面ともロクロ整形されている。また、体部外面には一部欠落しているものの「万合」の墨書がみられる。底部はややあげ底状を呈し、回転糸切痕がみられる。色調は灰褐色で一部赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・微礫等を含み、焼成は普通で二次焼成をうけている。

3 底径7.0cm、現高2.3cmほどの坏形土器の底部片で、現存部は約 $\frac{1}{4}$ である。体部外面はロクロ整形で内面は篋研磨されている。底部はあげ底状を呈し、回転糸切痕がみられる。色調は明茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

4 口径13.6cm、器高4.0cm、底径5.8cmほどの坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部より内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部内外面ともロクロ整形され、外面下端は斜位の篋削りがなされており、内面は器壁の剝落がはげしい。底部は静止糸切後に周辺部が篋削りされている。色調は赤茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫を含み、焼成は普通であるが二次焼成をうけている。

5 口径12.4cm、器高3.3cm、底径7.2cmほどの坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり、底部は回転篋切されている。体部は内外ともロクロ整形されており、色調は灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

6 口径11.4cm、器高3.5cm、底径6.0cmほどの坏形土器で、完形品である。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり、底部は回転篋切後に篋調整されて丸底状を呈し、体部外面はロクロ整形で内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面および外面の一部は黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は良好である。

7 口径11.2cm、器高3.1cm、底径6.6cmほどの坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり、底部は回転篋整形がなされている。体部外面はロクロ整形

されているが全体的に摩耗し、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗灰褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

8 口径14.6cm、現高4.7cmほどの坏形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{5}$ である。口縁部は内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面はロクロ整形で内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

9 口径10.6cm、現高3.0cmほどの坏形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面はロクロ整形で内面は黒色研磨されている。色調は外面灰褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

10 口径13.8cm、現高4.8cmほどの坏形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ である。口縁部は内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面ロクロ整形、内面は黒色研磨されている。色調は外面灰褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は普通である。

11 口径15.0cm、現高5.6cmほどの坏形土器の口縁部片であり、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面はロクロ整形がなされているが摩耗し、内面は黒色研磨されている。色調は外面赤茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通で二次焼成をうけている。

12 口径13.8cm、現高4.7cmほどの坏形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{5}$ である。口縁部は内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面はロクロ整形で内面は黒色研磨されている。色調は外面暗灰褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・雲母等を含み、焼成は良好である。

13～16は坏形土器の底部片であり、いずれも回転糸切痕が認められ、15がやや小型である。外面はいずれもロクロ整形痕が認められ、内面は15以外黒色研磨されている。

17～19は高台付坏形土器の高台部片であり、高台部はハ字状に開き、17・18の内面は篋研磨がなされて、19は黒色研磨されている。

20 口径19.2cm、現高6.8cmほどの甕形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ である。口縁部は頸部から外反ぎみに開いて立ちあがり、頸部はあまりくびれず、胴部もほとんど膨らまない。口縁部内外面は横なで整形がなされ、胴部外面は縦位の篋削りされて煤の付着が認められる。色調は外面明褐色、内面褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は普通である。

21 口径15.4cm、現高4.0cmほどの甕形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{4}$ である。口縁部は頸部より小さく開き、胴部はそれほど膨らまない。口縁部は内外面とも横なで整形がなされ、胴上部には縦位のなで整形がみられる。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

22 口径25.2cm、現高8.0cmほどの甕形土器の口縁部で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ である。口縁部は頸部より内彎ぎみに開いて立ちあがり、胴部はやや膨らみを有している。口辺部内外面は横なで整形

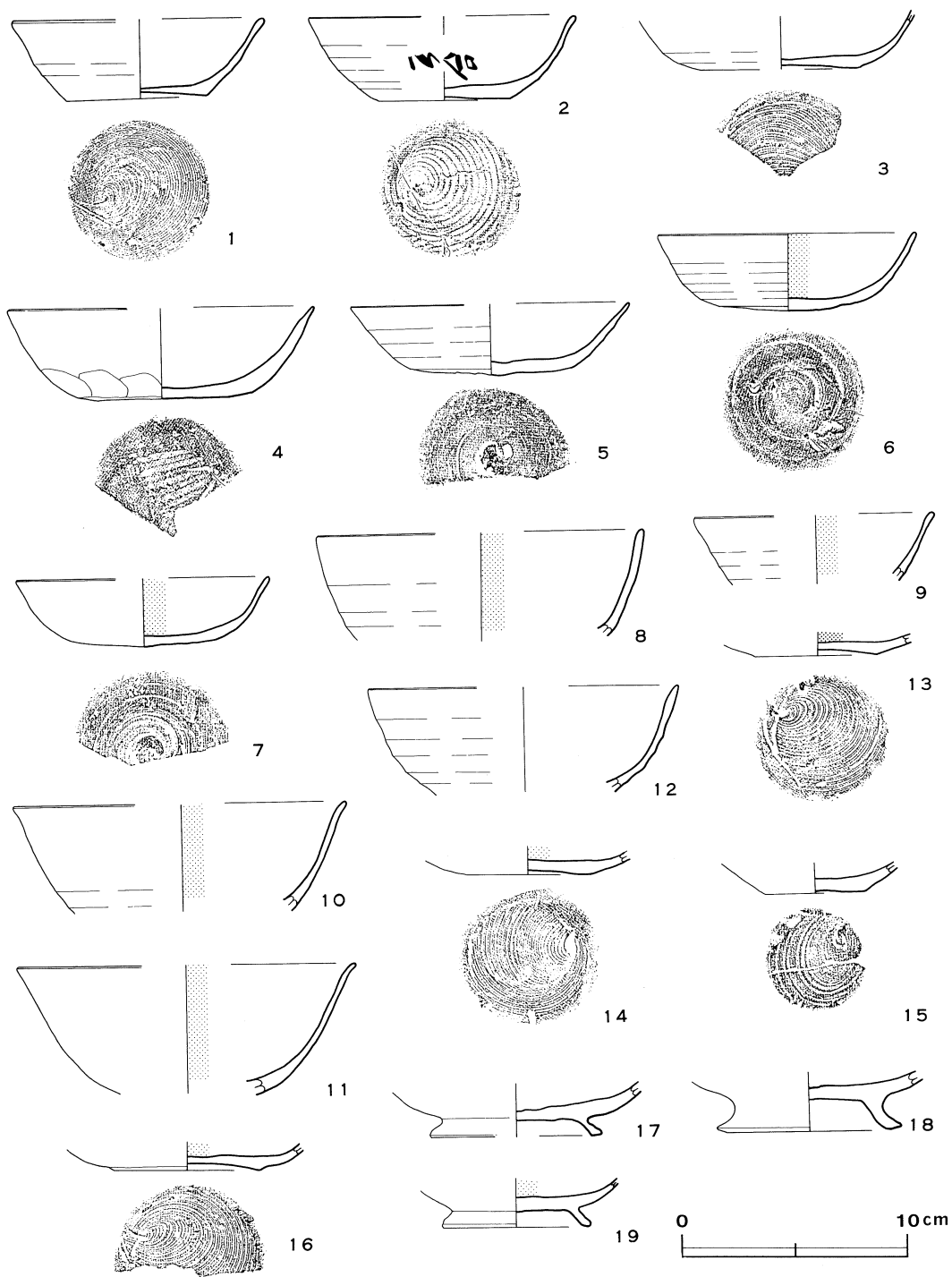


Fig. 25 第13号住居跡出土遺物(1)

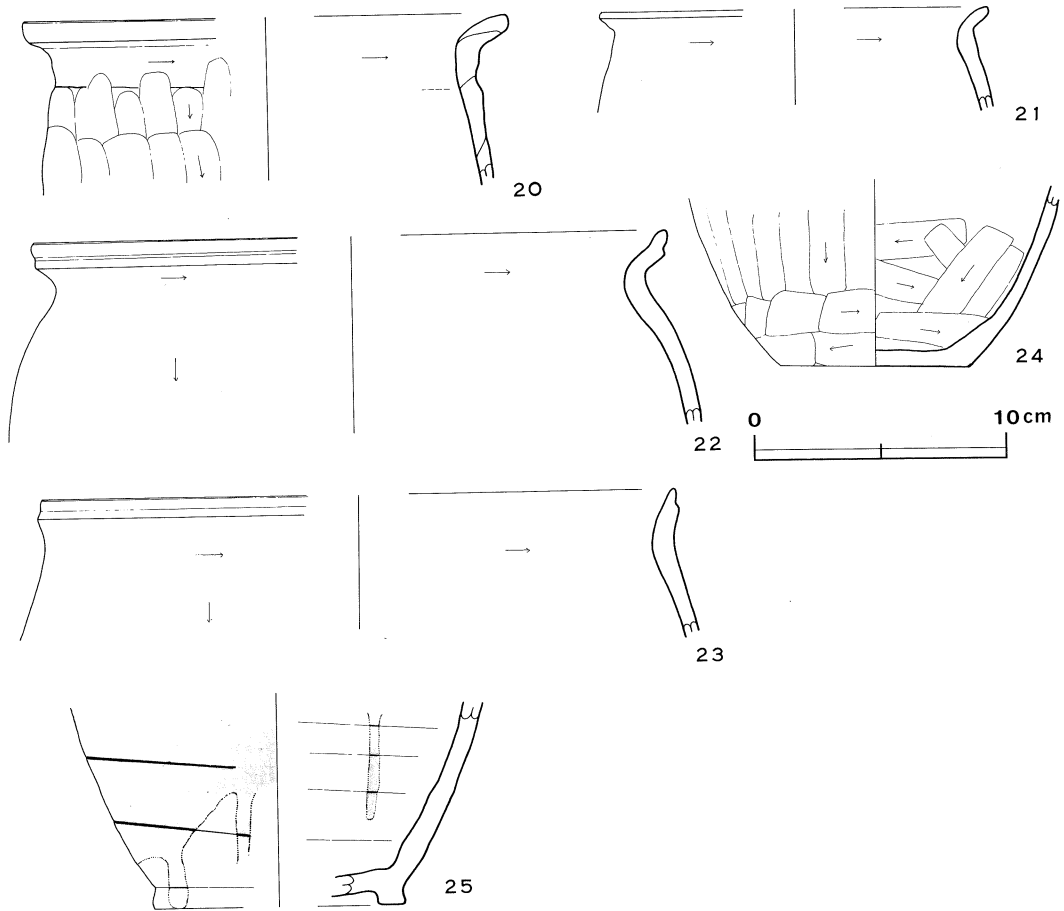


Fig. 26 第13号住居跡出土遺物(2)

がなされ、胴上部外面には縦位のなで整形がみられる。色調は赤茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

23 口径25.2cm、現高5.5cmほどの甕形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ である。口縁部は頸部から直立ぎみに立ちあがり、頸部はほとんどくびれない。口辺部内外面とも横なで整形がなされ、胴上部外面はなで整形されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

24 底径7.6cm、現高7.5cmほどの甕形土器の底部片であり、外面は縦位の篋削りで下部横位篋削り、内面は斜・横位の刷毛目整形である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土は砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

25 底径10.0cm、現高8.2cmの須恵器の長頸壺形土器の底部片で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。高台部は削り出しによる高台で、胴部外面に自然釉がみられる。色調は外面緑灰色、内面灰色を呈

し、胎土は緻密で、焼成とも良好である。

第14号住居跡

遺 構 (Fig. 27)

本住居跡は11-22・23区を中心に検出されたものであり、西壁部に第13号住居跡が複合し、さらに東壁部に第12号住居跡が複合している。西壁および東壁の一部が検出されたことによって東西径は約3.8mと計測できるが、北壁は複合のため検出されていない。竈は東壁のコーナーより付設され、主軸方向はN-72°-Wである。遺構検出面から床までの深さは10cm内外であり、壁は垂直ぎみに立ちあがっている。本住居跡は第12号住居跡よりも時期が新しい。

本住居跡からの出土遺物はきわめて少ない。

遺 物 (Fig. 29-1・2)

1 口径13.2cm、器高3.2cm、底径7.0cmほどの坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部より内彎ぎみに立ちあがり、底部は回転篋切されている。体部外面はロクロ整形で内面は篋研磨されている。色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

2 大型の須恵器の甕形土器の胴部片であり、外面には平行叩き痕がみられ、内面には叩きのあて具痕が顕著である。器厚は1.3~1.5cmと厚く、色調は灰色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

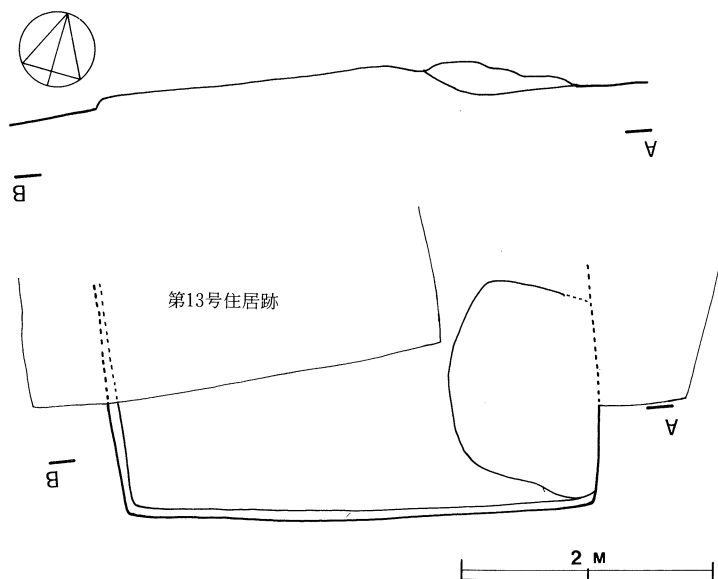


Fig. 27 第14号住居跡実測図

第15号住居跡

遺 構 (Fig. 28)

本住居跡は10-16・17・18区を中心に検出され、南北径約2.65m、東西径約3.43mの長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-66°-Eであるが北西コーナー部は未調査である。遺構検出面から床までの深さは20~30cmで、壁は垂直ぎみに立ちあがっているが、東壁部はゆるやかな立ちあがりを示し、壁下に壁溝は検出されていない。竈は東壁中央部よりやや南によって付設されており、床は平坦をなしている。

本住居跡からの出土遺物はそれほど多くなくてほとんどが坏形土器であり、鉄製品も一点出土している。

遺 物 (Fig. 29-3~7, Fig. 46-8)

1 (Fig. 29-3) 口径10.8cm、器高2.1cm、底径5.4cmほどの坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は底部から大きく開いて立ちあがり、体部は内外面ともロクロ整形され、底部には回転篋痕がみられる。色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は普通である。

2 (Fig. 29-4) 底径6.6cm、現高3.3cmほどの口縁部を欠く坏形土器で、現存部は約 $\frac{2}{3}$ である。体部外面はロクロ整形で内面は黒色研磨されている。底部は回転糸切後に部分的な篋削りがなされている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア・雲母等を含み、焼成は普通である。

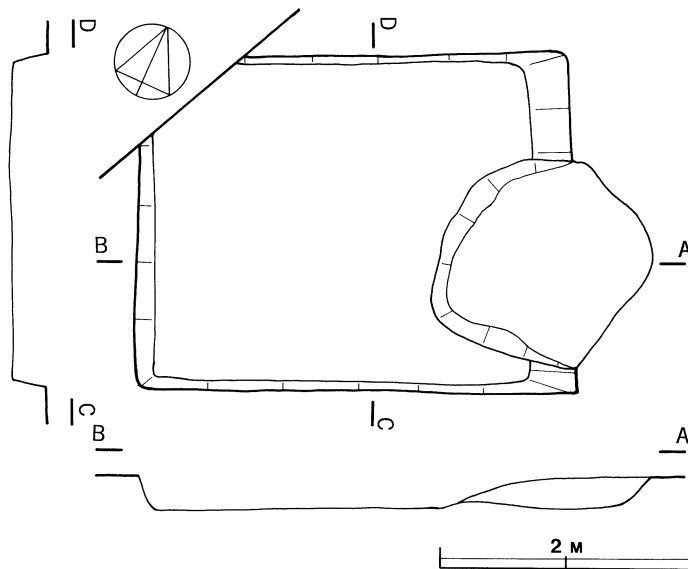


Fig. 28 第15号住居跡実測図

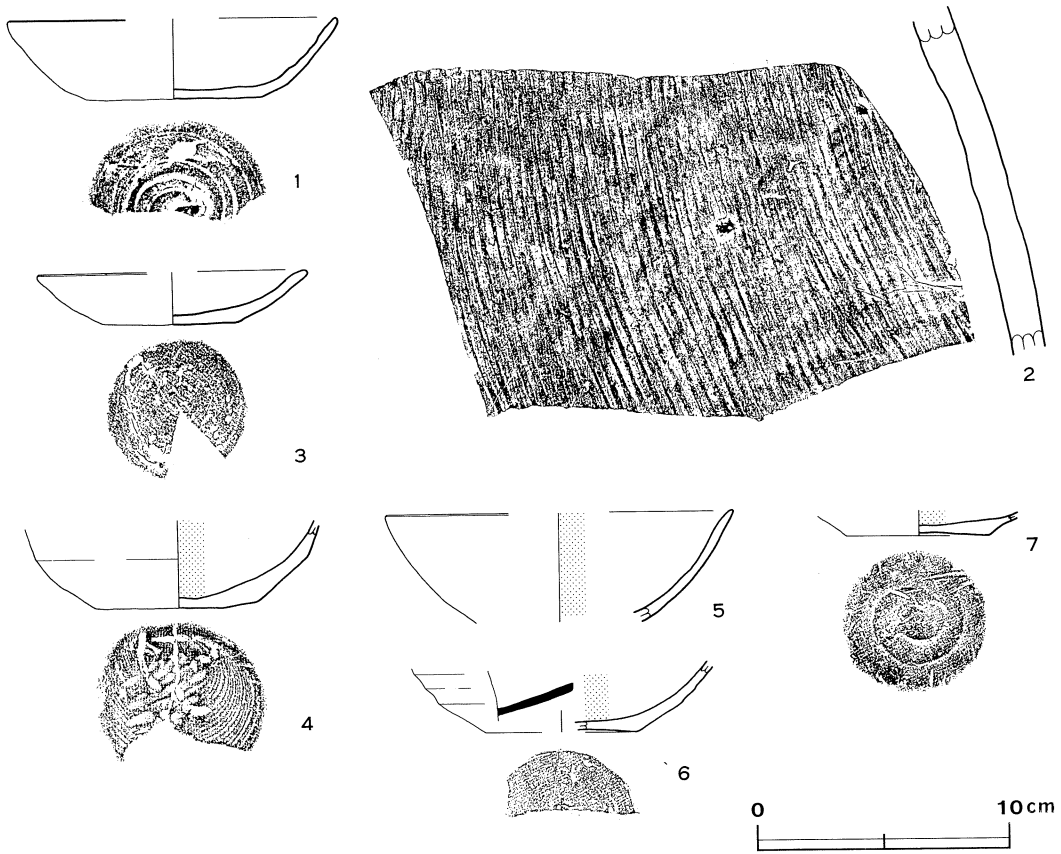


Fig. 29 第14・15号住居跡出土遺物(1・2-第14号, 3~7-第15号)

3 (Fig. 29-5) 口径14.0cm, 現高4.3cmほどの底部を欠く坏形土器で, 口縁部は内彎ぎみに開いて立ちあがり, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ ほどである。体部外面はロクロ整形で内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は普通である。

4 (Fig. 29-6) 底径6.0cm, 現高3.0cmほどの坏形土器の底部片であり, 体部に墨書が認められるが破片のため解読されず, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。体部外面はロクロ整形で内面は黒色研磨され, 底部には回転篋整形痕が認められる。色調は外面暗茶褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み, 焼成は良好である。

5 (Fig. 29-7) 底径5.8cm, 現高1.0cmほどの坏形土器の底部片であり, 内面は黒色研磨され, 底部は回転篋切がなされている。色調は外面暗褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は普通である。

直刀片 (Fig. 46-8) 現長3.0cmほどのほんの一部であるが, 身幅2.3cmほどで平棟の平造である。

第16号住居跡

遺 構 (Fig. 30)

本住居跡は南北径約3.05 m、東西径約3.9 mの長方形の平面形を呈し、主軸方向は $N-90^{\circ}-E$ で竈は東壁中央部に付設されている。遺構検出面から床までの深さは25~30cmで、壁はやや開いて立ちあがり、壁下に壁溝は検出されていない。南東コーナー部および北壁部の北西コーナー部よりピットがみられ、床の中央部の南西よりも 25×40 cm、深さ13cmほどのピットが検出されている。床は硬く平坦をなしている。

本住居跡からの出土遺物はほとんどみられない。

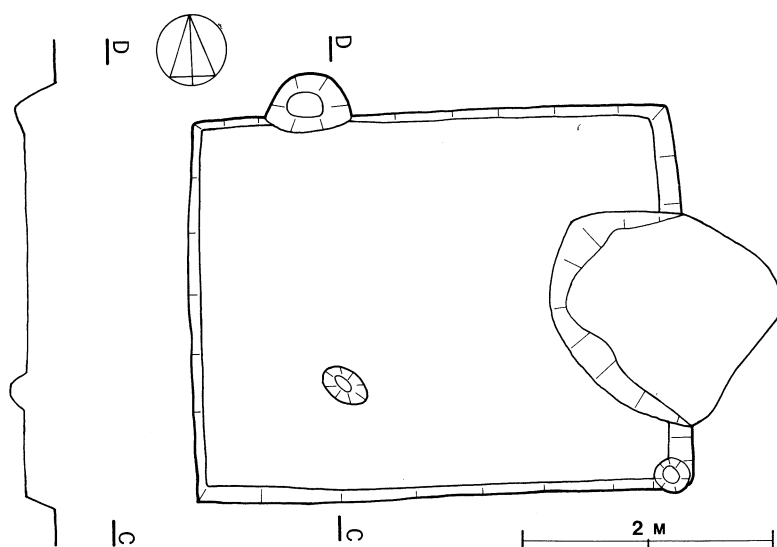


Fig. 30 第16号住居跡実測図

第17号住居跡

遺 構 (Fig. 31)

本住居跡は10-30区を中心に検出され、南北径約5.05 m、東西径約4.05 mの長方形の平面形を呈し、主軸方向は $N-70^{\circ}-E$ である。遺構検出面から床までの深さは20~30cmで、壁は垂直ぎみに立ちあがり、壁下に壁溝は検出されていない。竈は東壁中央部の南東コーナー部に付設され、南西コーナー部には 75×100 cm、深さ47cmの貯蔵穴状の落ち込みが検出されている。また、東壁の中央部および南壁には時期の異なる遺構が複合している。住居跡の覆土は自然流入の状況を示しており、平坦を呈する床面の上に黒色土(IV層)の堆積が認められる。

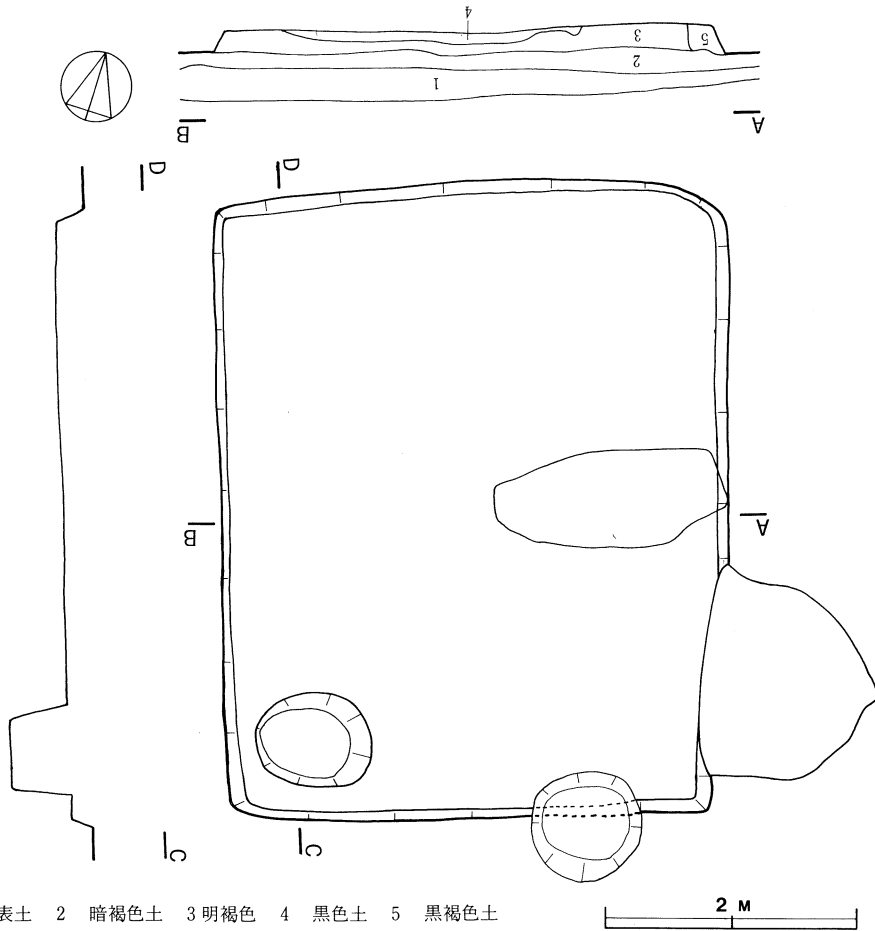


Fig. 31 第17号住居跡実測図

本住居跡からの出土遺物はほとんどが坏類であり、墨書土器も含まれている。

遺物(Fig. 32)

1 口径12.2cm，器高3.8cm，底径6.4cmほどの坏形土器で，口縁部は $\frac{1}{2}$ ほどである。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり，体部下端で段をなし，底部には回転糸切痕が認められている。体部外面はロクロ整形がなされ，内面は黒色研磨されている。色調は外面褐色，内面黒色を呈し，胎土中に砂粒・石英等を含み，焼成は良好である。

2 口径11.8cm，器高3.2cm，底径6.0cmほどの坏形土器で，現存部は $\frac{1}{2}$ ほどである。口縁部は底部から外反ぎみに開いて立ちあがり，底部には回転糸切痕が認められている。体部外面はロクロ整形がなされ，内面は篋研磨されている。色調は暗茶褐色を呈し，胎土中に砂粒等を含み，焼成は普通である。

3 底径6.2cm，現高1.3cmほどの坏形土器の底部片であり，底部には回転糸切痕がみられる。

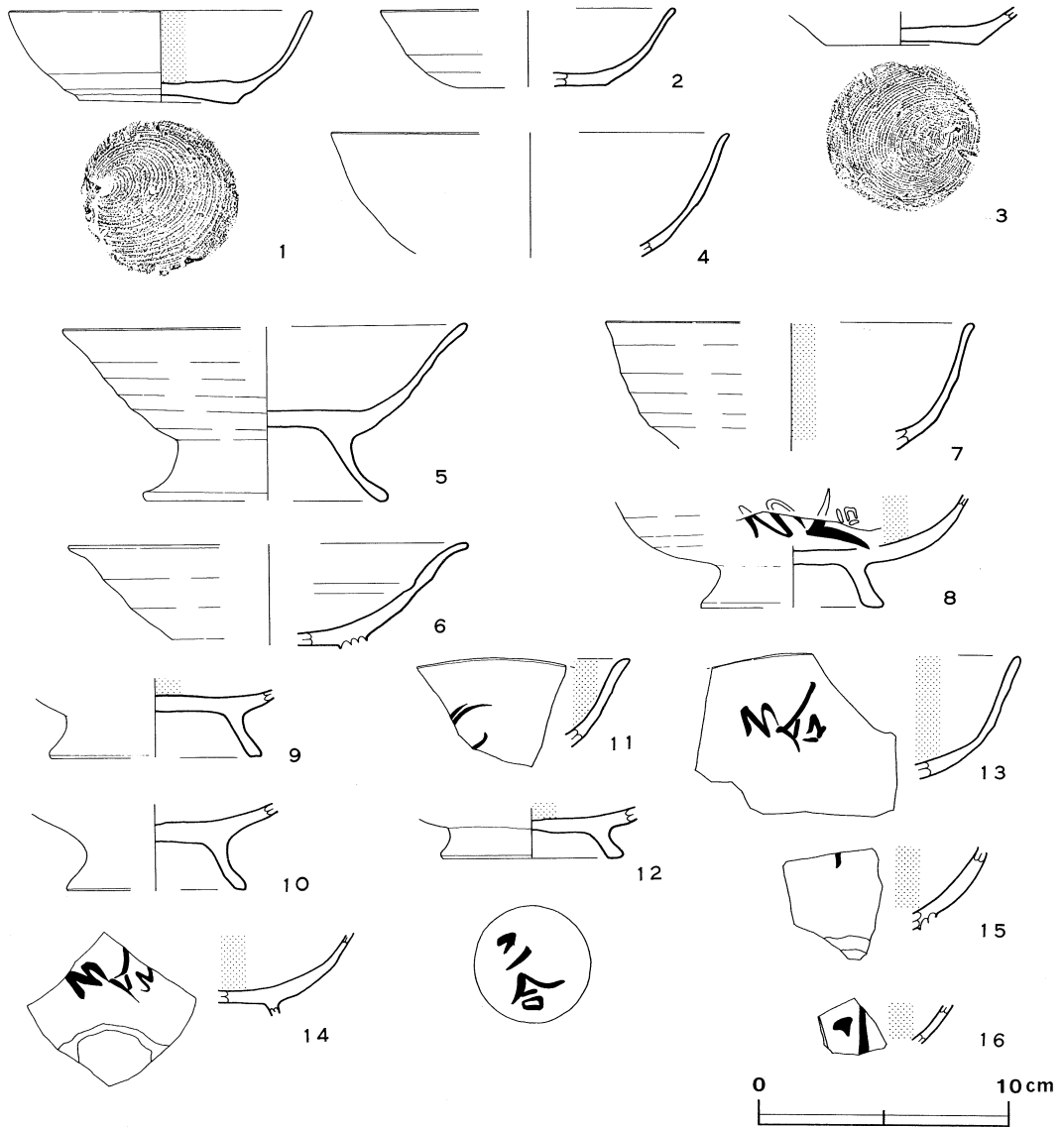


Fig. 32 第17号住居跡出土遺物

体部は内外面ともロクロ整形され、色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

4 口径16.0cm, 現高5.0cmほどの高台付坏形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{5}$ である。口縁部は内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面は磨耗しているがロクロ整形、内面は篋研磨されている。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

5 口径16.4cm, 器高7.0cm, 底径9.8cmほどの高台付坏形土器で、口縁部および高台部の一部

を欠いている。口縁部は外反ぎみに開いて立ちあがり、高台も裾部で大きく開いている。体部および高台部は内外面ともロクロ整形されている。色調は灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

6 口径16.0cm、現高4.0cmほどの高台部を欠く高台付坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ である。口縁部は底部から外反ぎみに大きく開いて立ちあがり、口辺部でさらに外反する。体部外面はロクロ整形で内面は篋研磨されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

7 口径14.8cm、現高5.1cmほどの高台付坏形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{5}$ である。口縁部は内彎ぎみに開いて立ちあがり、体部外面ロクロ整形、内面黒色研磨されている。色調は外面褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

8 底径7.4cm、現高5.4cmほどの口縁部を欠く高台付坏形土器で、体部外面には一部欠損しているが「因」の墨書がみられる。外面はロクロ整形で下端部が篋整形され、内面は黒色研磨されている。色調は外面灰褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

9 底径8.6cm、現高2.6cmほどの高台付坏形土器の高台部片で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。坏部内面は黒色研磨され、高台は裾部でやや開く。色調は外面褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は普通である。

10 底径7.2cm、現高3.5cmほどの高台付坏形土器の高台部片で、現存部は約 $\frac{1}{2}$ である。高台は裾部でやや開き、坏部内面は篋研磨されている。色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

11 体部に墨書がみられる坏形土器の口縁部片で、破片のため解読できない。外面はロクロ整形で内面は黒色研磨されている。色調は外面明褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み、焼成は普通である。

12 底径7.2cm、現高2.0cmほどの高台付坏形土器の高台部で、底面に「万合」の墨書がみられる。坏部内面は黒色研磨され、色調は外面褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒を含み、焼成は普通である。

13 体部外面に「万合」の墨書がみられる坏形土器の口縁部片である。体部外面はロクロ整形と篋整形され、内面は黒色研磨されている。色調は外面褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み、焼成は良好である。

14 体部外面に「万合」の墨書がみられる高台付坏形土器の底部片である。体部外面はロクロ整形で内面は黒色研磨されている。色調は外面灰褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

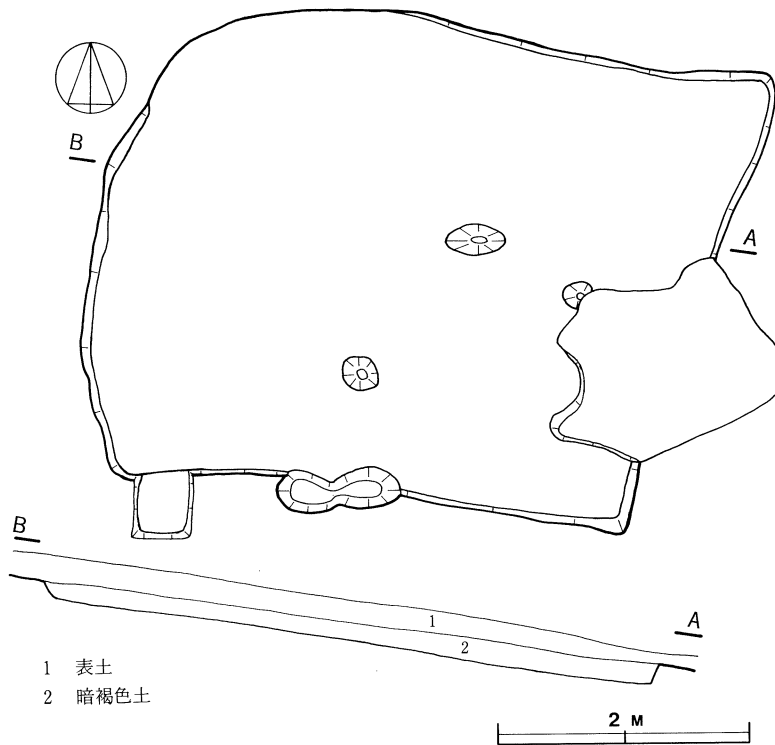


Fig. 33 第18号住居跡実測図

15 体部外面に墨書が認められる高台付坏形土器片で、文字は破片のため解読できない。坏部内面は黒色研磨され、高台部は欠損している。色調は外面暗褐色土、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

16 体部に墨書のみられる坏形土器片で、文字は破片のため解読できない。内面は黒色研磨され、外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

第18号住居跡

遺 構 (Fig. 33)

本住居跡は03-20区を中心に検出され、南北径約3.7m、東西径約4.4mの方形状の平面形を呈しているが、北西コーナー部などが不定形であり、西壁もやや中央部が張り出している。竈は東壁部中央のやや南東コーナー部よりに付設されている。遺構検出面から床までの深さは10~15cmで、壁は垂直ぎみに立ちあがり、壁下に壁溝はみられない。床面はほぼ平坦をなし、竈の前部や床の中央部にピットが3か所ほど検出されているが、いずれも柱穴とは考えられない。また、南壁中央部には双円形のピット、南西コーナー部には方形状のピットが複合しているが、本住居

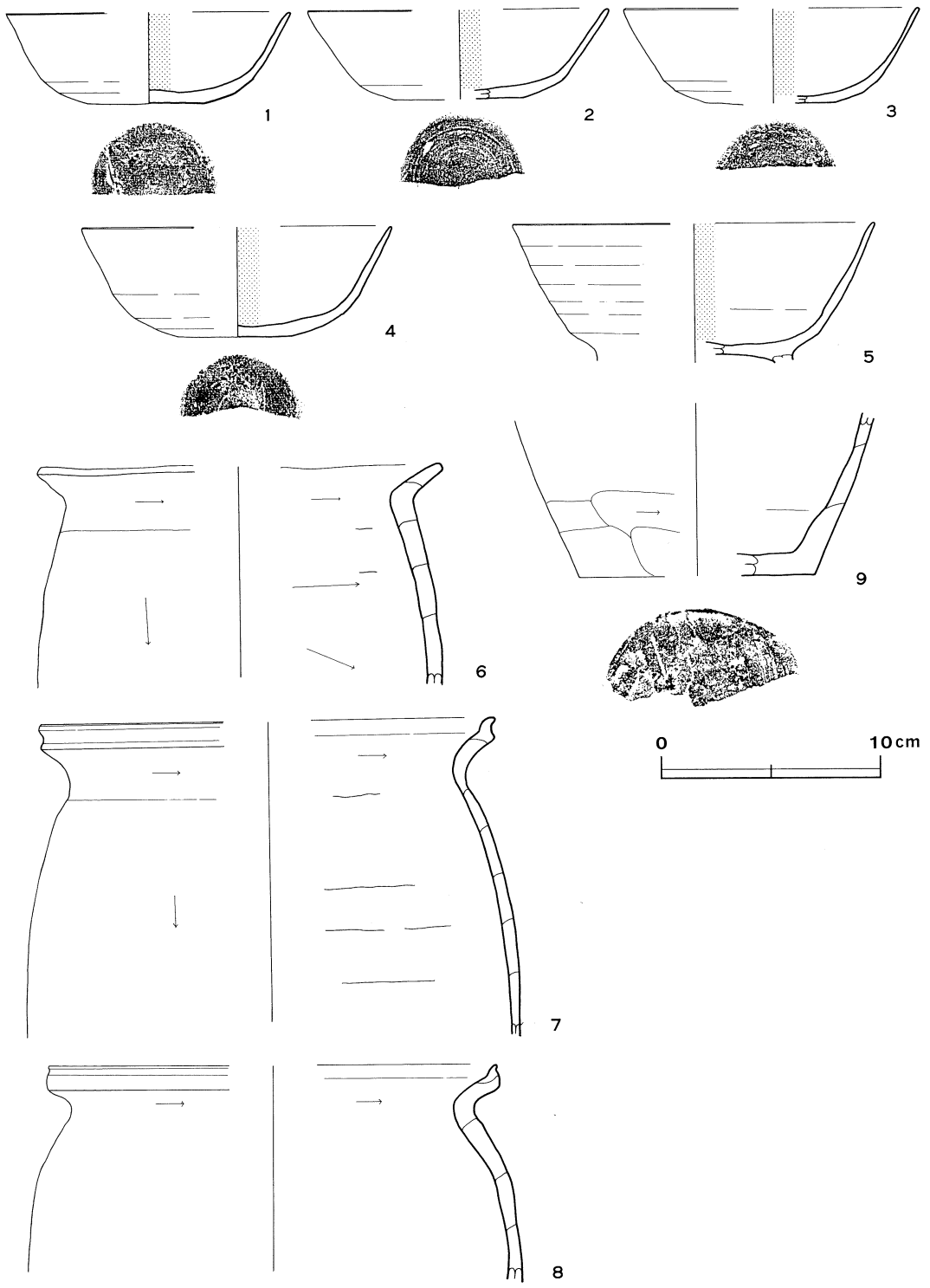


Fig. 34 第18号住居跡出土遺物(1)

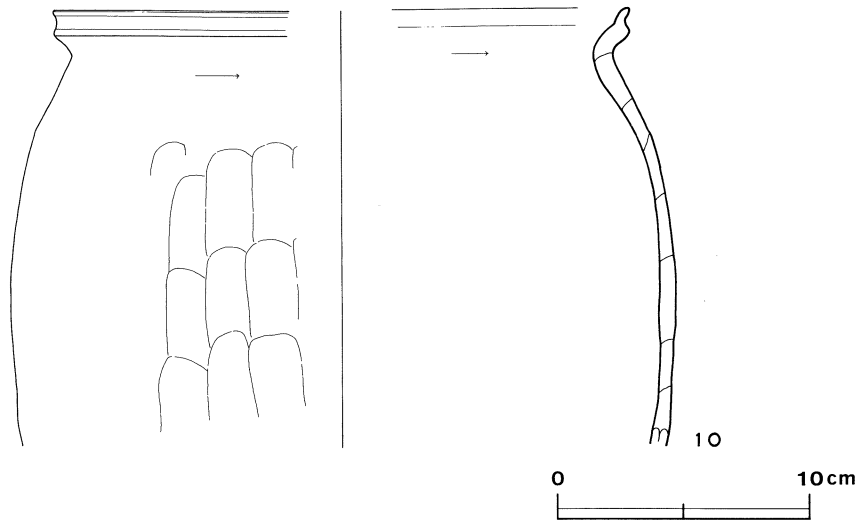


Fig. 35 第18号住居跡出土遺物(2)

跡とは無関係のものである。

本住居跡からの出土遺物はやや多く、ほとんどが竈周辺および床面からの出土である。

遺物(Fig. 34・35)

1 口径13.0cm, 器高4.2cm, 底径5.4cmほどの坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は底部から外反ぎみに開いて立ちあがり、底部は回転篋調整されている。体部外面は磨耗しているがロクロ整形で内面は黒色研磨されている。色調は外面茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

2 口径14.0cm, 器高4.1cm, 底径6.0cmほどの坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は底部から開いて立ちあがり、底部は回転篋調整されている。体部外面はロクロ整形されて下端部が篋整形、内面は黒色研磨されている。色調は外面茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み、焼成は良好である。

3 口径13.6cm, 器高4.2cm, 底径6.0cmほどの坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{4}$ である。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり、底部は回転篋調整されている。体部外面はロクロ整形で下端部が篋整形され、内面は黒色研磨されている。色調は外面茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通であるが器外面の磨耗がはげしい。

4 口径14.2cm, 器高5.0cm, 底径5.2cmほどの坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり、底部は回転篋調整されている。体部外面はロクロ整形で下端部が篋整形され、内面は黒色研磨されている。色調は外面茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は普通であるが器外面の磨耗がはげしい。

5 口径16.6cm, 現高6.5cmほどの高台部を欠く高台付坏形土器で, 現存部は約 $\frac{1}{4}$ である。口縁部は底部から直線的に開いて立ちあがり, 体部外面はロクロ整形で内面黒色研磨されている。色調は外面暗茶褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み, 焼成は普通であるが器外面の磨耗がはげしい。

6 口径18.6cm, 現高10.2cmほどの甕形土器の口縁部片で, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部から「く」の字状に開いて立ちあがり, 胴部はそれほど膨らまない。口辺部内外は横なで整形がなされ, 胴部は外面縦位の篋削り, 内面横位の刷毛目整形がなされている。色調は暗褐色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は普通であるが全体的に作りや整形は雑である。

7 口径20.8cm, 現高14.6cmほどの甕形土器の口縁部片で, 現存部は約 $\frac{1}{4}$ である。口縁部は頸部から外反ぎみに開いてさらに立ちあがり, 胴部はそれほど膨らまない。口辺部内外は横なで整形がなされ, 胴部の内外面ともなで整形されているが, 内面には輪積み痕が認められる。色調は暗褐色を呈し, 胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み, 焼成は普通である。

8 口径20.6cm, 現高10.0cmほどの甕形土器の口縁部片で, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部から内彎ぎみに開いてさらに立ちあがり, 胴部はそれほど膨らまない。口辺部内外は横なで整形がなされ, 胴部外面は縦位になで整形されている。色調は明褐色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は普通である。

9 底径10.8cm, 現高7.2cmほどの甕形土器の底部片で, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。胴部外面はなで整形で下端部は横位の篋削りがなされ, 底部は周縁部が篋削りされている。色調は暗茶褐色を呈し, 胎土中に砂粒・スコリア等を含み, 焼成は普通である。

10 口径23.0cm, 現高17.4cmほどの甕形土器の口縁部片で, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部から小さく外反して立ちあがり, 胴部はやや膨らみを有している。口辺部内外は横なでがなされ, 胴部外面は縦位の篋削りされている。色調は暗茶褐色を呈し, 胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み, 焼成は普通である。

第19号住居跡

遺 構 (Fig. 36)

本住居跡は南北径約2.78m, 東西径約2.94mの方形の平面形を呈し, 主軸方向はN-0°-Wであり, 東壁中央部のやや南に竈が付設されている。遺構検出面から床までの深さは10~15cmで, 壁はやや開いて立ちあがり, 壁下に壁溝は検出されていない。西壁中央部には小ピットが検出されているが, 本住居跡との関係は不明である。床はほぼ平坦をなし, 住居跡内の覆土はほぼ一定で暗褐色土の堆積が認められる。

本住居跡からの出土遺物はほとんどない。

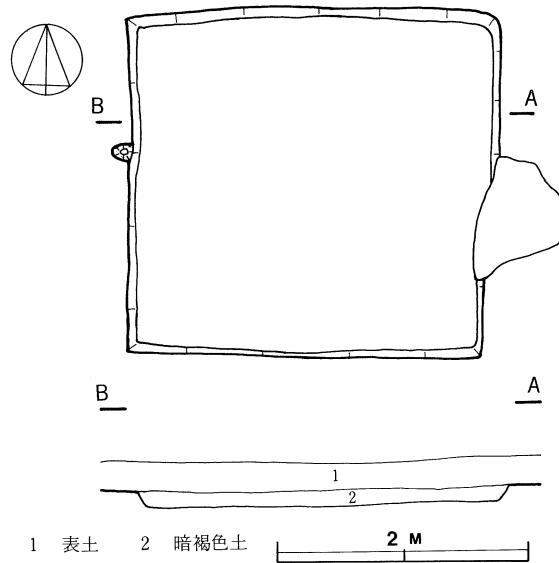


Fig. 36 第19号住居跡実測図

第20号住居跡

遺構 (Fig. 37)

本住居跡は05-14区を中心に検出され、南北径約3.22m、東西径約4.0mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-76°-Eで、東壁中央部の南東コーナーよりに竈が付設されている。遺構検出面から床までの深さは13~25cmで、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。南東コーナー部から南壁、さらに西壁下には幅20cm内外、深さ10cmほどの壁溝が検出されているが、北壁・東壁にはみられない。北東コーナー部には、95×100cm、深さ50cmほどの方形の落ち込みが検出されているが、本住居跡より新しい時期のものである。また、西壁部に長径が20cmほどのピットが2か所に検出されている。床は平坦をなし、住居跡の覆土も自然流入の状況を示しているが、中央部に向かってやや複雑な流れ込みを示している。

本住居跡からの出土遺物は少なく、墨書土器が2点である。

遺物 (Fig. 38)

1 口径11.2cm、器高3.1cm、底径5.4cmほどの坏形土器で、口縁部の一部を欠き、体部には二文字「因万」がみられる。口縁部は底部から開いて立ちあがり、底部はあげ底状で回転糸切痕がみられる。体部外面はロクロ整形され、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通であり、外面に煤が付着している。

2 体部に墨書の一部がみられる坏形土器片で、文字は破片のため解読できない。体部外面は

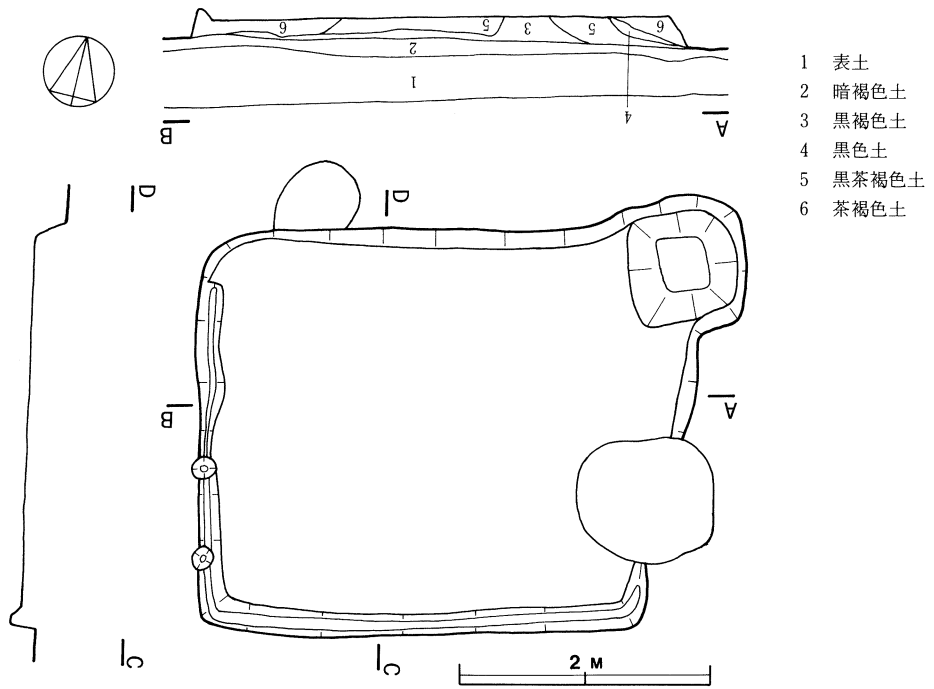


Fig. 37 第20号住居跡実測図

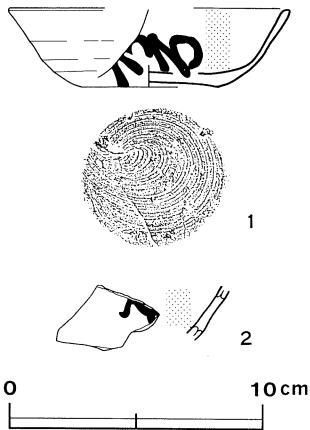


Fig. 38 第20号住居跡出土遺物

ロクロ整形で内面黒色研磨されている。色調は外面褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

第21号住居跡

遺構 (Fig. 39)

本住居跡は南北径約3.7m、東西径約3.4mの隅丸方形形状の平面形を呈し、主軸方向はN-17°-Wである。遺構検出面から床までの深さは8~10cmほどで、壁は外方へ開いて立ちあがり、北東コーナー部には住居跡が複合し、北壁中央部に竈が付設されている。また、壁下に壁溝は検出されていない。床面はほぼ平坦をな

しており、4か所のピットが検出されている。

本住居跡からの遺物はほとんど検出されていない。

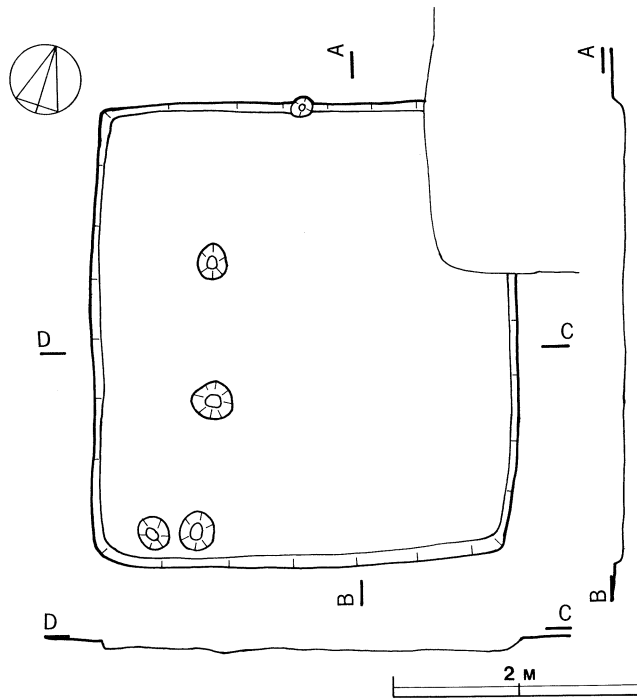


Fig. 39 第21号住居跡実測図

第22号住居跡

遺 構 (Fig. 40)

本住居跡は南北径約4.47 mで東西径はすでに削平されて盛土されていたため不明であるが、その径は3.15 m以上であり、主軸方向はN-81°-Eである。北西コーナー部は攪乱のため張り出した状態であり、北東コーナー部には方形の落ち込みが複合している。本来、本住居跡は4.0 m前後の方形の平面形を呈していたものと考えられる。遺構検出面から床までの深さは30 cm内外で、壁は垂直ぎみに立ちあがり、壁下に壁溝は認められない。竈は東壁の南東コーナーよりに付設され、東壁部を1 mほど掘りこんでいる。住居跡内の覆土は明確な分層はみられず黒褐色土で、床面はほぼ平坦である。

本住居跡からの遺物はほとんど検出されていない。

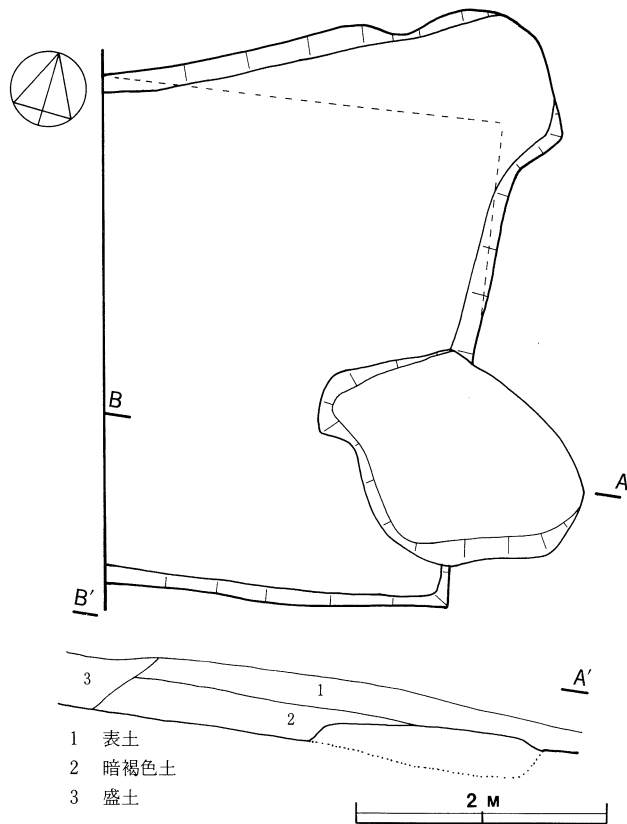


Fig. 40 第22号住居跡実測図

第23号住居跡

遺 構 (Fig. 41)

本住居跡は南北径約5.57 m，東西径約4.45 mほどの隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向はN-75°-Eで東壁中央部に竈が付設されている。遺構検出面から床までの深さは10~25cmであり，北・南・西壁部が高く，東壁部は低い。壁はほぼ垂直に立ちあがりを示し，北壁から西壁にかけては幅20~30cm，深さ5~10cmの壁溝が検出され，北壁および南・西壁部にはそれぞれ2か所のピットが位置し，竈の北側にも2か所みられる。北・南・西壁部のピットは上屋の構造との関連が考えられ，遺構検出面からは25~45cmの深さを有している。住居跡内の覆土は自然流入の状況を示しており，床は平坦である。

本住居跡からの遺物はほとんど検出されていない。

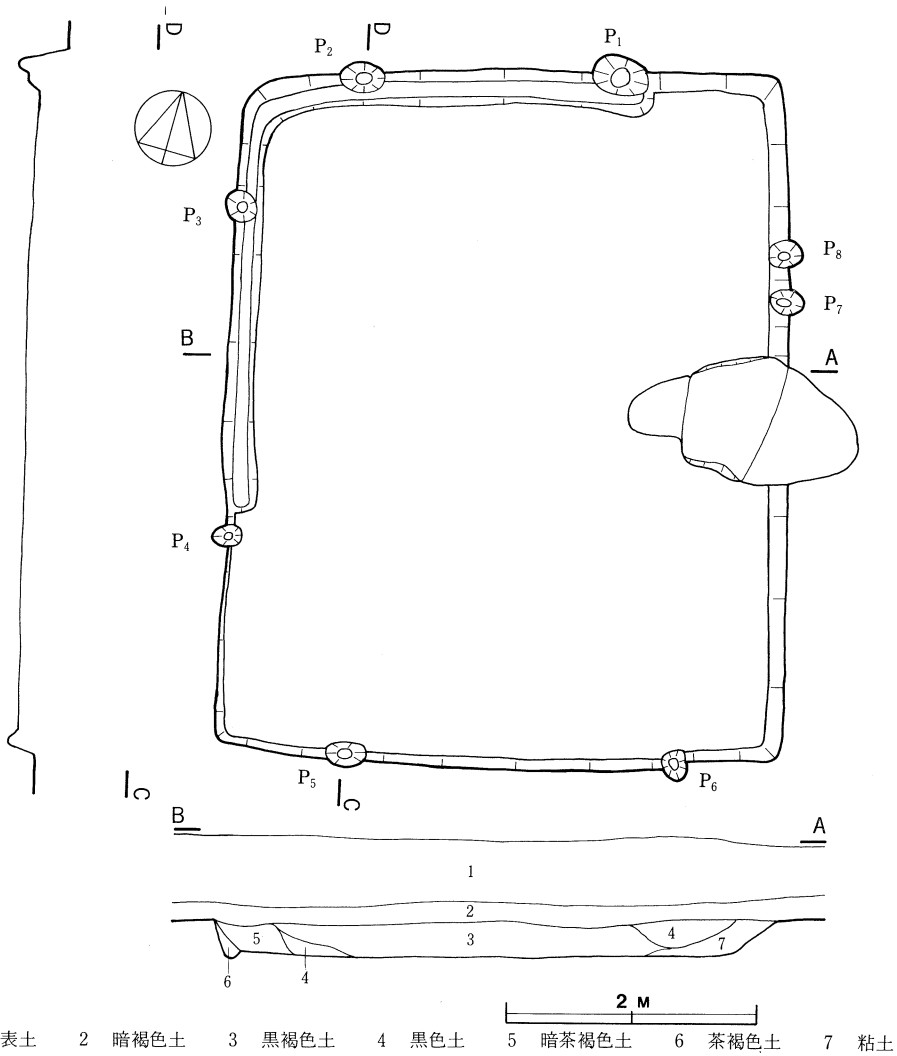


Fig. 41 第23号住居跡実測図

第24号住居跡

遺 構 (Fig. 42)

本住居跡は南北径約3.34m、東西径約3.86mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN-32°-Wで北壁中央部に竈が付設されている。遺構検出面から床までの深さは18~20cmであり、壁は外方へ開いて立ちあがって壁下に壁溝は検出されていない。住居跡内の覆土は自然流入の状況を示しており、床は平坦をなしている。

本住居跡からの遺物はほとんど検出されていない。

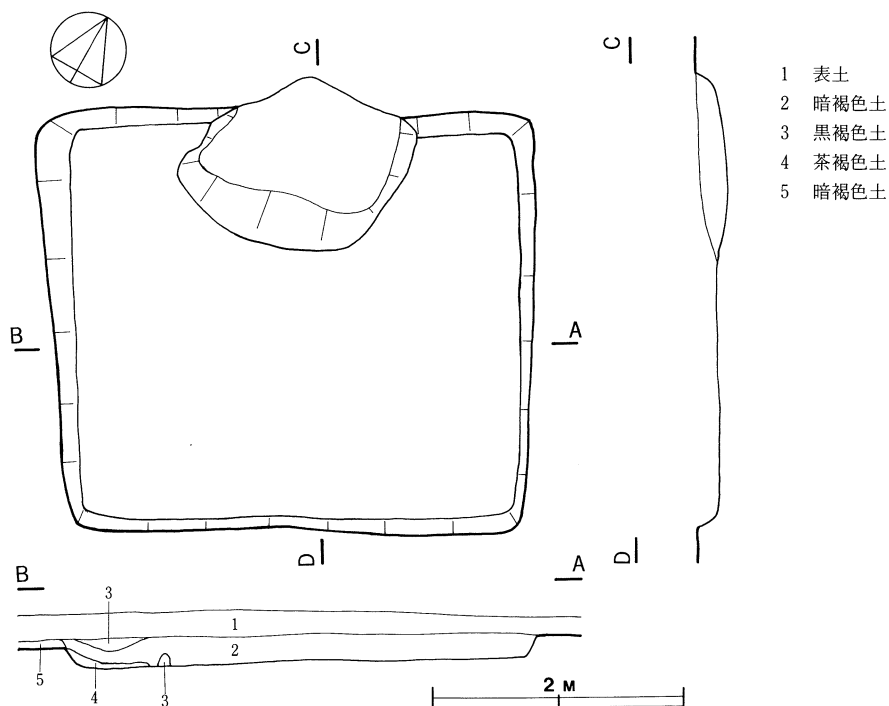


Fig. 42 第24号住居跡実測図

2 調査区出土の遺物

1) 土器類 (Fig. 43・44)

1 口径15.0cm, 器高4.6cm, 底径8.4cmほどの04-10区から出土した須恵器のの坏形土器で, 口縁部は約 $\frac{1}{5}$ が現存している。口縁部は底部より外反ぎみに開いて立ちあがり, 体部は内外面ともロクロ整形されているが, 外面は一部灰かぶりがみられ, 内面は摩耗している。底部には回転篋切痕が認められる。色調は灰色を呈し, 胎土中に砂粒等を含み, 焼成は良好である。

2 口径14.0cm, 器高4.9cm, 底径10.0cmほどの03-05区より出土した須恵器の坏形土器で, 現存部は約 $\frac{1}{5}$ である。口縁部は底部からそれほど開かず立ちあがり, 体部は内外面ともロクロ整形され, 底部に「×」状の刻書がみられる。色調は灰色を呈し, 胎土中に砂粒を含み, 焼成は良好である。

3 口径20.0cm, 現高7.5cmほどの05-19区より出土した須恵器の甕形土器の口縁部片で, 現存部は約 $\frac{1}{5}$ である。口縁部は頸部から外反ぎみに開いて立ちあがり, 口辺部は複合状を呈している。内外面はいずれもロクロ整形され, 色調は灰色を呈し, 胎土中に砂粒等を含み, 焼成は良好

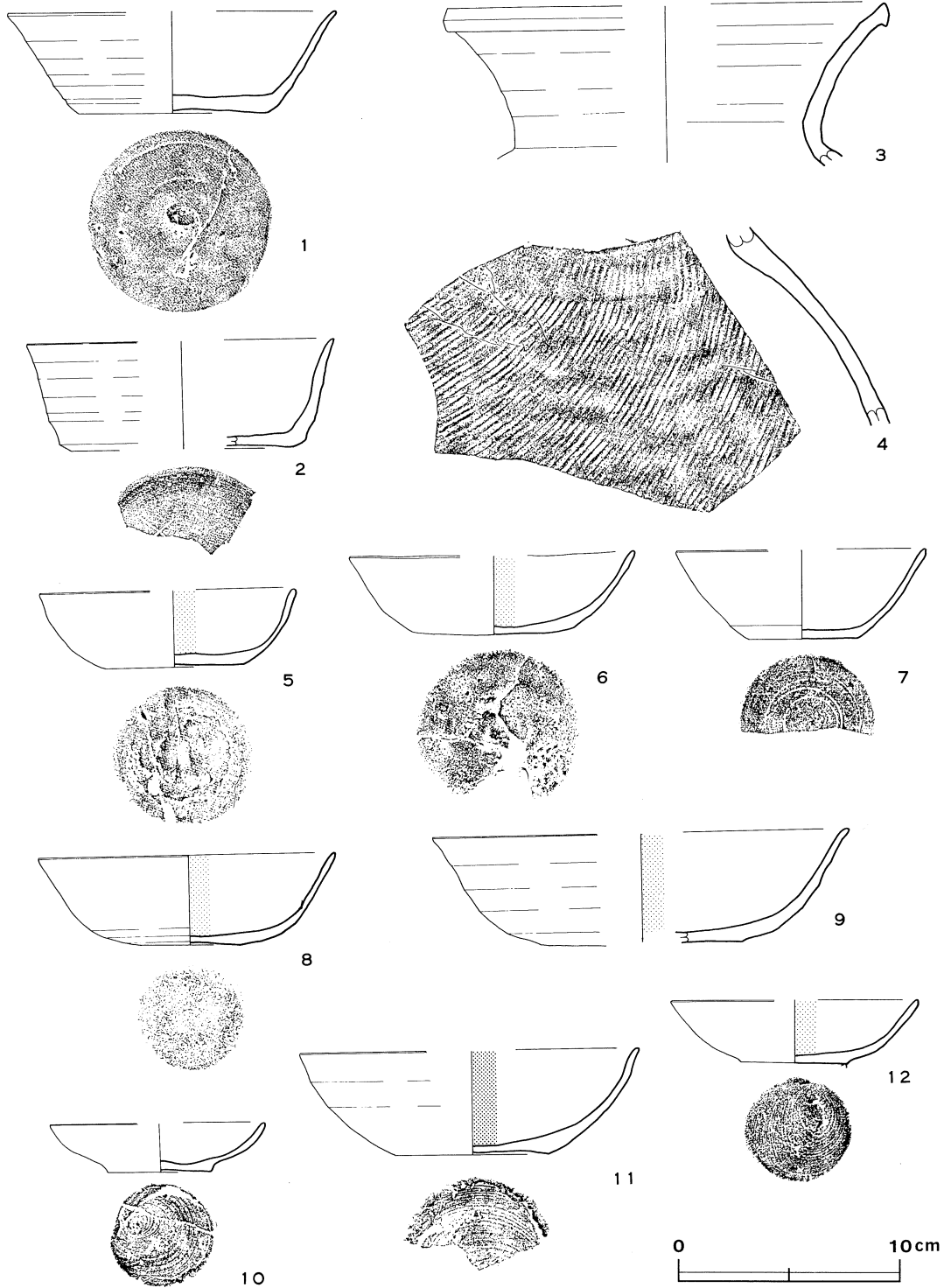


Fig. 43 調査区出土遺物(1)

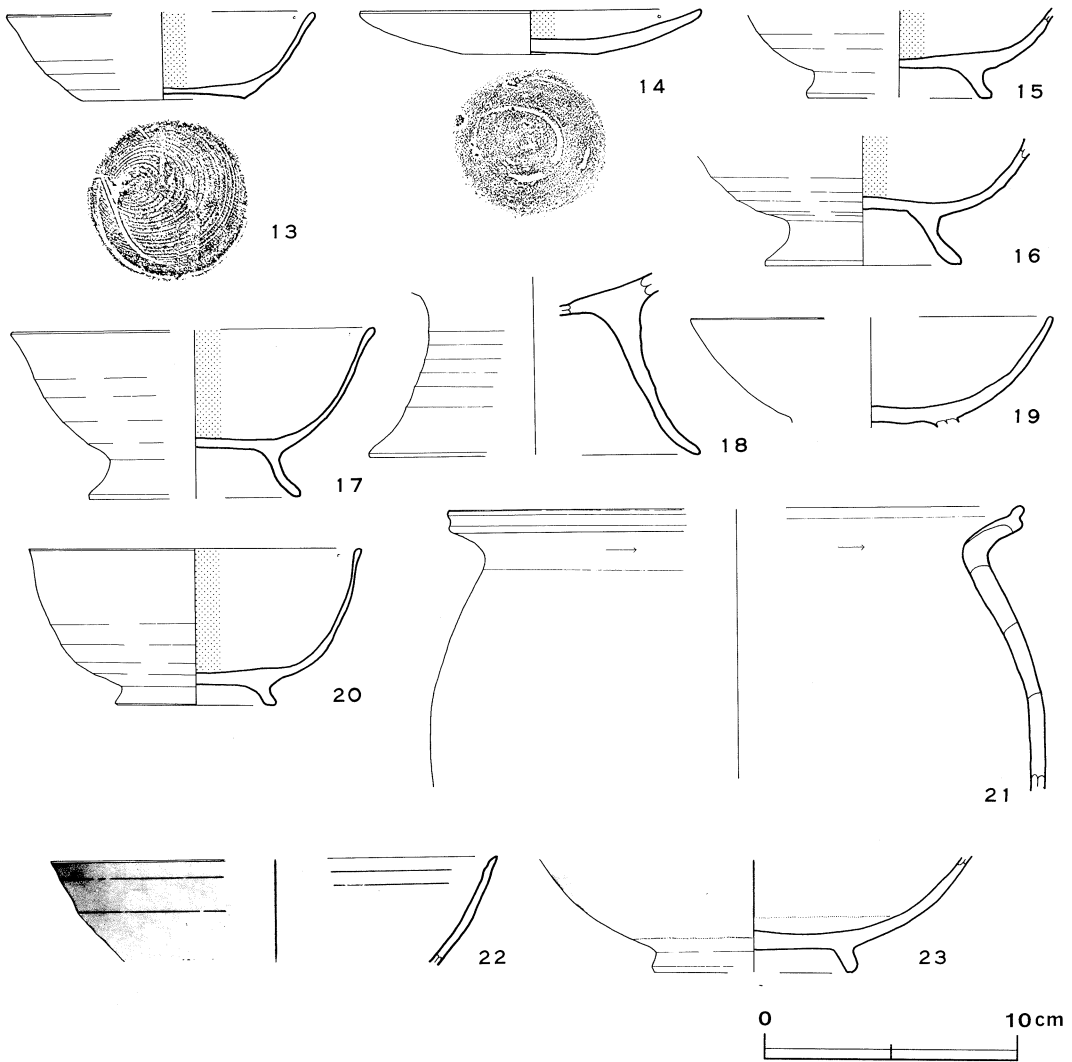


Fig. 44 調査区出土遺物(2)

である。

4 05-20区出土の須恵器の甕形土器の胴部片で、外面には平行叩き痕がみられ、器壁は0.7～1.0cmほどである。色調は灰色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

5 口径11.6cm，器高3.5cm，底径6.4cmほどの09-30区出土の坏形土器で、口縁部は約 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり、底部は回転篋切後一部に指によるなで整形がなされている。体部外面はロクロ整形、内面は黒色研磨されている。色調は外面褐色，内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

6 口径13.0cm, 器高3.6cm, 底径7.4cmほどの03-19区から出土した坏形土器で, 現存部は約 $\frac{2}{3}$ である。口縁部は底部より内彎ぎみに開いて立ちあがり, 底部は回転篋切されているがかなり摩耗している。体部外面はロクロ整形でかなり摩耗しており, 内面黒色研磨されている。色調は外面黒褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は粗雑である。

7 口径11.4cm, 器高4.0cm, 底径5.0cmほどの09-26区より出土した坏形土器で, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり, 底部は回転篋切されている。体部外面はロクロ整形, 内面篋研磨されている。色調は暗茶褐色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は普通であるが, 器外面は摩耗している。

8 口径13.6cm, 器高4.1cm, 底径4.4cmほどの03-21区より出土した坏形土器で, 完形品である。口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり, 底部は回転篋調整されている。体部外面はロクロ整形で下端部が篋整形され, 内面は黒色研磨されている。色調は外面茶褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み, 焼成は良好である。

9 口径19.0cm, 器高5.0cm, 底径9.0cmほどの05-17区より出土したやや大ぶりの坏形土器で, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部より外反ぎみに開いて立ちあがり, 底部には回転糸切痕がみられる。体部外面はロクロ整形で内面は黒色研磨されている。色調は外面灰褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は良好である。

10 口径9.8cm, 器高2.2cm, 底径4.8cmの14-18区より出土した坏形土器で, 口縁部は約 $\frac{1}{2}$ が残る。口縁部は底部から内彎ぎみに立ちあがり, 底部には糸切痕がみられる。色調は灰褐色で胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は普通である。

11 口径15.4cm, 器高4.7cm, 底径7.0cmほどの04-14区より出土した坏形土器で, 現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は底部より内彎ぎみに開いて立ちあがり, 底部には回転糸切痕がみられる。体部外面はロクロ整形され, 内面は篋研磨されている。色調は暗褐色を呈し, 胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み, 焼成は普通である。

12 口径11.2cm, 器高2.9cm, 底径4.8cmほどの04-15区より出土した坏形土器で, 口縁部は約 $\frac{1}{2}$ が欠損している。口縁部は底部より内彎ぎみに開いて立ちあがり, 底部には回転糸切痕が認められる。体部外面はロクロ整形がなされ, 内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は良好である。

13 口径12.2cm, 器高3.2cm, 底径6.4cmほどの10-25区より出土した坏形土器で, 口縁部は一部が現存しているだけである。口縁部は底部より内彎ぎみに開いて立ちあがり, 底部には回転糸切痕が顕著である。体部外面はロクロ整形され, 内面は黒色研磨されている。色調は外面灰色, 内面黒色を呈し, 胎土中に砂粒・石英等を含み, 焼成は良好である。

14 口径13.6cm, 器高1.7cm, 底径5.4cmほどの04-10区より出土した皿形土器で, 完形品であ

る。口縁部は底部より直線的に開き、底部は回転篋整形されている。体部外面はやや摩耗し、内面は黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み、焼成は良好である。

15 底径7.4cm、現高3.6cmほどの09-30区より出土した口縁部を欠く高台付坏形土器で、高台裾部はやや開き、体部内面は黒色研磨されている。色調は外面灰褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

16 底径7.8cm、現高5.2cmほどの口縁部を欠く高台付坏形土器で、高台部は大きく、裾部でひろがっている。体部外面はロクロ整形、内面は黒色研磨されている。色調は外面褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み、焼成は良好である。

17 口径14.6cm、器高6.6cm、底径8.4cmほどの05-17区より出土した高台付坏形土器で、現存部は約 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は内彎ぎみに開いて立ちあがり、高台部は裾部で開いている。体部外面はロクロ整形、内面約 $\frac{1}{2}$ ほどが黒色研磨されている。色調は外面暗褐色、内面黒色および茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

18 底径13.2cm、現高7.1cmほどの04-14区より出土した足高高台坏の台部であり、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。高台部高は約6cmで、裾部で大きく開いている。体部・台部内外面ともロクロ整形され、色調は灰褐色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は普通である。

19 口径14.4cm、現高4.2cmほどの05-17区より出土した高台部を欠く高台付坏形土器で、口縁部は一部が現存している。体部外面はロクロ整形されているが摩耗がはげしく、内面は篋研磨されている。色調は明茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

20 口径13.2cm、器高6.2cm、底径6.4cmほどの10-24区より出土した高台付坏形土器で、口縁部は底部から内彎ぎみに開いて立ちあがり、高台部は小さい。体部外面はロクロ整形で下端部は篋削りされ、内面は黒色研磨されている。色調は外面褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は良好である。

21 口径23.0cm、現高11.3cmほどの09-26区より出土した甕形土器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ である。口縁部は頸部より外反ぎみに開いてさらに立ちあがり、胴部はそれほど膨らむものではない。口辺部は内外とも横なで整形され、胴部外面は縦位になで整形されている。色調は赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

22 口径17.6cm、現高4.0cmほどの03-11区より出土した灰釉陶器の口縁部片で、現存部は約 $\frac{1}{6}$ である。口縁部は体部から内彎ぎみに大きく開いて立ちあがり、内面には灰褐色の釉がみられる。胎土は堅緻であり、焼成は良好である。

23 底径7.6cm、現高4.5cmほどの01-15区より出土した灰釉陶器の高台付坏形土器で口縁部を欠き、現存部は約 $\frac{1}{2}$ である。高台部はやや小さく、体部は内彎ぎみに大きく開いて立ちあがり、

釉は外面が体部下端以上で内部は底面を除いて施釉され、灰白色を呈している。胎土は緻密で焼成も良好である。

2) 墨書土器 (Fig. 45)

1 01-16区V層出土の坏形土器の口縁部片であり、一字の墨書が認められるが破片のため判読できない。色調は外面暗褐色、内面黒色研磨されて黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

2 03-18区III層出土の坏形土器の体部片であり、一文字以上の墨書が認められるが破片のため判読できない。色調は外面明褐色、内面黒色研磨されて黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・雲母等を含み焼成は普通である。

3 04-15区II層出土の坏形土器の口縁部片であり、一部欠損しているものの二文字の墨書が認められ「中子」と判読できる。色調は外面褐色、内面黒色研磨のため黒色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は良好である。

4 05-04区II層出土の蓋形土器の口縁部片であり、文字の半分は欠落して不鮮明ながら二あるいは三文字の墨書が認められる。「日口匚」あるいは「日匚」であろうか。色調は外面暗褐色、内面黒色研磨のため黒色を呈し、胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

5 06-09区の土器溜り出土の坏形土器で、口径13.0cm、底径7.0cm、器高4.1cmほどで、現存

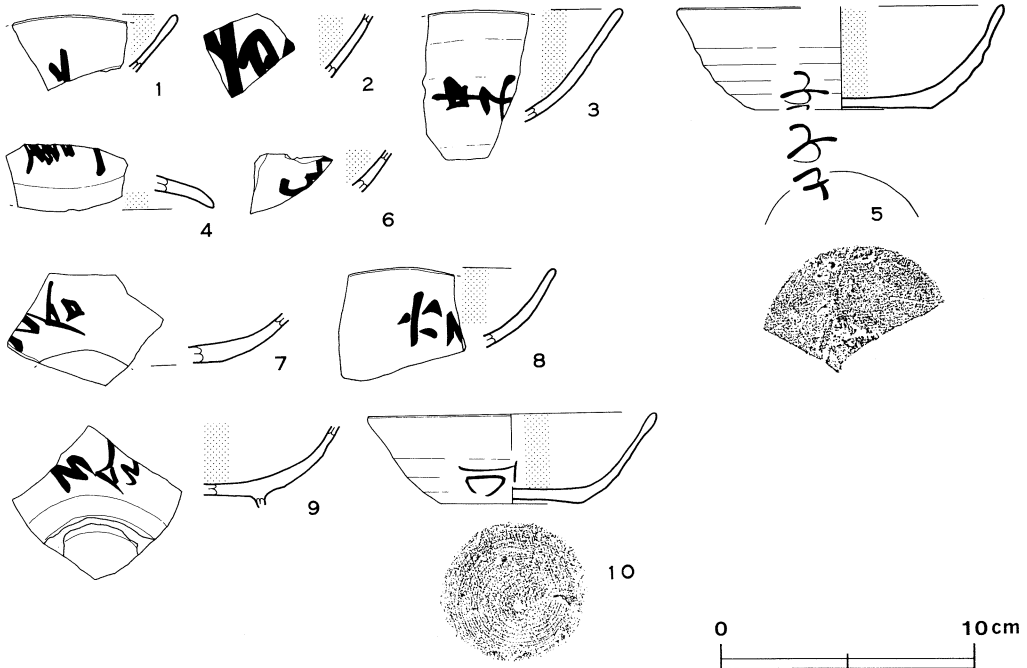


Fig. 45 墨書土器

部は約 $\frac{1}{3}$ ほどである。体部外面にはロクロ整形痕が認められ、内面は黒色研磨されている。また、底部には回転篋整形が認められる。墨書は体部外面下端部から底部にかけて「子子」の二文字がみられる。色調は外面暗茶褐色、内面黒色で、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

6 09-26区Ⅲ層出土の环形土器の体部片であり、一部欠落しているが「□囧」の墨書と考えられる。色調は外面暗褐色、内面黒色研磨されて黒色を呈し、胎土中に砂粒・雲母等を含み、焼成は普通である。

7 09-30区Ⅰ層出土の环形土器の体部片であり、一部欠落しているが「囧合」と墨書されている。色調は外面灰褐色、内面黒色研磨されて黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

8 09-30区Ⅴ層出土の环形土器の口縁部片であり、一部欠落しているが「六囧」と墨書されている。色調は外面褐色、内面黒色研磨されて黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

9 10-25区Ⅱ層出土の高台付环形土器の底部片であり、「万合」と墨書されている。色調は外面灰褐色、内面黒色研磨されて黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

10 出土調査区不明の环形土器である。口径11.6cm、底径5.6cm、器高3.6cmほどで、体部外面はロクロ整形され、内面は黒色研磨されている。また、底部には糸切り痕が認められる。文字は体部下端に一文字が墨書されているが判読されていない。色調は外面茶褐色、内面黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英・微礫等を含み、焼成は普通である。また、外面に煤の付着が認められる。

3) 鉄 製 品 (Fig.46-3~5, 7, 11, 12, 14, 15, 19)

不明鉄器 3は現長9.2cm、最大幅1.6cmほどの刀子状を呈するもので、茎尻部は蕨手状を呈している。断面形状を平棟で平造風であるが刃部はみられない。15は04-15区より出土した板状で中央部が幅広くなる全長6.6cmほどの鉄製品で、形状・用途とも不明である。05-11区より出土した双円状の19は、全長8.6cmほどで用途は不明である。14は現長10.5cmほどの両端部が曲がる形状を呈し、形状・用途とも不明である。

刀 子 4は10-24区より出土した現長5.8cmほどの刀子の鋒部片で、平棟・平造の形状を示している。5は10-28区より出土した現長4.8cmほどの刀子の刃部片である。7は10-25区より出土した現長5.1cmほどの刀子の鋒部片で、刃部へやや彎曲している。いずれも錆化が進んでいる。

鉄 鏃 11は10-25区より出土した現長4.5cmほどの鉄鏃片で、尖頭部および茎部を欠損している。12は現長4.7cmほどの03-19区より出土した柳葉鏃の茎部である。

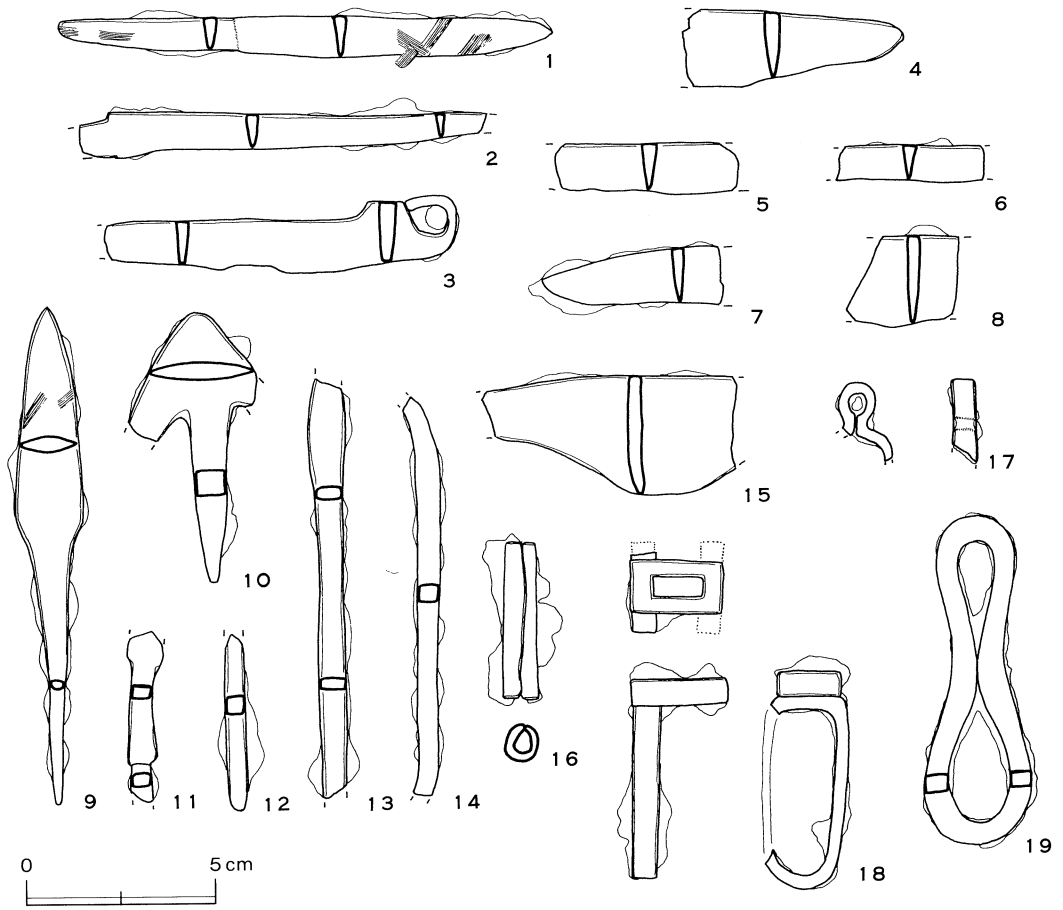


Fig. 46 鉄製品

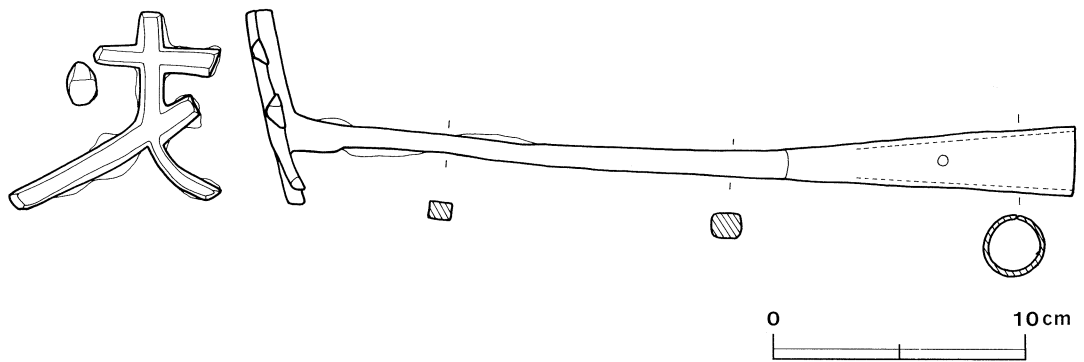


Fig. 47 第8号住居跡出土鉄製品

4) 土 製 品

	名 称	出 土 地	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	色 調	胎 土	焼 成	備 考	図
1	紡 錘 車	03-21区	5.5	5.3	1.9	47	灰 色	砂粒・雲母	良 好	須恵質	Fig.48-2
2	〃	03-18区	6.2	(4.3)	2.3	(50)	明 褐 色	砂粒・石英	良 好	現存部1/2, 篋削り	Fig.48-3
3	〃	09-30区	(4.2)	(2.8)	2.2	(21)	黒 褐 色	砂粒・石英	普 通	現存部1/3	Fig.48-4
4	〃	05-16区	(6.0)	(3.5)	0.7	(15)	明 茶 褐 色	砂粒・スコリア	〃	現存部1/4, 篋削り	Fig.48-5
5	土 玉	05-18区	1.9	2.1	—	9	〃	〃	〃		Fig.48-6
6	土 錘	09-28区	(3.0)	(1.5)	—	(4.5)	暗 褐 色	〃	〃	現存部1/2	Fig.48-7
7	〃	09-25区	(2.4)	1.0	—	(3.0)	明 褐 色	〃	〃	〃	Fig.48-8
8	〃	第8号住居跡	(1.7)	(0.9)	—	(1.0)	暗 褐 色	〃	〃	現存部1/3	Fig.48-9
9	〃	10-24区	(1.8)	(1.1)	—	(1.5)	明 褐 色	〃	〃	〃	Fig.48-10
10	〃	04-17区	(3.1)	(1.1)	—	(2.5)	暗 褐 色	〃	〃	現存部2/3	Fig.48-11
11	〃	03-11区	(5.1)	1.4	—	(6.5)	明 褐 色	〃	〃	〃	Fig.48-12
12	〃	03-11区	(5.0)	1.3	—	(8.0)	〃	〃	〃	〃	Fig.48-13
13	〃	03-11区	(5.3)	1.8	—	(12.5)	〃	〃	〃	〃	Fig.48-14
14	〃	09-28区	(4.7)	1.4	—	(7.0)	〃	〃	〃	〃	Fig.48-15
15	〃	05-07区	(4.7)	1.6	—	(6.5)	〃	〃	〃	〃	Fig.48-16

5) 石 製 品

紡錘車(Fig.48-1) 第18号住居跡より出土した滑石製のもので、長さ4.7cm、厚さ1.9cm、重量61.5gほどである。全体的により研磨されている。

砥石(Fig.49) 全体で4点ほど出土しているが、住居跡内出土のものは1点である。

1 長さ15.5cm、幅6.5cmほどの大型の砥石で01-17区より出土し、砂岩製である。四面ともより磨りへり、片方の頂部を欠損している。

2 長さ11.6cm、幅2.8cmほどの砥石で、第14号住居跡内より出土している。四面とも研磨面として利用されているが、主に表裏面が使用され断面は不整四角形を呈し、砂岩製である。

3 長さ3.8cm、幅4.5cm、厚さ1.5cmほどの砥石の先端部片で、05-03区より出土している。研磨面としては表裏面が利用され、粘板岩製である。

4 長さ4.7cm、幅1.8cm、厚さ1.3~1.8cmほどの砥石片で、10-14区より出土している。研磨面としては四面とも利用されており、凝灰岩質の石材を利用している。

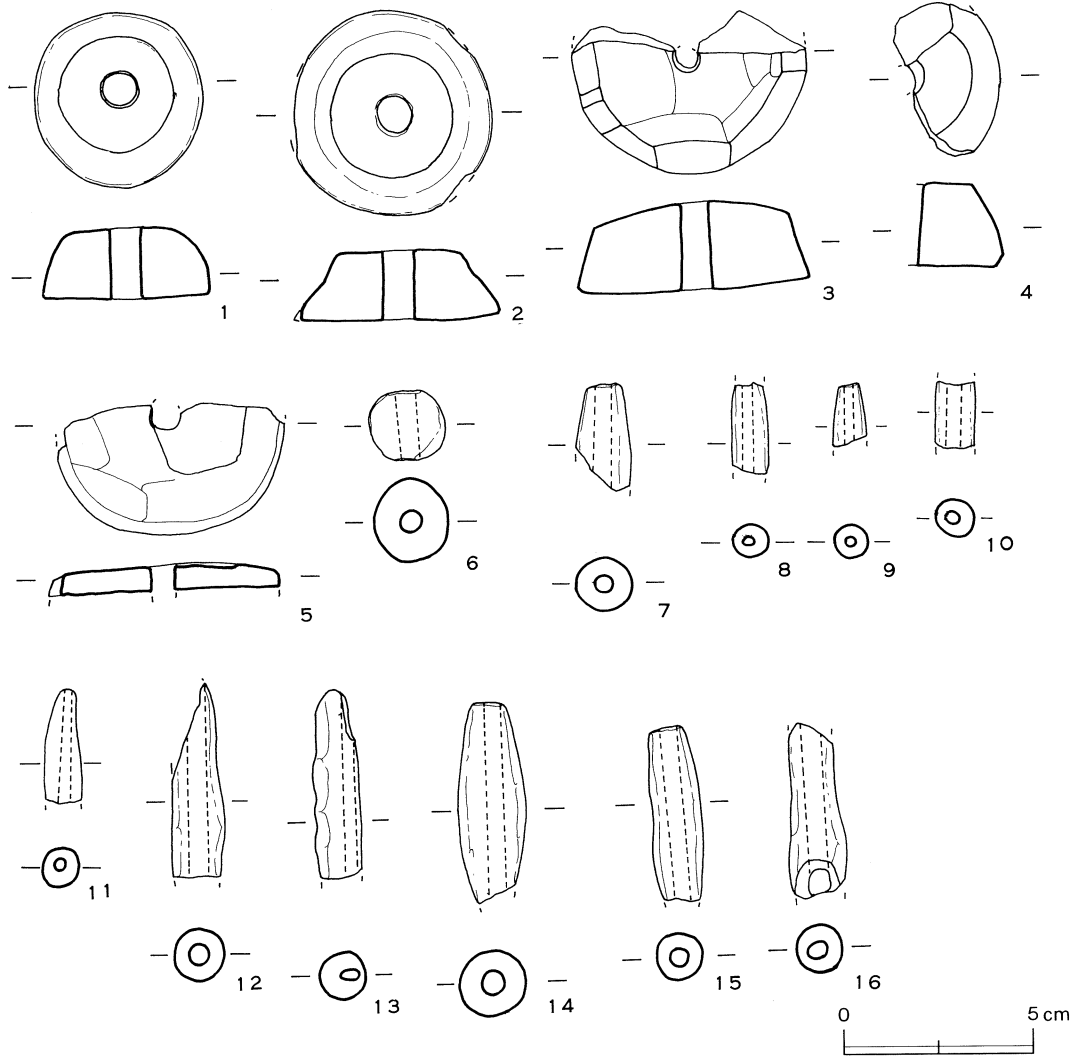


Fig. 48 石・土製品

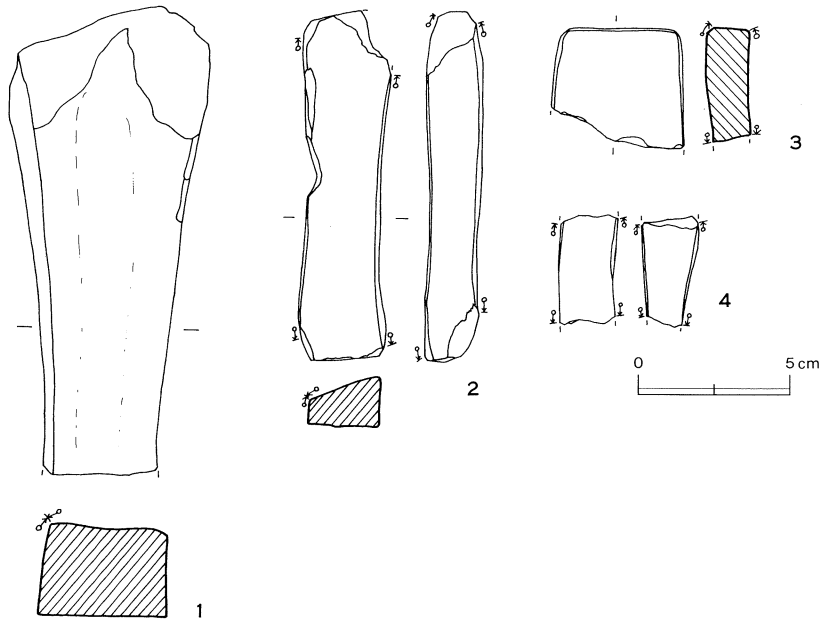


Fig. 49 石 製 品

Ⅳ ま と め

小中遺跡の発掘調査によって検出された遺構・遺物や調査区出土の遺物について記述してきたが、遺構全体の配置図が欠落しているため各住居跡の明確な相互関係については不明である。各住居跡を時代的にみると、第5号住居跡が8世紀末頃に編年されるほかほとんどの住居跡が10世紀代に位置づけることができる。

8世紀末頃の第5号住居跡から出土した須恵器の坏形土器は、口径13～14cm、器高約5cmのものと約4cmのものに大別することができる。底部整形痕に多少のちがいは認められるが同時期のものとする事ができる。いずれの坏形土器もかなり使用されたと考えられ、摩耗痕が顕著である。平安時代に編年される住居跡からの出土土器としては坏・高台坏・甕の組み合わせがみられるが、中でも内黒の坏類が顕著である。

比較的坏類の多く出土している第13号住居跡の例からみれば、口径約11cmのものと約14cmのものに大別することができ、底部整形は回転糸切、静止糸切、回転篋切など三種類の技法がみられる。坏にくらべて高台坏は、身の深さがあり内彎ぎみにたちあがる境状を呈している。そのほかの住居跡から出土した坏の中で、第3号住居跡3 (Fig. 3-7)、第12号住居跡1 (Fig. 22-7)、第15号住居跡1 (Fig. 29-3)、調査区出土10 (Fig. 43-10)など口径11cm未満、器高2～3cmの小型の坏がみられるが、後世の燈明皿に形状的な繋がりが認められる。このような坏が出土する遺構が年代的に新しくなるか、または全体的に時代が下がるのか再考する必要があると考えられる。

各住居跡の複合関係についてみてみれば、第7号住居跡は第8号住居跡より新しく、第3号住居跡は第2号住居跡より新しく、さらに第4号住居跡は第3号住居跡よりも新しい。また、第11号住居跡は第10号住居跡より新しく、第13号住居跡は第12・14号住居跡より新しい時期のものである。しかし、遺物の点からみればそれほど明確な差は認められない。

注目される遺物のひとつとして墨書土器をあげることができる。破片のため解読できないものもあるが34点が出土している。なかでも「千万」、「六万」、「万合」など数をあらわすと思われる墨書がみられ、第9号住居跡「六万」、第13・17号住居跡の「万合」が顕著である。そのほか、偏が欠けているが第7号住居跡から出土している「□(郷)」、第8号住居跡から「丈」、「曹」、調査区出土の「中子」などがみられる。「丈」は丈部の略と考えられ、さらに「曹」は役職をあらわすものであると思われる。

さらに注目される遺物として烙印と考えられる鉄製品がある。烙印は長さ33.0cmほどの大型のもので、基部は11.5cmほどの袋状を呈し、印面は「丈」である。現在のところ茨城県内においては銅印の⁽¹⁾出土は知られているものの烙印の出土については知られていなかった。

全国的な烙印の出土遺跡については未調査であるが、関東地方においては埼玉県2例、東京都2例、神奈川県1例などが知られている。

埼玉県大里郡岡部町北坂遺跡第13号住居跡出土の烙印⁽²⁾は、全長約10cmのもので、「中」の一字がみられる。同郡大里村円山遺跡第18号住居跡の竈内からは、「有」の一字のみられる柄の長さ26cmほどの烙印⁽³⁾が出土しており、印面は7×8cmである。調査者は9世紀代の私牧との関連を想定している。

東京都調布市中耕地遺跡第3号住居跡出土の烙印⁽⁴⁾は、全長24.9cmのもので、「七」の一字がみられる。また、日野市落川遺跡9号土坑出土の烙印⁽⁵⁾は、約25cmのもので、「土」の一字がみられる。

神奈川県においては、平塚市中原上宿遺跡SX01出土の烙印⁽⁶⁾があり、全長23cmほどのもので、「井」の一字がみられる。

これらの烙印はどのように使用されたか不明であるが、増田逸朗氏は北原遺跡の報告の中で文武天皇慶雲四年、摂津、伊勢等に牧印として鉄印を給した記事から牧印とかがえられるとしている。また、中原上宿遺跡では、祭祀的色彩の濃い遺物が多いことから水の祭祀に関連する資料ではないかとしている。

小中遺跡から出土した烙印は住居跡の覆土中から出土したものであり、烙印がおされた木製品などは検出されていない。印面は8cmと大きく、木製品などにおしたと考えるより牛馬におすための烙印ではないかと考えられる。しかし、茨城県内においては、「小野牧」、「長州牧」、「南野牧」のほか公牧の存在は知られていない。ただ『延喜式』卷二十八「諸国驛傳馬」によれば、東海道常陸国の北部には河内、田後、山田、雄薩に各二頭の驛傳馬が置かれていたことなどから小規模な公牧、あるいは私的な牧の存在を考えることができるのではないだろうか。

- (1) 瓦吹 堅 「常陸の古印」『婆良岐考古』10 婆良岐考古同人会 昭和63年4月
- (2) 増田 逸朗ほか 「北坂遺跡」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XI』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第1集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 昭和56年3月
- (3) 若松良一 「8. 大里村円山遺跡の調査」『第19回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会 昭和61年7月
- (4) 乙益 重隆ほか 「11. 調布市中耕地遺跡第3地点の調査」『東京都遺跡調査・研究発表会XI発表要旨』武蔵野文化協会考古学会ほか 昭和61年3月
- (5) 『60年度 日野市落川遺跡調査略報』日野市落川遺跡調査会 昭和62年2月
- (6) 明石 新ほか 『中原上宿 平塚海岸・伊勢原線新設工事に伴う発掘調査報告書』中原上宿遺跡調査団 昭和56年3月

上村田小中遺跡発掘調査会組織(昭和52年8月)

会 長	岡 部 勝 一	大宮町長 土地開発公社理事長
副 会 長	金 子 義 一	大宮町教育委員会教育長
理 事	久下沼 三 男	大宮町総務民生部長
同	茅 根 憲 一	大宮町産業建設部長
同	鴨志田 鶴 吉	大宮町企画財政課長
同	山 崎 康 之	大宮町教育委員会社会教育課長
同	丸 子 亘	上村田小中遺跡調査会団長
同	後 藤 農 夫	大宮町文化財保護委員会長
同	寺 門 誠	上村田区長
同	富 山 穰	日輪ゴム誘致地元委員長
同	嶋 田 孝 一	県教育庁文化課長
同	阿久津 安 吉	大宮町議会議員
監 事	浅 川 信	大宮町収入役
同	広 木 勲	大宮町会計課長
幹 事	奥 村 義 三	大宮町企画財政課長補佐
同	浅 川 克 己	大宮町教育委員会社会教育課長補佐
同	鈴 木 脩 一	大宮町土地開発公社職員

事 務 局(昭和63年3月現在)

海老根 フ ミ	大宮町教育委員会教育長
生天目 晟	大宮町教育委員会次長
根 本 宗 昭	大宮町教育委員会主査
宮 本 正 詞	大宮町教育委員会社会教育係長
大 貫 亨	大宮町教育委員会社会教育主事
瀧 喜代子	大宮町教育委員会主事

発掘作業従事者

植木 律之	藤原 均	市毛美津子	西山 慎二	岡村 良夫	青木 宣子
雨宮 正樹	菅沼 睦美	丸子 静子	丸子 睦美	丸子 和則	富山 穰
阿久津安吉	近江 強	富山孝之介	富山ふさ子	富山 律子	富山富佐子
富山みゆき	阿久津 誠	阿久津 弘	富山 四郎	阿久津武次	阿久津きみえ
阿久津ふみ子	富山みと子	阿久津千春	阿久津惣之介	小泉 三蔵	小泉てる子
小泉はるえ	小泉 たか	阿久津徳司	富山みさほ		

遺物整理作業従事者

根本 宗昭	宮本 正詞	大貫 亨	市毛美津子	瓦吹 堅
-------	-------	------	-------	------

遺物整理作業協力者

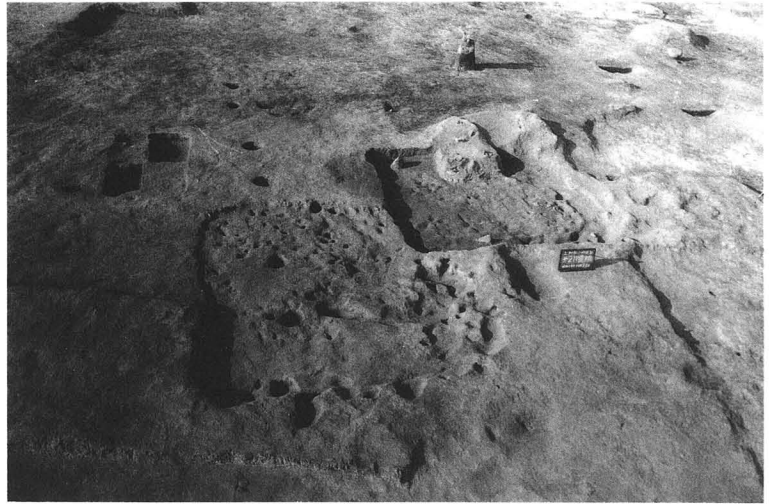
阿久津 久	川井 正一	高根 信和
-------	-------	-------

図 版

(有)平電子印刷所特許
オフセット印刷方法
54：116034

図版一

PL. 1 検出された住居跡群
(A地区)



PL. 2 検出された住居跡群
(B地区)



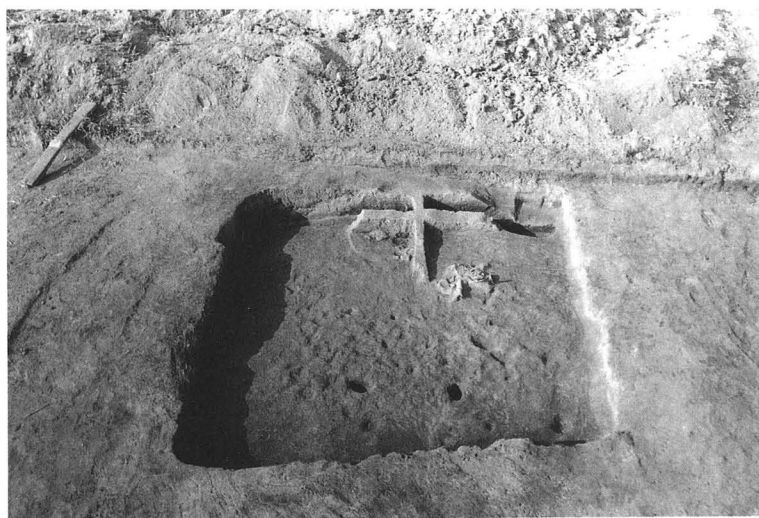
PL. 3 検出された住居跡群
(A地区)



PL. 4 第 1 号住居跡



PL. 5 第 4 号住居跡



PL. 6 第 5 号住居跡



PL. 7 第 6 号住居跡



PL. 8 第 7 号住居跡



PL. 9 第 8 号住居跡



PL.10 第10号住居跡



PL.11 第11号住居跡



PL.12 第12号住居跡



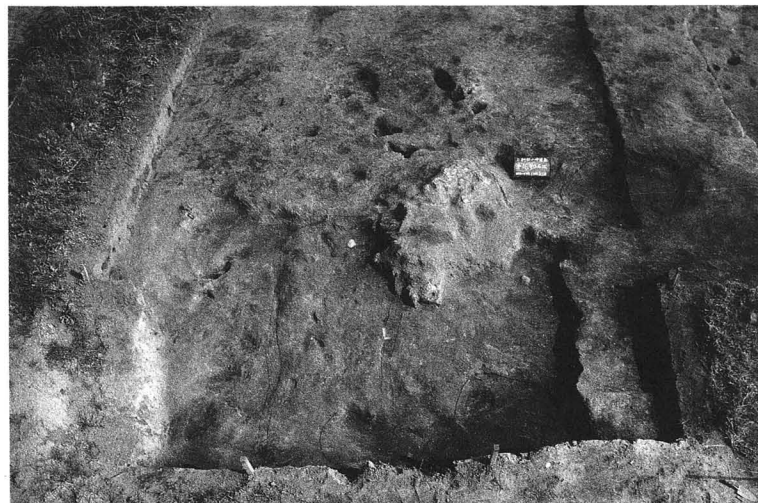
PL. 13 第13号住居跡



PL. 14 第15号住居跡



PL. 15 第16号住居跡



上村田小中遺跡

昭和63年 3 月25日 印刷

昭和63年 3 月31日 発行

発行 茨城県那珂郡大宮町教育委員会

茨城県那珂郡大宮町大宮388-2

TEL 02955(2)1111

印刷 (有) 平 電 子 印 刷 所

福島県いわき市平北白土字西ノ内13

TEL 0246(23)9051